新内藤川広域基幹河川改修事業地内

井原遺跡発掘調査報告書

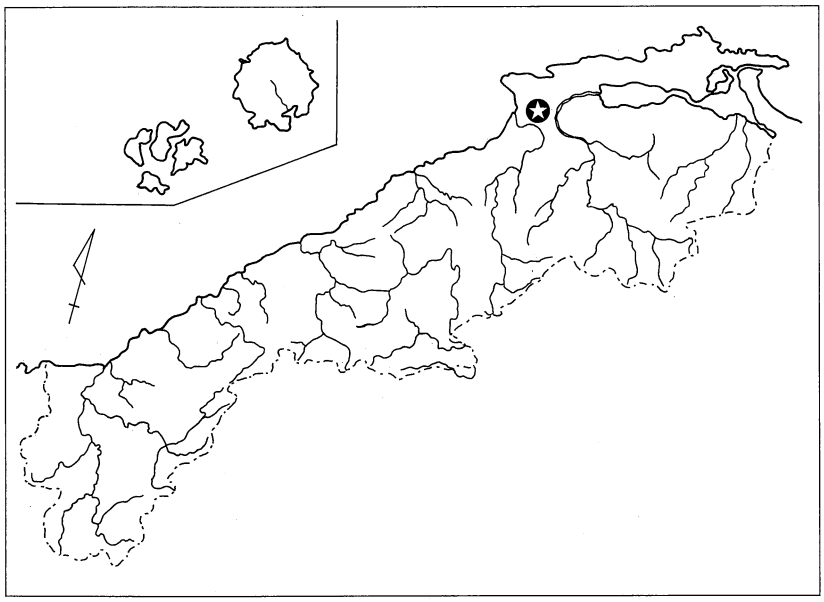
井原遺跡　出土土器

2002年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

新内藤川広域基幹河川改修事業地内

井原遺跡発掘調査報告書



井原遺跡の位置

2002年3月

島根県出雲土木建築事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

井原遺跡周辺空中写真（南から）

Ⅰ区　遺構検出状況空中写真

Ⅰ区　2Gr ピット列検出状況

Ⅰ区　A4Gr SK01 検出状況

Ⅰ区　C4Gr SK01 検出状況

Ⅰ区 SX10 直口壺検出状況

Ⅱ区　SD01 検出状況

Ⅱ区 SD01 遺物出土状況（部分）

Ⅳ区　SE01 検出状況

Ⅴ区・Ⅵ区　遺構検出状況空中写真

序

出雲市教育委員会では、平成12年度から平成13年度にかけて出雲土木建築事務所から委託を受け、新内藤川広域基幹河川改修事業地内に所在する井原遺跡の発掘調査を実施しました。

調査を実施した出雲市高松地区は、市内でも遺跡が少ない地域です。それは、『出雲国風土記』に記されているように、高松地区一帯が「神門水海」に広く覆われていたことが要因です。

しかしながら、「神門水海」周辺の微高地上には白枝荒神遺跡や壱丁田遺跡、知井宮多聞院遺跡などが所在し、生活に適した地域であったことが知られています。

井原遺跡は、これまで遺跡としては知られていなかった地域でしたが、遺跡の一部を発掘調査した結果、出雲平野の集落遺跡としては稀少な古墳時代中期の遺構や遺物が数多く検出され、当該期における人々の生活の様子を探るうえで貴重な資料となりました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたりご理解とご協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

平成14年３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

例　　言

1．本書は、出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市教育委員会が平成12年度から平成13年度にかけて実施した井原遺跡発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。
平成12年（2000）9月25日～平成13年（2001）6月25日

3．発掘調査を行った地番は、次のとおりである。
Ⅰ区　出雲市白枝町1223－1ほか
Ⅱ区　出雲市松寄下町32ほか
Ⅲ区　出雲市松寄下町61ほか
Ⅳ区　出雲市松寄下町33ほか
Ⅴ区　出雲市白枝町1224－1ほか
Ⅵ区　出雲市白枝町1225ほか

4．調査は、次の組織で行った。
平成12年度
〔調査指導者〕足立　克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、池淵　俊一（同　文化財保護主事）
〔事　務　局〕大田　茂（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上　稔（同　課長補佐）
〔調　査　員〕岸　道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）、今岡　司郎（同　臨時職員）
平成13年度
〔調査指導者〕足立　克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、池淵　俊一（同　文化財保護主事）
〔事　務　局〕川上　稔（出雲市文化財室長）
〔調　査　員〕岸　道三（出雲市文化財室副主任主事）、
小村　睦子、佐々木　紀明（同　臨時職員）

5．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SD――溝状遺構、SK――土壙状遺構、SX――落ち込み状遺構、P――ピット
SE――井戸

6．本書で使用した方位は磁北を示す。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8．本書掲載の遺物実測及び写真撮影については、岸、小村、佐々木が行った。

9．本書の執筆、編集は、上記の方々の協力を得て岸が行った。

10. 石器の石材鑑定については、山本　順三（(財）田部美術館学芸員）が行った。

11. ボーリング調査及び地質分析については、川崎地質株式会社に委託して行った。また、地質分析の結果については、同社の峰松拓史氏と文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏に玉稿を賜った。

12. 調査にあたっては、出雲土木建築事務所、株式会社広戸組をはじめ、地元の方々から多大な協力を得た。記して謝意を表します。

13. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。
田中　義昭（島根考古学会会長)、徳岡　隆夫（元島根大学教授)、
中村　唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

14. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

吉川　善美	駒　孝次郎	三嶋　文子	和田　昭七	今岡　実	大島　唯	
稲村　玉枝	金森　光雄	宝生千賀子	桐原　竹夫	公田　悦朗	神門　幸子	
秦　幸正	藤江　実	原　重男	小村　隆雄	吉田　敏夫	前島　利輝	
周藤　俊也	富田　勉	長島　節子				

15. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

石川　桂子	永田　節子	田部　美幸	河井　栄子	阿久津洋子	鵜口　令子
岩崎　晶美	児玉　真季	遠藤　恭子	荒木恵理子		

目　　次

カラー図版
序
例言
本文目次
挿図目次

Ⅰ．調査に至る経緯……1

Ⅱ．位置と環境……3

Ⅲ．Ⅰ区の調査
　1．発掘調査の概要……7
　2．遺構と遺物……15

Ⅳ．Ⅱ区の調査
　1．発掘調査の概要……73
　2．遺構と遺物……75

Ⅴ．Ⅲ区の調査
　1．発掘調査の概要……89
　2．遺構と遺物……93

Ⅵ．Ⅳ区の調査
　1．発掘調査の概要……107
　2．遺構と遺物……108

Ⅶ．Ⅴ区の調査
　1．発掘調査の概要……117
　2．遺構と遺物……119

Ⅷ．Ⅵ区の調査
　1．発掘調査の概要……123
　2．遺構と遺物……124

Ⅸ．総括……139

Ⅹ．自然科学分析……143
　1．井原遺跡におけるプラントオパール分析（渡辺正巳）……143
　2．井原遺跡におけるボーリング調査（峰松拓史）……147

図版……図版１～図版44

挿　図　目　次

Ⅰ．調査に至る経緯

第１図　試掘トレンチ位置図……１

第２図　試掘トレンチ堆積土層図……１

第３図　発掘調査区位置図……２

Ⅱ．位置と環境

第４図　井原遺跡周辺の遺跡……３

第５図　井原遺跡近辺の遺跡……４

第６図　古墳時代中期の遺跡……５

Ⅲ．Ⅰ区の調査

第７図　Ⅰ区遺構配置図（１～７Gr)…９～10

第８図　Ⅰ区遺構配置図（７～15Gr)…11～12

第９図　Ⅰ区堆積土層図……13～14

第10図　A9Gr SK01実測図……15

第11図　A9Gr SK01出土遺物実測図（１)……15

第12図　A9Gr SK01出土遺物実測図（２)……16

第13図　B9Gr SK01実測図……16

第14図　B9Gr SK01遺物出土状況実測図……17

第15図　B9 Gr SK01出土遺物実測図……17

第16図　C12 Gr SK03実測図……17

第17図　C12 Gr SK03出土遺物実測図……18

第18図　Z12 Gr P02実測図……18

第19図　SD01実測図……19

第20図　SD01出土遺物実測図……20

第21図　SD03実測図……21

第22図　SD03出土遺物実測図……22

第23図　SD04実測図……23

第24図　SD04出土遺物実測図……23

第25図　SD05～SD07実測図……24

第26図　SD05～SD07出土遺物実測図（１)…26

第27図　SD05～SD07出土遺物実測図（２)…27

第28図　C4Gr SK01実測図……27

第29図　C4Gr SK01遺物出土状況実測図……28

第30図　C4Gr SK01出土遺物実測図……28

第31図　A4Gr SK01実測図……29

第32図　A4Gr SK01遺物出土状況実測図……29

第33図　A4Gr SK01出土遺物実測図……30

第34図　B4Gr SK01実測図……31

第35図　C3Gr P05実測図……31

第36図　C3Gr P05出土遺物実測図……32

第37図　B5Gr P01実測図……32

第38図　B5Gr P01出土遺物実測図……32

第39図　A2Gr P10・P11実測図……33

第40図　B3Gr P02・P03実測図……33

第41図　C3Gr P01実測図……34

第42図　A5Gr P04・P05実測図……34

第43図　２～3Grピット列検出状況実測図…35

第44図　旧河道実測図……37

第45図　SD10実測図……39

第46図　SD10出土遺物実測図（１)……40

第47図　SD10出土遺物実測図（２)……42

第48図　SD10出土遺物実測図（３)……44

第49図　SX10実測図……45

第50図　SX10出土遺物実測図（１)……47

第51図　SX10出土遺物実測図（２)……48

第52図　SX12実測図……49

第53図　SX12出土遺物実測図……51

第54図　A11Gr P01実測図……52

第55図　A11Gr P06実測図……52

第56図　A11Gr P03実測図……53

第57図　B11Gr P01実測図……53

第58図　A14Gr P05実測図……54

第59図　A11Gr P14出土遺物実測図……54

第60図　A12Gr P01出土遺物実測図……54

第61図　遺構に伴う出土遺物実測図……55

第62図　遺構外出土遺物実測図（１)……56

第63図　遺構外出土遺物実測図（２)……58

Ⅳ．Ⅱ区の調査
第64図　Ⅱ区遺構配置図……74
第65図　SD01実測図……75
第66図　SD01出土遺物実測図（1）……76
第67図　SD01出土遺物実測図（2）……78
第68図　SD01出土遺物実測図（3）……80
第69図　P03実測図……81
第70図　遺構外出土遺物実測図……82
Ⅴ．Ⅲ区の調査
第71図　Ⅲ区堆積土層図……90
第72図　Ⅲ区遺構配置図……91～92
第73図　SD01実測図……93
第74図　A5Gr SK01実測図……94
第75図　A5Gr SX03実測図……94
第76図　A6Gr SX01実測図……95
第77図　A6Gr SX02実測図……95
第78図　A7Gr SX03実測図……96
第79図　A8Gr SX01実測図……96
第80図　A8Gr SX01出土遺物実測図……97
第81図　A9Gr SX03実測図……97
第82図　A9Gr SX04実測図……97
第83図　A1Gr P03実測図……98
第84図　A2Gr P14実測図……98
第85図　A4Gr P02実測図……98
第86図　A6Gr P09実測図……99
第87図　A6Gr P125実測図……99
第88図　A8Gr P01実測図……100
第89図　7～9Grピット列検出状況実測図…101
第90図　遺構外出土遺物実測図……102
Ⅵ．Ⅳ区の調査
第91図　Ⅳ区遺構配置図……109～110
第92図　SE01実測図……108
第93図　SE01井戸枠検出状況実測図……111
第94図　SE01出土遺物実測図……112
第95図　SX01実測図……113
第96図　SX01出土遺物実測図……113
第97図　遺構外出土遺物実測図……114
Ⅶ．Ⅴ区の調査
第98図　Ⅴ区遺構配置図……118
第99図　SD01実測図……119
第100図　B2Gr SK01実測図……120
第101図　A1Gr P01実測図……120
第102図　出土遺物実測図……121
Ⅷ．Ⅵ区の調査
第103図　Ⅵ区遺構配置図（南側）……125～126
第104図　Ⅵ区遺構配置図（北側）……127～128
第105図　Ⅵ区堆積土層図……129～130
第106図　C5Gr SK02実測図……124
第107図　B4Gr SK01実測図……124
第108図　B4Gr SK02実測図……131
第109図　B4Gr SK03実測図……131
第110図　SK03出土遺物実測図……132
第111図　B4Gr SX02実測図……132
第112図　C5Gr SD01実測図……133
第113図　C5Gr SD02実測図……134
第114図　B2Gr SX01実測図……135
第115図　B3Gr SX02実測図……135
第116図　D6Gr SD01実測図……136
第117図　SD01出土遺物実測図……137
第118図　遺構外出土遺物実測図……137
Ⅹ．自然科学分析
第119図　調査地点の位置……143
第120図　試料採取地点……143
第121図　平面採取のプラント・オパール
ダイアグラム……144
第122図　No.4地点のプラント・オパール
ダイアグラム……144
第123図　ボーリング地点……147
第124図　BP-1の地質柱状図……148
第125図　BP-2の地質柱状図……148
第126図　BP-4の地質柱状図……150
第127図　地質断面図……151

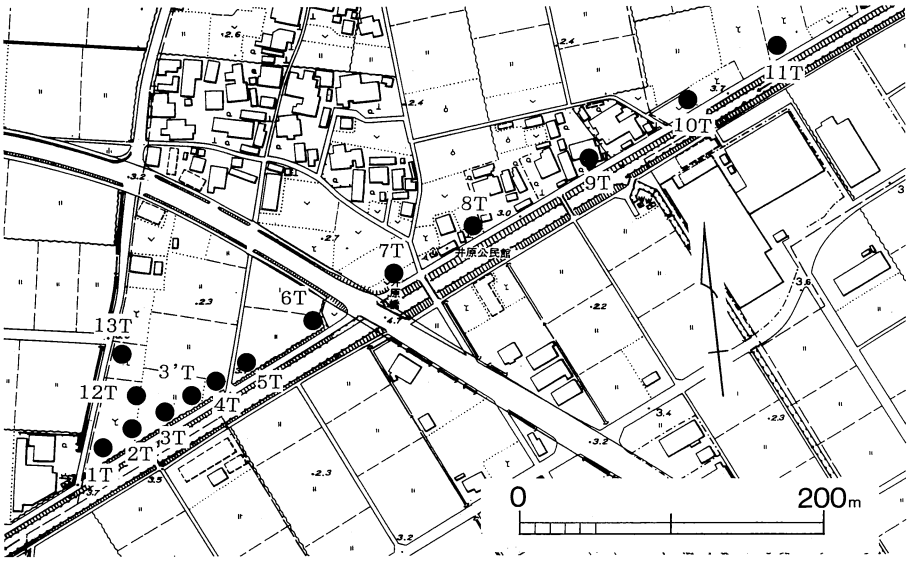
Ⅰ．調査に至る経緯

平成12年（2000）５月８日、出雲土木建築事務所より新内藤川広域基幹河川改修事業地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は周知の遺跡とはなっていなかったが、付近には白枝荒神遺跡[1]や矢野遺跡[2]といった大集落遺跡が存在する位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することにした。

試掘調査は同年５月17日から18日にかけて12カ所のトレンチを設定して実施した（第１図）。その結果、第１トレンチ、第３トレンチで弥生時代終末期と考えられる土壙や土器を検出し、第２トレンチでは古墳時代の須恵器が出土したことから、当該地には弥生時代終末期から古墳時代にかけての遺跡が存在していることが確認された。

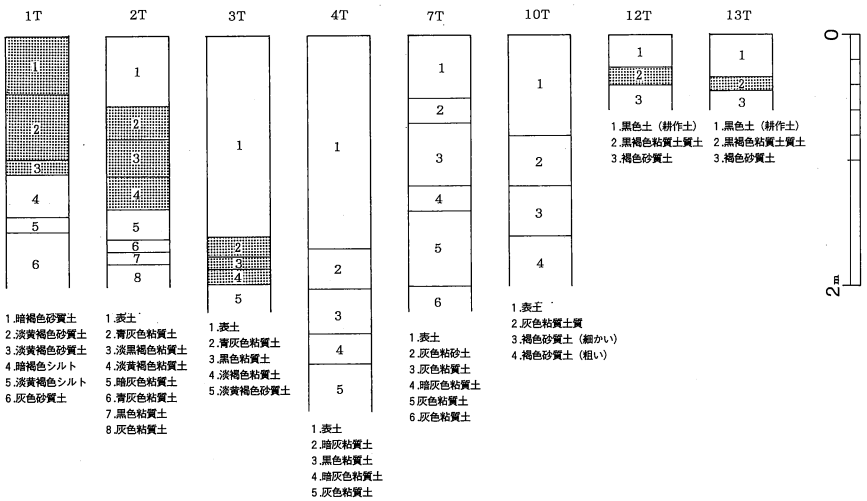
なお、第３トレンチから第11トレンチにおいては、遺構・遺物とも確認されなかったため、遺跡としては第３トレンチ以西に広がりをもつものと予想された。

また、平成13年（2001）２月27日には、同事業に伴う幹線道路、ポンプ舎の移設予定地においても同様な照会があったため、第12、13トレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、弥生土器や土師器・須恵器などの遺物が出土したほか、ピットや土壙などの遺構が検出されたことから、遺跡の範囲はさらに北方に広がることが予想された。



第１図　試掘トレンチ位置図

各トレンチでの堆積土を第２図に示しているが、東に向かって基盤層が低くなる傾向にある。現状では西側は畑地、東側は水田として利用され、水田面で50cm程度標高が低くなっている



第２図　試掘トレンチ堆積土層図

が、この状況は、旧地形をある程度踏襲しているものと予想された。

試掘調査の結果から、事業者である出雲土木建築事務所と協議を重ね、第１トレンチから第３トレンチにかけての全長約80ｍの区域を発掘調査対象とし、新内藤川南側の拡幅部においても同様の区域を調査することで合意した。そして、調査を平成12年（2000）９月から実施することを確認している。

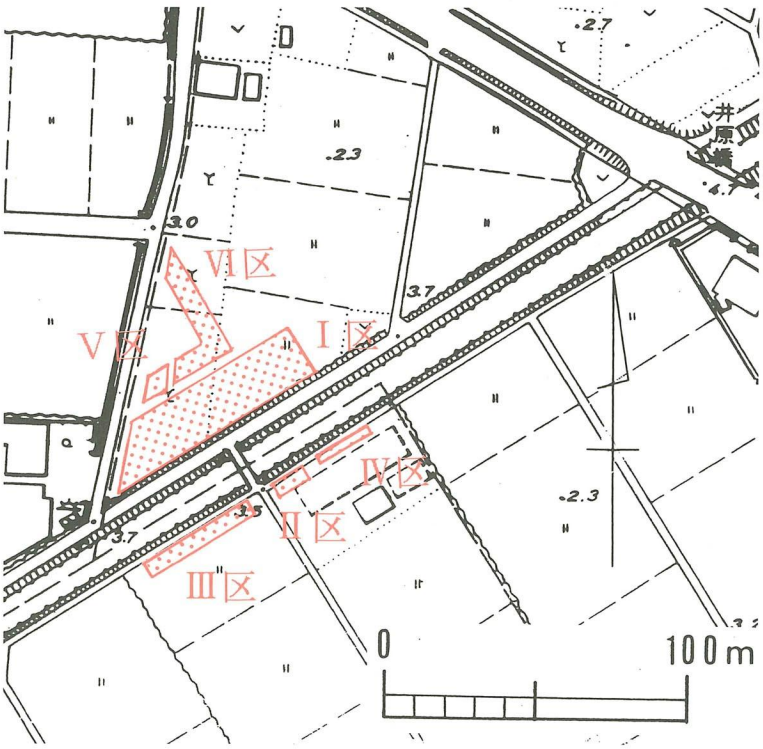
発掘調査に至る手続きについては、まず、新発見遺跡であることから、遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の６）を平成12年７月７日付で島根県教育委員会教育長宛提出し、当該地の字名から井原遺跡と名付けた。また、事業者である出雲土木建築事務所からは、同年７月７日付で埋蔵文化財発掘の通知（同法第57条の３）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第58条の２）を同年10月６日付で島根県教育委員会教育長宛提出している。

発掘調査は、平成12年（2000）９月から準備を進め、９月25日から開始した。調査地は、便宜上、河川や標高の違いなどによって区分し、河川の拡幅および道路敷設予定地の新内藤川北側をⅠ区、河川南側の橋桁部分をⅡ区、Ⅱ区西側拡幅部をⅢ区、Ⅱ区東側の拡幅部をⅣ区とした。また、平成13年２月に実施した試掘調査によって確認された河川北側のポンプ舎移設予定地をⅤ区、道路敷設部分をⅥ区とした（第3図）。

各区の調査面積は、Ⅰ区が東西75m×南北15mの1,125㎡、Ⅱ区が東西10m×南北4mの40㎡、Ⅲ区が東西35m×南北５ｍの175㎡、Ⅳ区が東西18m×南北3mの54㎡、Ⅴ区が東西7m×南北10mの70㎡、Ⅵ区が東西7m×南北65mの455㎡で総発掘面積は、約2,000㎡である。

各調査区では、試掘調査によって確認された包含層までを重機によって取り除いた後、発掘調査を開始した。そして、水処理や冬の寒さに悩まされながらも、平成13年（2001）６月25日に調査を終了した。その間、６月３日には約80名の参加者を得て井原遺跡発掘調査の現地説明会を開催した。

なお、調査終了後には埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第3図　発掘調査区位置図

註

（１）『白枝荒神遺跡』
　　出雲市教育委員会　　1997年

（２）『山陰地域研究　第３号「出雲市矢野遺跡の研究（１）」』
　　島根大学山陰地域総合センター
　　1987年

Ⅱ．位置と環境

（１）遺跡の位置（第４図）

井原遺跡は、山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、出雲市白枝町及び松寄下町との町堺付近に所在している。JR出雲市駅から北西に３ｋｍほど離れた地域に広がっており、現在は東西に新内藤川が貫き、その周辺のほとんどが水田として利用されている。また、新内藤川は、農業用排水路として利用されているが、この川の開削は菱根池の干拓（寛永17年）後に通水が十分行われるようになった以後のことと考えられている。

井原遺跡が所在する周辺には、南に弥生時代の集落遺跡として知られ、「サメ」の絵画土器で名高い白枝荒神遺跡、東には出雲市指定遺跡で、弥生時代を中心とする大集落遺跡である矢野遺跡、その南

第４図　井原遺跡周辺の遺跡

１．井原遺跡　２．中野美保遺跡　３．天神遺跡　４．白枝荒神遺跡　５．小山遺跡
６．矢野遺跡　７．大塚古墳　８．石臼古墳　９．山持川川岸遺跡　10．鳶ヶ巣城跡
11．平林寺山古墳　12．膳棚山古墳群　13．大寺古墳　14．荻杼古墓　15．斐伊川鉄橋遺跡
16．西谷墳墓群　17．今市大念寺古墳　18．塚山古墳　平家丸城跡　20．角田遺跡
21．神門寺境内廃寺　22．上塩冶築山古墳　23．築山遺跡　24．上塩冶横穴墓群　25．大井谷城跡
26．半分城跡　27．三田谷遺跡　28．小坂古墳　29．刈山古墳群　30．半分古墳
31．地蔵山古墳　32．栗栖城跡　33．放れ山古墳　34．大梶古墳　35．古志本郷遺跡
36．田畑遺跡　37．妙蓮寺山古墳　38．浄土寺山城跡　39．地蔵堂横穴墓群　40．宝塚古墳
41．福知寺横穴墓群　42．小浜山横穴墓群　43．知井宮多聞院遺跡　44．山地古墳　45．上長浜貝塚
46．下古志遺跡　47．出雲大社境内遺跡　48．原山遺跡　49．菱根遺跡　50．光明寺三号墓
51．中野西遺跡

には、弥生時代中期の環濠を検出している小山遺跡などが所在している（第５図）。

出雲平野を取り巻く地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

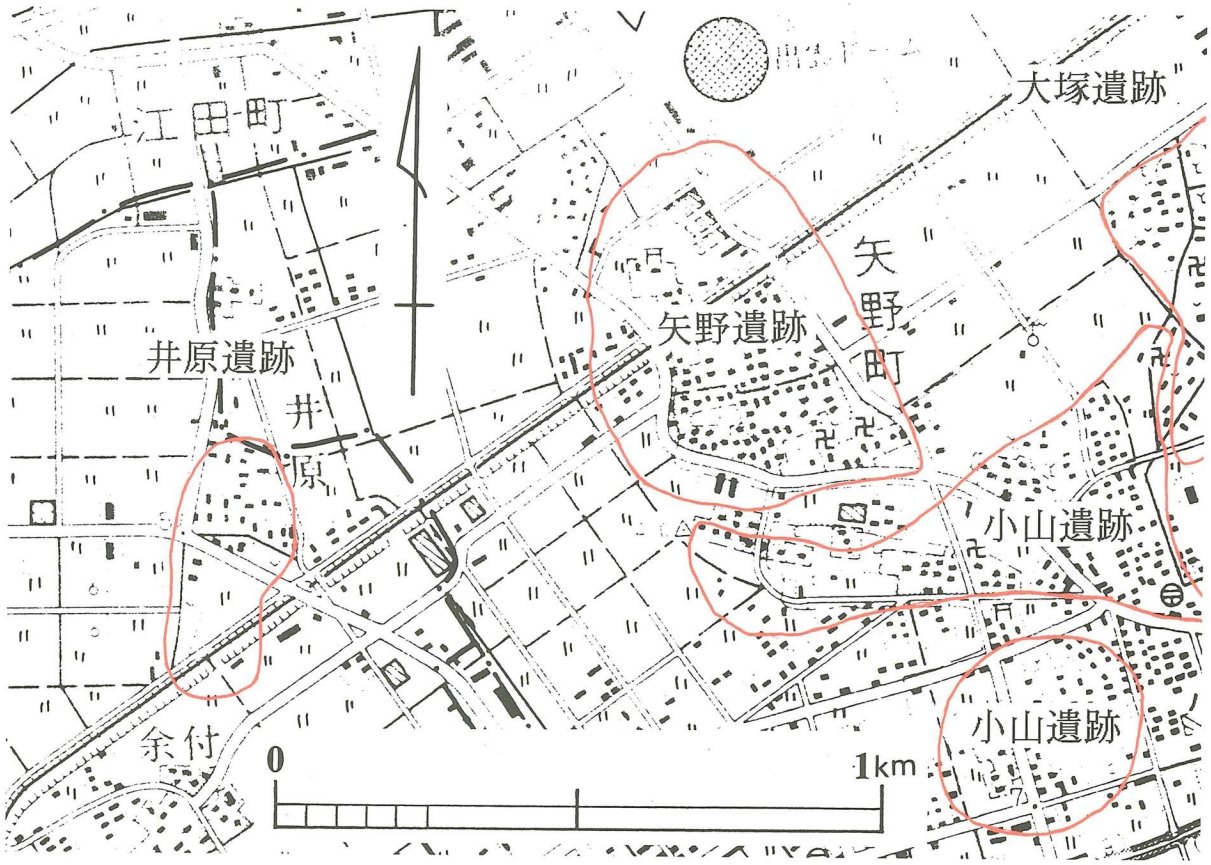
しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して入海のような状況を呈していた潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。そして、斐伊川が西流していた当時は、神門水海の北方に注ぎ、この付近は湿地帯となっていたことが知られている。

このような地形のもと、井原遺跡は入海の河口部にほど近く、北に斐伊川、南に神戸川を臨む旧自然堤防上に立地していたと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。

（２）歴史的環境

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前期末から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡（大社町）が営まれるほか、



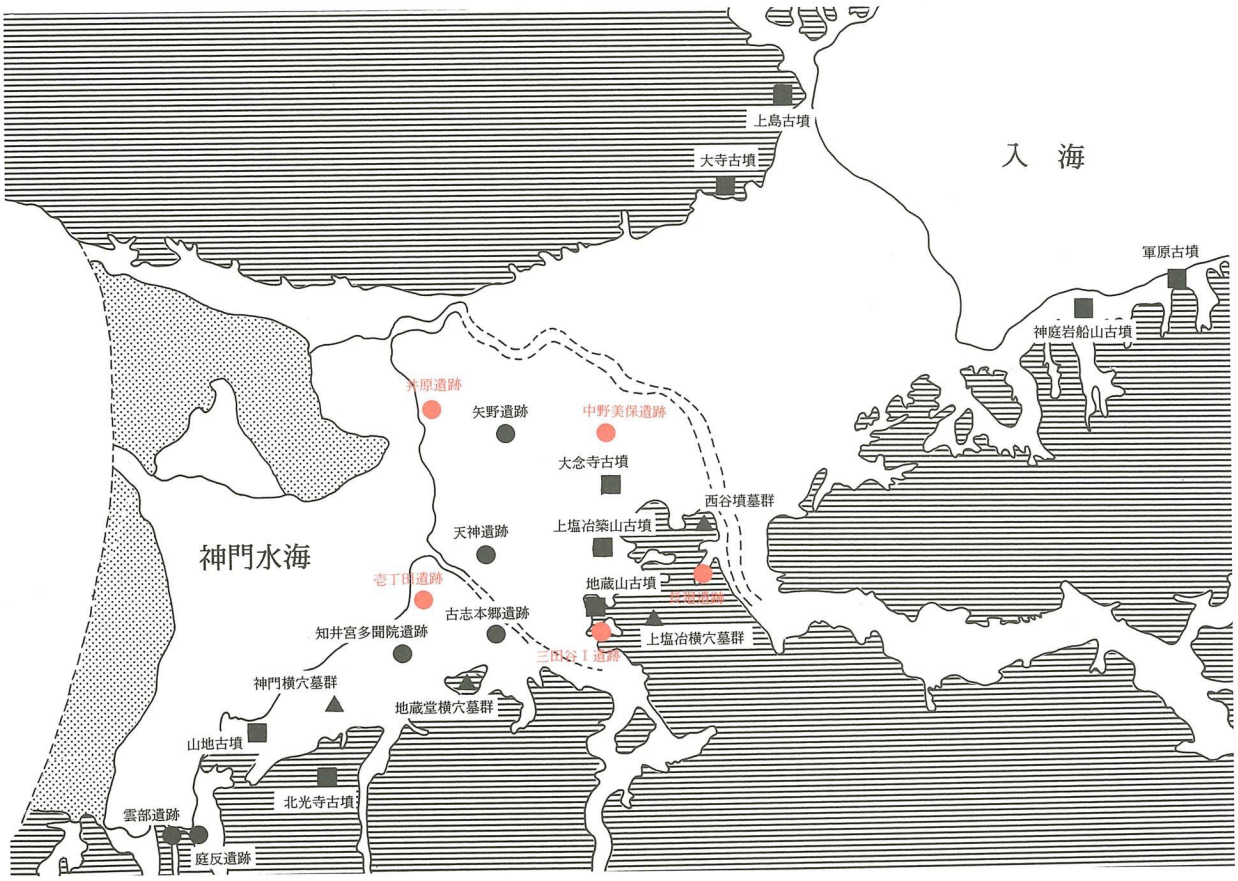
第５図　井原遺跡近辺の遺跡

南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡などからも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡（湖陵町）などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など集落を囲繞する環濠をもつ大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。

また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓６基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60ｍもある３号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。そして、平成13年の発掘調査によって、平野部の中野美保遺跡[(1)]からも四隅突出型墳丘墓が発見され、集落と墓域の関係などを考えるうえで注目されている。

古墳時代になると、弥生時代中期中葉から形成された大規模集落がほぼ同時期に急激に衰退する傾向が認められる。これは、この時期に畿内勢力の進出など、大きな社会的変革があったことが考えられていた。そうした中で、出雲平野には古墳時代中期の遺跡はほとんど確認されていないのが現状であった。しかし、近年の発掘調査によって、今まで空白とされてきた当該期の遺跡が相次いで発見さ



第6図　古墳時代中期の遺跡

れている（第６図）。

斐伊川左岸の南部丘陵地には三谷遺跡や長廻遺跡[2]が所在し、古墳時代中期の土壙や竪穴式住居跡などが確認され、神戸川右岸の南部丘陵地にも三田谷Ⅰ遺跡から多量の遺物とともに竪穴住居跡などが確認されている。一方平野部では、これまで天神遺跡や古志本郷遺跡などで少量の遺物が出土している程度であった。しかし、近年の発掘調査によって四隅突出型墳丘墓が発見された中野美保遺跡や中野西遺跡からは土壙などの遺構に伴って古墳時代中期の遺物が確認されている。いずれも斐伊川左岸の旧自然堤防上に立地していたものと考えられ、平野部においても当該期の人々のくらしが明らかになりつつある。

そして、今回発掘調査を実施した井原遺跡では、当該期の多量の遺物とともに溝や井戸、ピットなどの遺構が確認されている。遺物の出土量は少ないが、壱丁田遺跡や知井宮多聞院遺跡、湖陵町に所在する雲部遺跡や庭反遺跡と同様に神門水海にほど近い位置に所在していることが注意される。

また、当該期の古墳としては、北山山麓に大寺古墳や上島古墳（平田市）が築造されるほか、神門水海に近い南部丘陵地には北光寺古墳や県内では類例の少ない筒型銅器を副葬し、内海航路を押さえた首長の墓と目される山地古墳などが築造される。

古墳時代後期後半には、今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有す大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺など私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓のほか、近年の発掘調査によって、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺３号墓などの初期火葬墓があり、古墳から火葬墓への過渡期の様子が明らかになりつつある。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、出雲大社境内遺跡[3]から平安時代から中世にかけての出雲大社の壮大さを示す３本を束にした柱跡が確認されたことは、信仰の対象としての出雲大社を考えるうえで貴重な発見となっている。そのほか、矢野遺跡からは14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

註

（１）「中野美保遺跡現地説明会資料」　島根県教育委員会　2001年
（２）「長廻遺跡現地説明会資料」　島根県教育委員会　2000年
（３）「出雲大社境内遺跡現地説明会資料」　大社町教育委員会　2000年

Ⅲ. Ⅰ区の調査

Ⅲ．Ⅰ区の調査

1．発掘調査の概要

調査地は、東側が水田、西側が畑地として利用されていた。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北とも５m間隔のグリッドを設定し、東からZ0～Z15Gr、A0～A15Gr、B0～B15Gr、C0～C15Grとした。調査面積は、東西約75m、南北約15mの約1,125㎡である。なお、水処理のために調査区を囲むように約30cmの幅で側溝を設定しているが、この際にも多くの遺物を検出している。

層　　序（第９図）

調査区が東西に長く、東側では造成土と水田耕作土を除くとその下面には20cm程度の堆積が認められるにすぎない。9Grに位置する近世の水路跡の東側における基本的な層序は、耕作土を除くと上層から暗灰色粘質土、暗褐色粘質土、灰オリーブ色土と堆積し、地山である黄褐色シルト質土に達する。この黄褐色シルト質土は褐色粒子を含み、粒子が非常に細かく、西に向かって粘性が強くなり、暗くなっていくのが特徴である。

一方、水路跡を挟んで西側の堆積は東側と大きく異なっている。東側で認められた堆積土は、水路跡を挟んで認められず、地山の標高も西側に向かって徐々に高くなって9～10Grにかけて微高地状に上昇していく。そして、10GrのSD01を境として耕作土を除くとほとんど堆積土は認められず、5mm～１cm大のレキを含む褐色土や淡褐色土が堆積しているにすぎない。このことは、当該地における旧地形が9Grを境にして微高地状に上昇していたことを示すとともに、後世に西側に堆積していた層が大きく削平されているものと考えられる。また、10Gr以降の地山は、灰白色シルト質土に変化し、非常にしまりがある。

遺　　構（第７図・第８図）

遺構は、溝状遺構12、土壙状遺構８、落ち込み状遺構13のほか、ピット状の遺構を多数検出しており、検出数は1,000を超える。遺構が築かれた時期も弥生時代終末期から古墳時代初頭、古墳時代中期、中世、近世のものなど様々であり、これらの遺構が複雑な切合関係を有している。このうち、古墳時代中期の遺構と弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構は互いに重なり合うことなく、10Grを境に東側に古墳時代中期、西側に弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構が配置される。これは、前述したように旧地形と後世の削平によるものと考えられ、地形的に落ち込む東側で弥生終末期から古墳時代初頭の遺物が皆無であったことは、当該期の遺跡としての東限が10Gr辺りであったことが想定される。

近世の遺構は、9Gr以西で確認されており、土壙状遺構3を検出している。いずれも土壙墓と考えられ、古銭や土師器を副葬した隅丸方形のものである。この中には木棺の痕跡をとどめるものや墨書土器を副葬するものも認められ、当該期の葬制を考えるうえで貴重な資料となった。また、Ⅵ区で検出した古墳時代中期の土壙墓とともにこの地域に「死場」という小字名が残っていることが注意される。

中世の遺構はさほど多くないが、9Gr以西において土壙状遺構、ピット状遺構などを検出している。なかでも、15世紀後半から16世紀頃にかけての青磁や白磁が検出されていることが注目される。

古墳時代中期頃の遺構は、9Gr以西に集中しているが、溝状遺構８、土壙状遺構３のほか、ピット状遺構を多数検出している。溝状遺構のうち、後の調査によってⅠ区のSD03とⅡ区のSD01が新内藤川を挟んで一連のものであることが明らかになっている。土壙状遺構は、断面の形状や遺物の出土状況からいずれも井戸と考えられるものであり、完形を含む土器が検出されている。出雲平野における古墳時代中期の井戸は、渡橋沖遺跡[1]で報告されているものの類例が少なく、貴重な資料となった。ピット状遺構は多数検出しているが、なかでも2～3Grにかけてのピット列は北西―南東方向に畝状に続くもので、東側に位置する旧河道と関連した機能をもつものと考えられる。

弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺構は、9Gr以西で溝状、落ち込み状、ピットなど多数の遺構を検出している。いずれも堆積土の状況から上部が大きく削平されているものと考えられるが、SD10･SX10･SX12からは多量の遺物が出土しているとともに、その形態に在地的な特徴をもつものも認められている。

遺　　物

遺物は、東側で認められた造成土を除くと地山である黄褐色シルト質土、灰白色シルト質土の上層に堆積する全ての層に包含しており、弥生土器･土師器･須恵器を中心に、磁器、石器、木製品もわずかに出土しており、遺物の出土量はコンテナ20箱分にも及んでいる。

9Gr以東では、褐色粒子を含む暗灰色粘質土や暗褐色粘質土が安定した遺物包含層となっている。また、遺構内からの出土量も多く、SD03やSD05からは多量の遺物を検出している。一方、9Gr以西では後世の削平により、わずかな堆積土中にも遺物は認められるが、遺構内からの出土量が圧倒的に多い。そのほとんどが弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものであり、特にSD10、SX10、SX12からは多量の遺物が出土している。

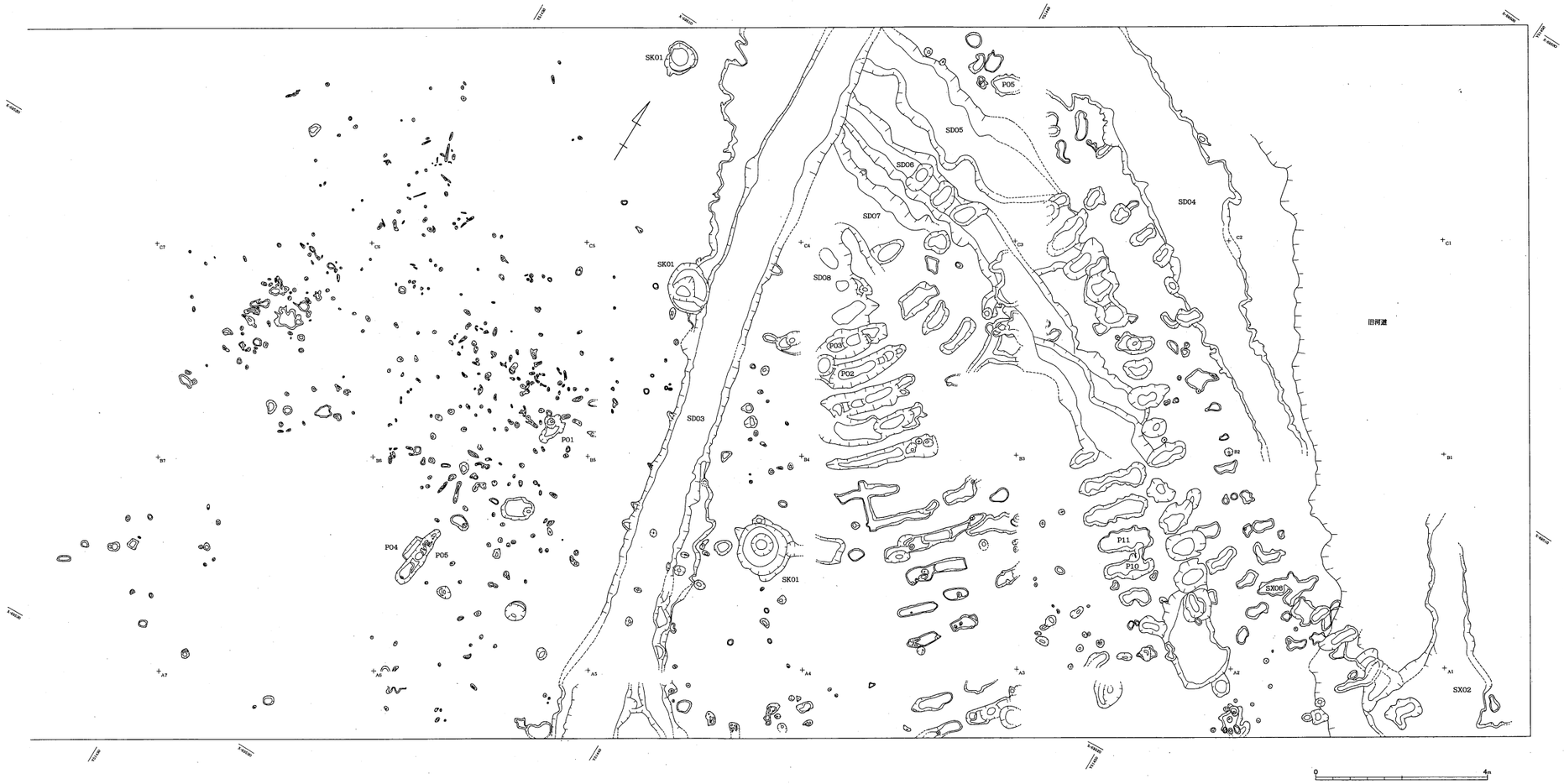
近世の遺物には、土壙墓から出土した古銭や土師器がある。古銭には開元通寶や皇宋通寶が認められ、供献した土師器はほぼ完形で、B9Grで検出した土壙墓からは「さ」と墨書されたものも出土している。

中世の遺物は少ないが、A11Grで検出したP07からは16世紀頃のものと考えられる青磁碗、A12GrのP05からは15世紀後半から16世紀頃にかけての白磁が検出されていることが注目される。

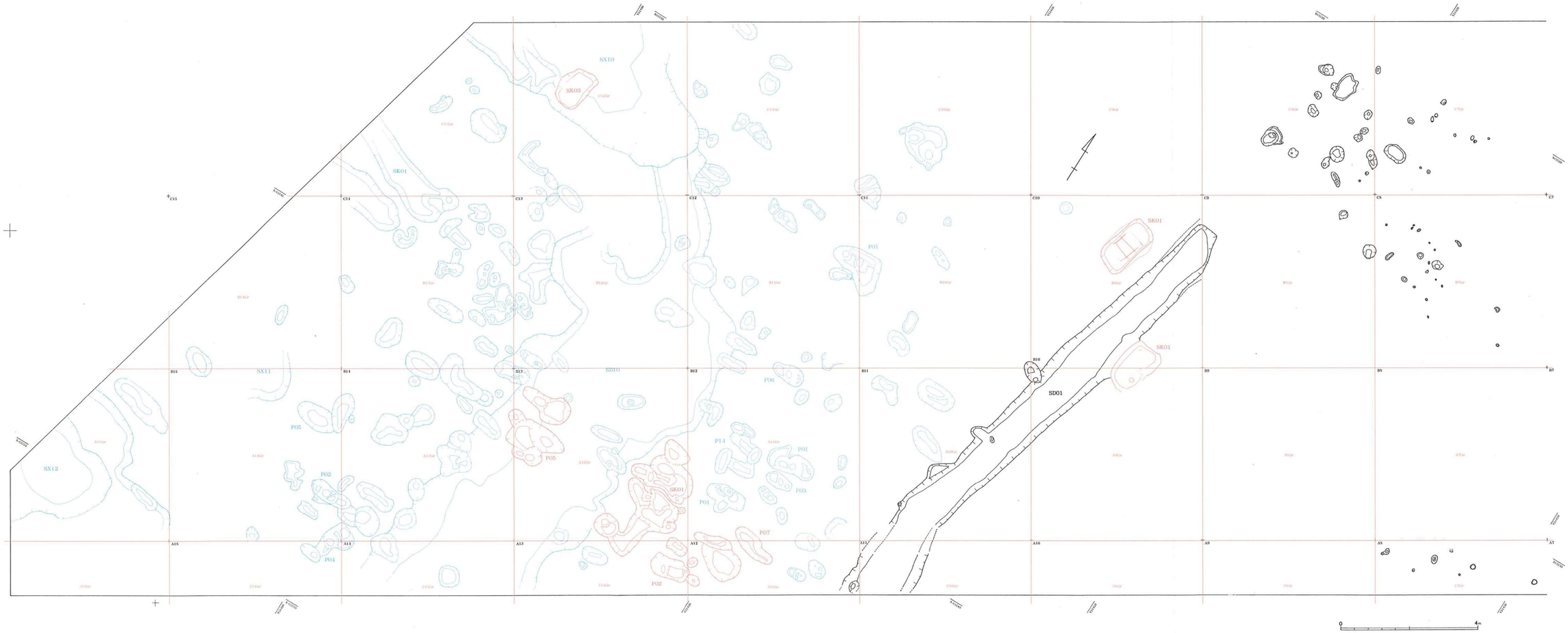
古墳時代中期頃の遺物は、Ⅰ区の中でも最も出土量が多く、土師器壺･甕･高坏･鉢、須恵器高坏･坏蓋･甕などの器種がある。そのほか、砥石として使用された石器が2点出土している。中でも、井戸と考えられる遺構からはほぼ完形の甕や小型丸底壺が検出されたうえ、SD03やSD05などからは西部出雲地方では稀少な山本編年Ⅰ期に相当する初期須恵器が出土しており、貴重な資料となった。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物には、壺･甕･高坏･低脚坏･鉢･器台などの器種があり、バラエティーに富んでいる。低脚坏には器高が高坏との中間に位置するものがあり、器台にも筒部を非常に厚く作るものが認められる。天神遺跡[2]でも指摘されているように在地的な製作技法の違いと考えられる。また、遺構に伴うものではないが、弥生時代中期頃と考えられる甕片が数点出土していることが注目される。

以上のように、当該地は弥生時代終末期頃から近世に至るまで、一時衰退期はあるものの連綿と集落が営まれていたことが窺われる。

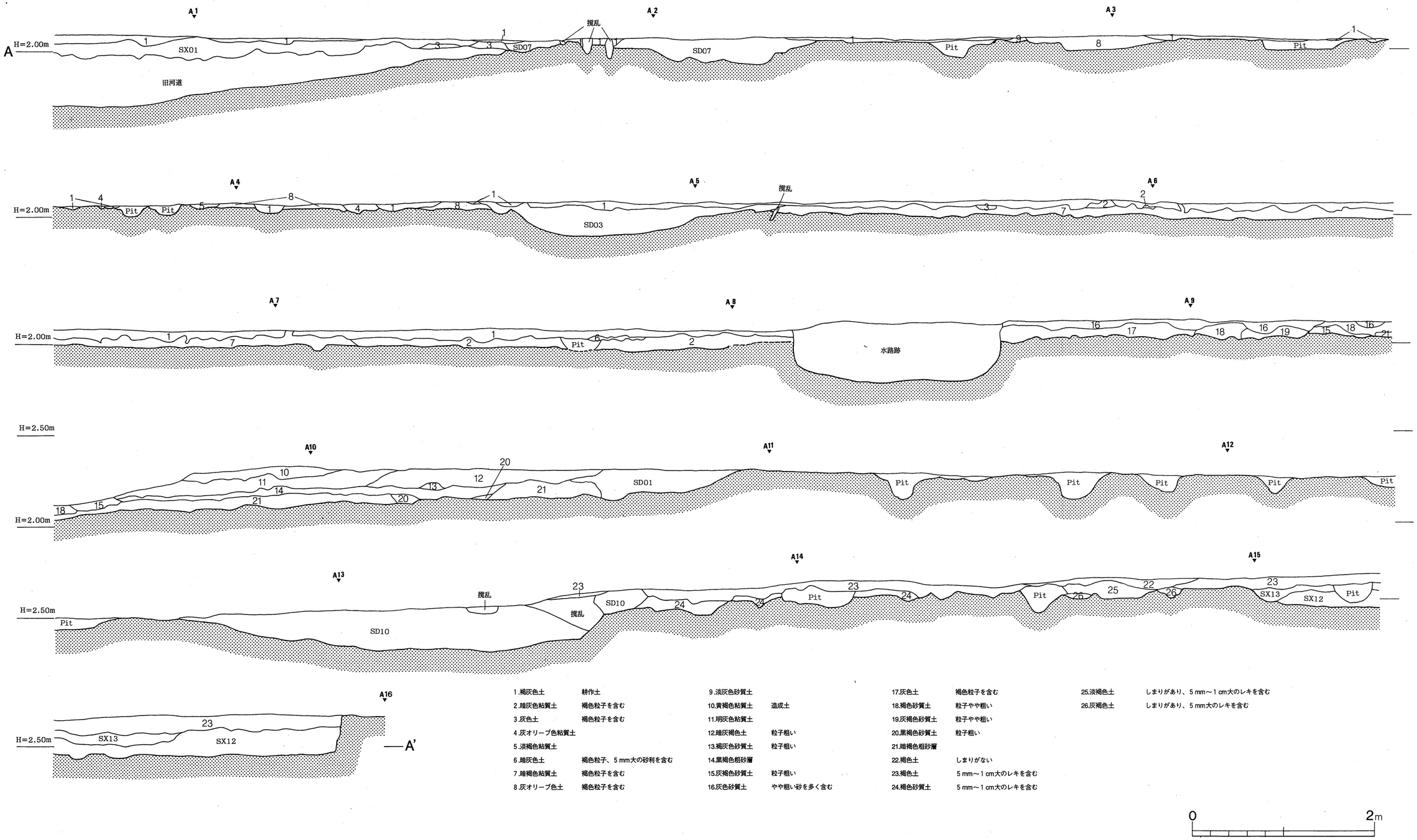


第7図　Ⅰ区遺構配置図（1～7Gr）



※青刷は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構、赤刷は中世・近世の遺構、
黒刷は古墳時代中期の遺構

第8図　Ⅰ区遺構配置図（7～15Gr）



1.褐灰色土	耕作土	9.淡灰色砂質土		17.灰色土	褐色粒子を含む	25.淡褐色土	しまりがあり、5 mm～1 cm大のレキを含む
2.暗灰色粘質土	褐色粒子を含む	10.黄褐色粘質土	造成土	18.褐色砂質土	粒子やや粗い	26.灰褐色土	しまりがあり、5 mm大のレキを含む
3.灰色土	褐色粒子を含む	11.明灰色粘質土		19.灰褐色砂質土	粒子やや粗い		
4.灰オリーブ色粘質土		12.暗灰褐色土	粒子粗い	20.黒褐色砂質土	粒子粗い		
5.淡褐色粘質土		13.褐灰色砂質土	粒子粗い	21.暗褐色粗砂層			
6.暗灰色土	褐色粒子、5 mm大の砂利を含む	14.黒褐色粗砂層		22.褐色土	しまりがない		
7.暗褐色粘質土	褐色粒子を含む	15.灰褐色砂質土	粒子粗い	23.褐色土	5 mm～1 cm大のレキを含む		
8.灰オリーブ色土	褐色粒子を含む	16.灰色砂質土	やや粗い砂を多く含む	24.褐色砂質土	5 mm～1 cm大のレキを含む		

第9図　Ⅰ区堆積土層図

2．遺構と遺物

（1）近世の遺構

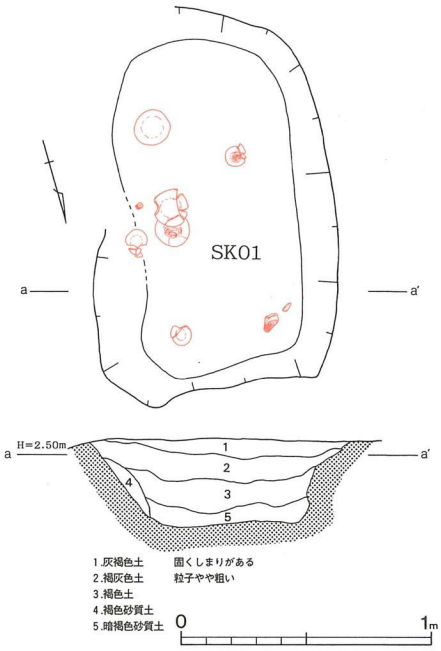
近世の遺構は、土壙状遺構３を検出しているが、いずれも土壙墓と考えられるもので、Ａ９Gr以西の地山直上で検出しており、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。

Ａ９Gr　ＳＫ０１（第10図）

調査区のやや西寄り、地山面が微高地状に上昇するＡ９Grで検出された土壙状遺構である。平面プランは上部及び西側が削平により失われているが、長軸長約1.55m、最大幅97cmの南北に長い隅丸長方形を呈している。検出高は標高2.55mであり、基軸は北北東－南南西を向いている。

覆土には、上層に固くしまりのある灰褐色土が堆積し、中層にはやや粒子の粗い褐灰色土、下層には褐色砂質土・暗褐色砂質土が堆積して地山である灰白色シルト質土に達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて、底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは35cmを測る。なお、SK01は古墳時代中期頃に築かれたと考えられるSD01と切合関係にある。

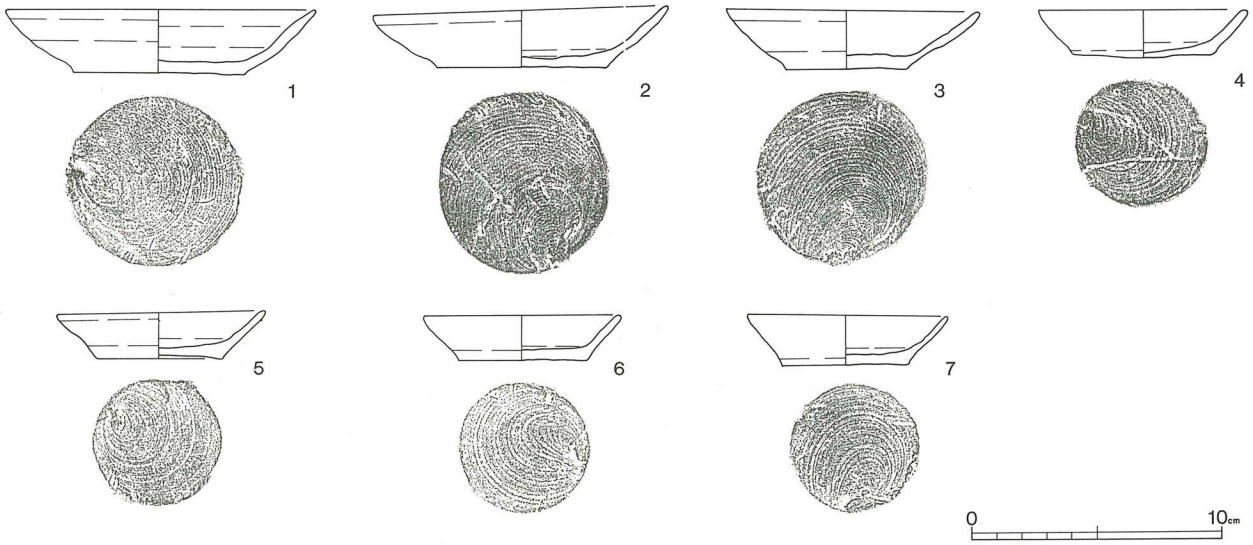
遺構の性格については、遺構の下層に集中して古銭や近世の土師器が出土していることから土壙墓と考えられ、16世紀後半から17世紀半ば頃に築かれたものであろう。



第10図　A9Gr SK01実測図

A9Gr　SK01の出土遺物（第11図・第12図）

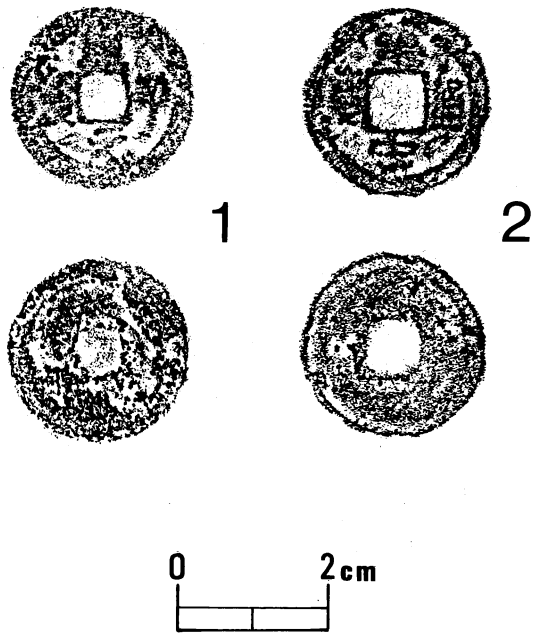
遺物には、近世土師器が７点、古銭が７枚出土している。第11図－１～７は、土師器皿である。これらは、いずれもほぼ完



第11図　A9Gr SK01出土遺物実測図（1）

形で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。4～7は底径が5cm程度と小さく、小皿の部類に入る。

第12図－1は開元通寶である。唐朝のものを国内で模鋳した「鋳写銭」といわれるもので、径2.4cm、重量2.3gを測る。2は、皇宋通寶で、宋朝銭の文字を修飾して母型を作った「加刀鐚銭」といわれるもので、径2.4cm、重量2.6gを測る。なお、その他に5枚出土しているが、付着しているため、文字を読みとることができなかった。いずれにしても開元通寶や皇宋通寶は室町時代後期から江戸時代の前期頃にかけて流通していることから、これらの遺物は17世紀半ば頃までのものと考えられる。



第12図　A9Gr SK01出土遺物実測図（2）

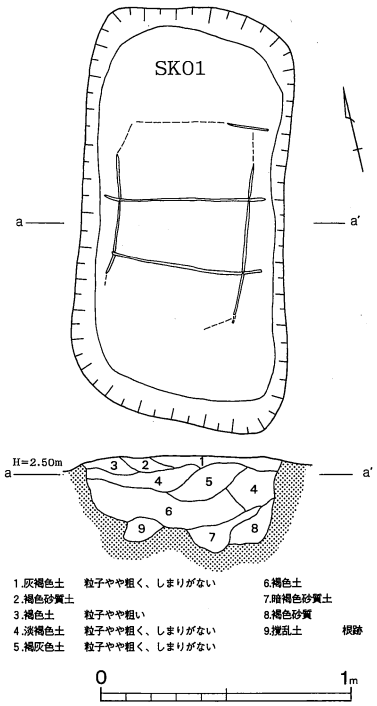
B9Gr SK01（第13図）

調査区のやや西寄り、B9Grで検出した土壙状遺構である。平面プランは、上部が削平によって失われていると考えられるが、長軸長約1.65m、最大幅85cmを測り、南北に長い隅丸長方形を呈している。検出高は標高2.57mであり、基軸は北北東―南南西を向いている。

覆土には、上層から中層にかけて灰褐色土や褐色土などやや粒子が粗くしまりのない褐色系土が堆積し、下層には暗褐色砂質土や褐色砂質土が堆積して地山である灰白色シルト質土に達している。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面は根跡などにより若干の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは38cmを測る。また、遺構の中央底面には木棺を据え置いた跡と考えられる凹みが井桁状に認められる。

遺構の性格は、形状や基軸の方位が前述したA9Gr SK01と類似しているうえ、木棺を据え置いた跡も認められることから木棺墓と考えられる。そして、築かれた時期については土師器の特徴がA9Gr SK01とよく似ていることから、16世紀後半から17世紀半ば頃に築かれたものであろう。

遺物の出土状況を見ると（第14図）、上部が削平されているとはいえ、標高2.43mから2.55mの間に集中して土師器皿が出土している。また、出土位置は木棺が据え置かれていたと考えられる上部にあたることから、これらの遺物は木棺が据え置かれ、



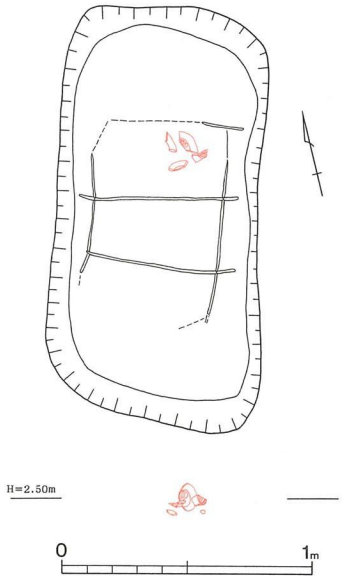
第13図　B9Gr SK01実測図

周辺を埋土した後に供献された可能性が強い。

B9Gr SK01の出土遺物（第15図）

1は、土師器の小皿である。底径5.7cm、口径8.6cm、器高2.05cmを測り、内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、内面に平仮名で「さ」の墨書が認められる。墨書の意味は不明であるが、埋葬された人物との関わりがあるのではないだろうか。2は、土師器皿である。成形は1と同様で完形品である。

これらの遺物は、調整や焼成がA9Gr SK01とよく似ていることから、ほぼ同時期のものと考えられ、16世紀後半から17世紀半ば頃のものと考えられる。

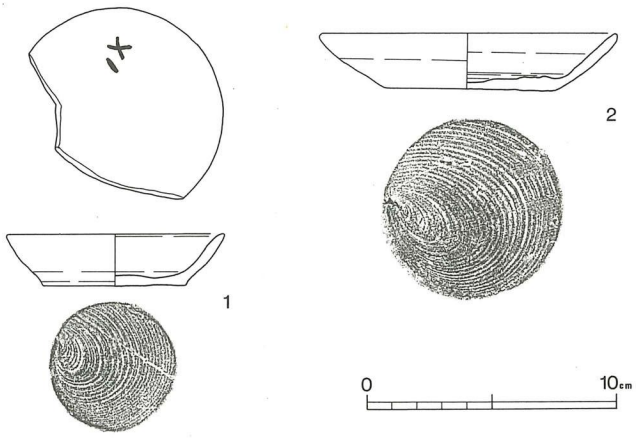


第14図　B9Gr SK01
遺物出土状況実測図

C12Gr SK03（第16図）

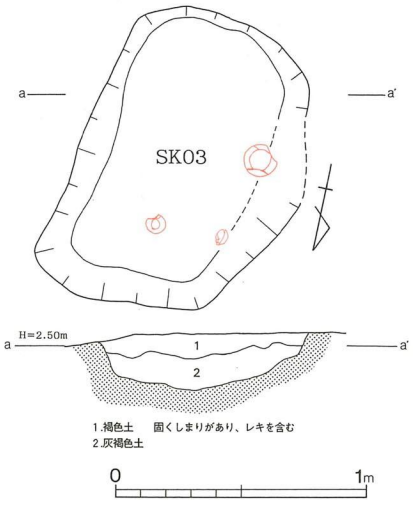
調査区の西側、C12Grで検出された土壙状遺構である。平面プランは上部がかなり削平されていると考えられるが、長軸長約1.25m、最大幅90cmのやや南北に長い隅丸長方形を呈している。検出高は標高2.55mであり、基軸は北北東－南南西を向いている。

覆土には、上層に固くしまりのある褐色土、下層には灰褐色土が堆積している。なお、この遺構の下面には古墳時代初頭の遺構であるSX10が築かれており、切合関係にある。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて、底面はやや丸みを帯びる箇所も認められるものの、ほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは22cmを測る。



第15図　B9Gr SK01出土遺物実測図

遺構の性格、時期については、前述した遺構と形状や基軸の方位、出土遺物の形状がよく似ていることから考えると、16世紀後半から17世紀半ば頃まで築かれた土壙墓である可能性が強い。調査地のある地域には、「死場」という小字名が残っており、これらの土壙墓の検出から、この辺り一帯が一時期埋葬地として利用されていた可能性が指摘できよう。

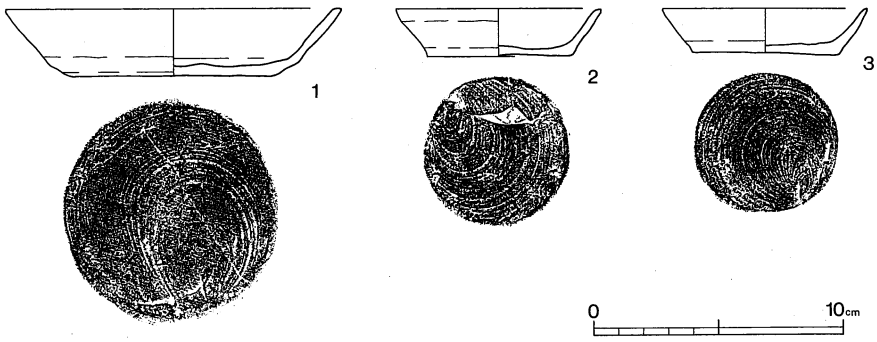


第16図　C12Gr SK03実測図

C12Gr　SK03の出土遺物（第17図）

1は土師器皿である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2・3は、土師器小皿である。成形は1と同様であり、これらの遺物はいずれも焼成が良好で淡橙褐色をしており、上層に堆積する褐色土中からの出土であ

ることが特徴である。時期的には前述した土壙墓と同様に16世紀後半から17世紀半ば頃のものと考えられる。



第17図　C12Gr SK03出土遺物実測図

（2）中世の遺構

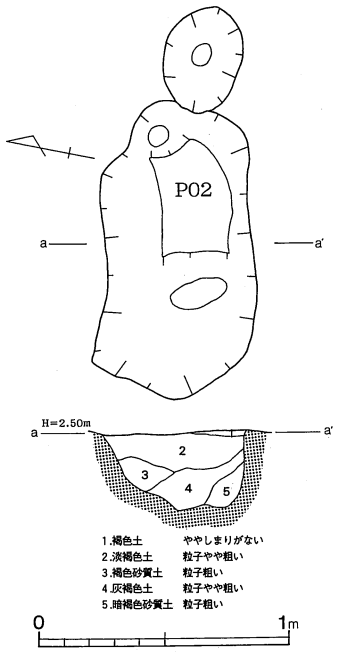
中世の遺構は、Z11～Z12Grで検出したピット状遺構やA12GrのP05などがあるが、出土遺物が少ないうえ、上部がかなり削平されていると考えられることから検出数は少ない。しかしながら、A12GrにおいてSD10と切合関係にあるP05からは15世紀後半から16世紀にかけての白磁碗が出土しているほか、Z11Gr P07からは同時代頃の青磁碗などが出土している。いずれも細片であるが、当該期にも遺跡が営まれていたことを示すものである。

Z12Gr P02（第18図）

調査区の西寄り、Z12Grの褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは上部が削平されていると考えられるが、長軸長約1.20m、最大幅60cmを測り、東西に基軸を持つ楕円形を呈している。なお、検出高は標高2.52mである。

覆土には、上層に粒子のやや粗い褐色土、下層には粒子の粗い褐色砂質土・灰褐色土・暗褐色砂質土が堆積して最深部は地山である灰白色シルト質土に達している。断面の形状は、北側では約45度、南側ではほぼ垂直に落ちて、やや南に偏る底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは30cmを測る。

遺物は出土していないが、Z11～Z12Grにかけて検出したピット状遺構からは、11Gr　P07のように15～16世紀にかけての遺物が少量ながら認められるとともに、覆土がほぼ同様な堆積を示していることから、これらのピット状遺構も含め、当該期に築かれたものであろう。



第18図　Z12Gr P02実測図

（3）古墳時代中期の遺構

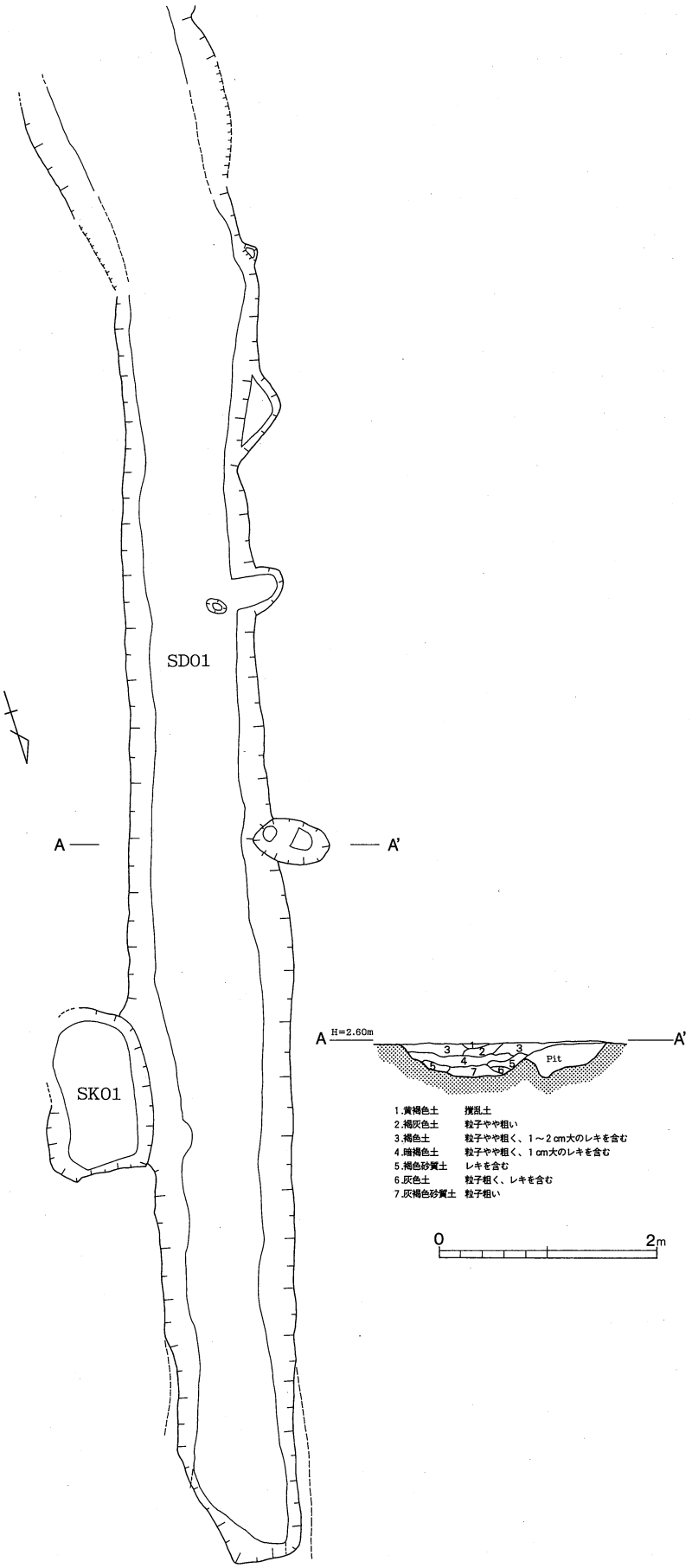
古墳時代中期の遺構は、地山面が微高地状に上昇している9Gr以東に集中して検出されており、溝状遺構8、土壙状遺構3のほか、ピット状遺構を多数検出している。また、調査区の東端では当該期のものと考えられる旧河道も検出しており、井原遺跡の立地を考えるうえでも貴重な資料となっている。

SD01（第19図）

地山面が上昇して微高地状となるZ11GrからC9Grにかけての淡黄褐色砂質土上面で検出したほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。北側は上部が削平されているために途切れているが、本来は調査区外へとさらに伸びていたものと推測される。

検出した状況では、検出長14.0m以上、最大幅1.90m、狭いところでも1.20mを測る。なお、検出高は標高約2.60mである。

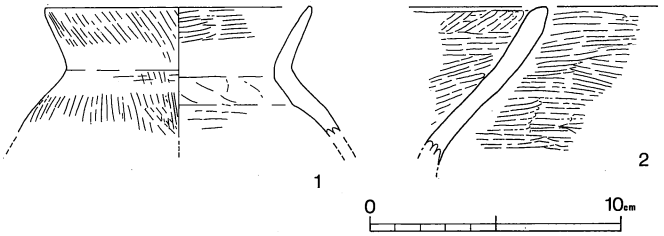
覆土には、上層に粒子がやや粗く1～2cm大のレキを含む褐灰色土や褐色土が堆積し、中層にはレキを含む暗褐色土・褐色砂質土、下層には粒子の粗い灰白色砂質土が堆積して基盤層である灰白色シルト質土へと達している。断面の形状は溝幅には関係なくほぼ一様で、両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約35cmを測る。また、底面における標高は南側で2.35mあるのに対し、北側では2.25mと10cm程度低くなっており、北へ向かって緩やかに傾斜していることが注意される。なお、



第19図　SD01実測図

SD01は近世に築かれた土壙墓であるA9Gr SK01、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃に築かれたA9Gr P02と切合関係にある。

遺物は少量で細片のものが多いが、古墳時代中期頃と考えられる甕片などのほか、わずかながらの拳大の石も検出されている。



第20図　SD01出土遺物実測図

遺構の性格は判断しがたいが、覆土にはレキを含む砂質系の土が堆積していることから、常時堆水していた状況とは考えにくい。また、古墳時代中期頃に築かれた遺構としては最も西に位置していることから、集落を区画する溝、あるいは必要な際に水を引く灌漑用水路のような機能をもっていたことなどが想定される。そして、用水路として機能していたとすれば、底面における傾斜から南方向から取水していたものと考えられる。

SD01の出土遺物（第20図）

１は、土師器甕である。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われているが、外面には縦方向、内面には横方向のハケが認められる。また、口縁中央部にわずかな稜をもち、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われており、外面にはススが付着している。このような特徴をもつ甕は、細片ながらSD01内から多く検出されており、古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。２は、土師器鉢あるいは甕であろうか。内外面とも丁寧な横方向のミガキによる調整が行われ、上位１／３ほどにわずかに稜をなしている。また、下部は欠損しているが立ち上がり気味となることから、高台付の鉢あるいは大型の甕である可能性もある。部分破片であるため判断しがたいが、SD01内から出土した他の遺物から考えると、古墳時代中期頃のものである可能性が強いのではないだろうか。

SD03（第21図）

調査区のやや東側、Z5GrからC3Grにかけての暗褐色粘質土上面で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。上部は後世の水田耕作のために削平を受けているが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況では、検出長18.0m以上、最大幅3.0m、狭い所でも1.2mを測る。なお、検出高は標高約2.00mであり、出雲平野における集落遺跡としては最も低い位置で検出されている。また、この溝状遺構は北側で２つの溝に分岐している。

覆土は遺構が長大なため部分的に異なる箇所もあるが、基本的に上層には灰色砂質土や灰褐色粗砂層と粘質土が互層状に堆積し、下層には一様に固くしまりがある暗灰色砂層、最下層には黒色粘質土が堆積して地山である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約26cmを測る。なお、底面における標高は、南北ともに標高約1.80mと一定である。また、幅が広くなっている所では両肩から落ちて平坦面を作り出し、そこからさらに底面へと落ちている。

SD03は、後に調査したⅡ区で検出されたSD01と方向や溝の幅、覆土が類似しているとともに、出土遺物からも同一の溝と考えられ、その長さは50m以上にも及ぶことが明らかとなっている。なお、この溝は古墳時代中期頃に築かれた井戸と考えられるB4Gr SK01、C3Grで東西方向に伸びるSD05～SD08と切合関係にある。

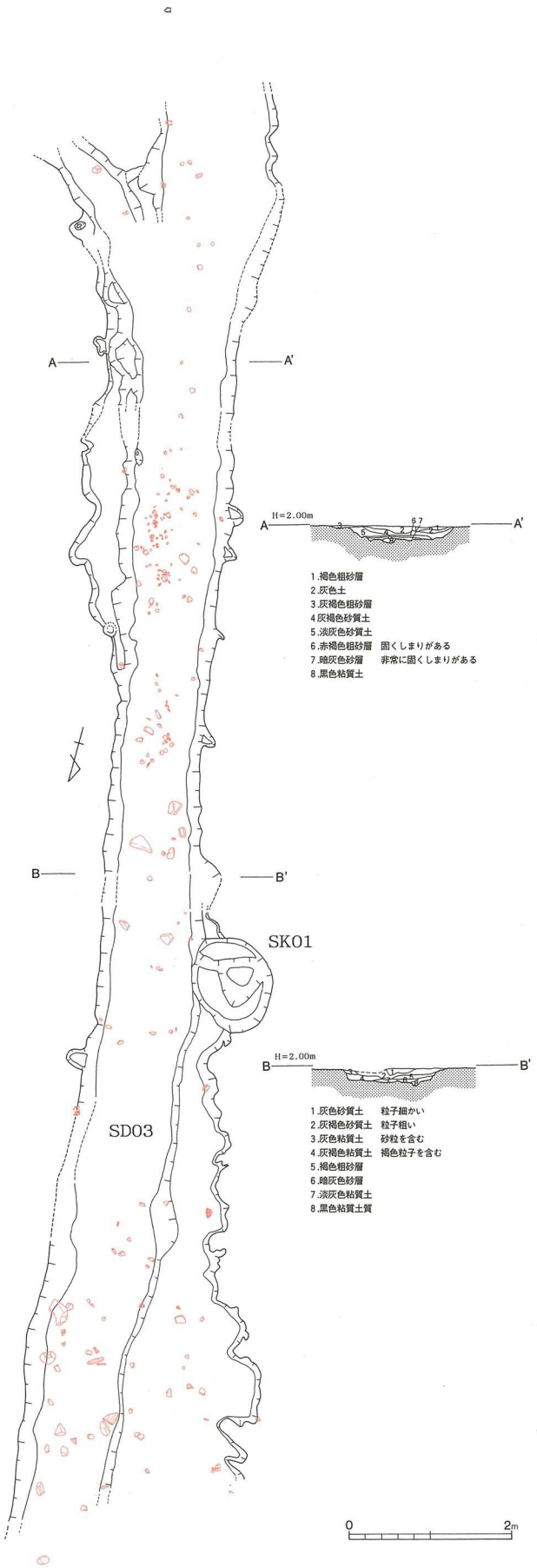
遺物には細片が多く、ほとんどが実測に耐えないが、遺構上面の耕作土中から出土したものを含めると、遺物の出土量は多い。遺構内においてはほぼ一様に土師器や須恵器などの遺物が認められ、特に底面に近く、固くしまりのある暗灰色砂層からの出土量が多い。また、北側では人頭大の石が若干認められている。

遺構の性格は、覆土に砂層と粘質土が互層状に堆積していることから、ある程度水の流れがあったことが推測され、灌漑用水路などとして機能していたことが想定される。なお、SD03の東西からも同時期の遺構を検出していることから考えると、集落を区画する機能をもつものとは考えにくい。

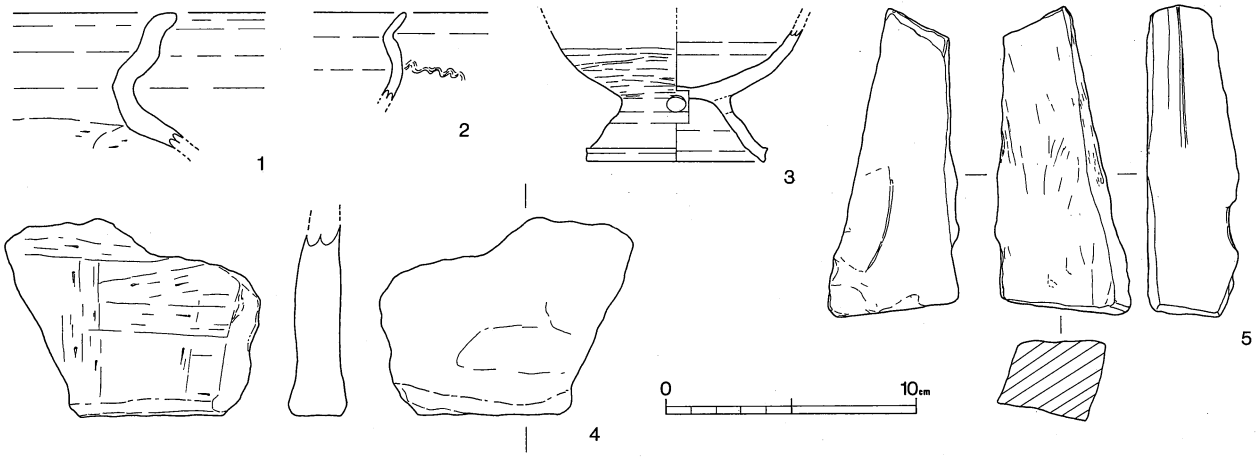
SD03の出土遺物（第22図）

1は、土師器甕である。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、口縁端部は外反して先細りとなり丸くおさめている。口縁部の中央には稜をなしている。このような特徴をもつ甕は上層の耕作土中や遺構内からも多く認められ、古墳時代中期頃のものであろう。

2は、須恵器の小型短頸壺であろう。胴部には波状文を施し、内外面ともにナデによる調整が行われている。3は、須恵器高坏である。坏部は内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、外面下半部にはカキメが施される。脚部は内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、脚端部は短く直立している。また、坏部と脚部と



第21図　SD03実測図



第22図　SD03出土遺物実測図

の間には径5mm程の円形の透し孔を穿っている。いずれも山本編年のⅠ期からⅡ期にかけての資料と考えられ、古墳時代中期頃のものであろう。

4は、土師器の移動式竈の脚部破片である。外面はナデによる調整で指頭圧痕が随所に認められ、内面はケズリによる調整が行われている。竈片はⅠ区SD03と同一の溝であるⅡ区SD01内からも多量に出土しているが、遺構内の他の遺物から考えると古墳時代中期（6世紀前半頃）にかけてのものである可能性が強く、市内では三田谷Ⅰ遺跡[3]から当該期の竈が出土している。

5は、砥石である。材質は細粒凝灰岩質砂岩で片側は欠損しているが、3面に使用痕が残っている。

以上のように、SD03の出土遺物には西部出雲地域では稀少な古式の須恵器が出土しており、時期的には古墳時代中期頃に相当する資料と言えよう。

SD04（第23図）

調査区の東側、C2GrからB1Grにかけての地山である黄褐色シルト質土上面で検出した溝状遺構で、北西―南東方向に伸びている。上面と南側は後世の水田耕作のために削平を受け、南側は途切れているが、北側は調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況では、検出長15.0m以上、最大幅1.40mを測る。北側では溝幅がしだいに狭くなっているが、これは削平が大きいことが要因と考えられる。なお、検出高は標高約2.00mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む灰色粘質土や灰色土が堆積し、わずかに底面が低くなる遺構西側の下層には、褐色粒子や5mm大の砂利を含む灰褐色土が堆積し、地山である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、西側に偏って深くなっている。最深部までの深さは約14cmと浅いが、上面が大きく削平されているものと考えられる。また、底面における標高は北側で1.90mであるのに対し、南側では1.80mと10cm程度低くなっており、南に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。なお、SD04は、2～3Grにおいて多数検出されたピット状遺構の一部と切合関係にあり、ピットよりも早い時期に築かれた遺構であることが明らかである。遺物の検出状況をみると、北側からの出土が多くなっているが、これは南側では削平された部分が大きいことが要因であろう。遺物には細片が多いうえ出土量もごくわずかであるが、土師器

甕片がほとんどであり、須恵器は出土していない。

遺構の性格は、覆土に粘質土の堆積が認められることから、ある程度水の流れがあったことが推測され、灌漑用水路などとして機能していたことが想定される。そして、底面における傾斜と基軸の方向から考えると、西北西方向から取水していたものであろう。

SD04の出土遺物（第24図）

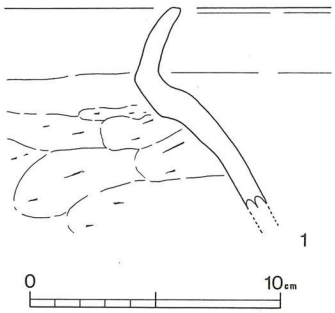
1は、土師器甕である。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われ、口縁端部はやや外反して丸くおさめ、内側にフラットな面を作り出している。頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。このような特徴を持つ甕は、古墳時代中期頃に相当する資料と考えられ、SD03で出土した甕よりも若干古い様相を示している。

このほかにも、土師器甕片が出土しているが、その特徴は1と同様である。

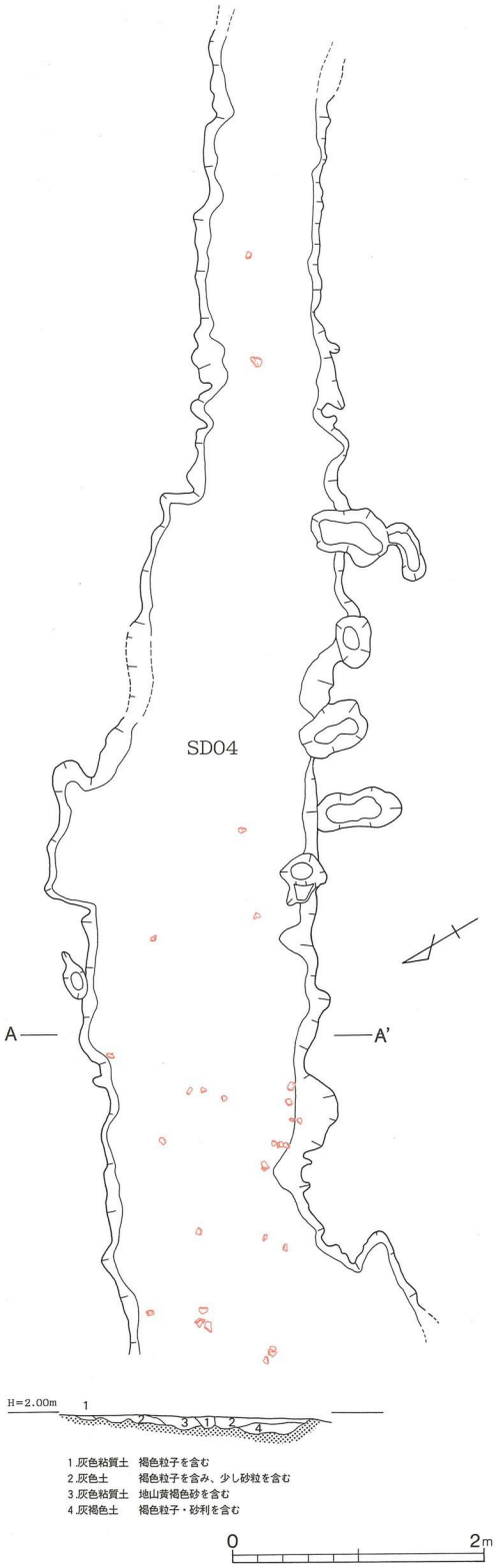
SD05～SD07（第7図）

C3Grの黄褐色シルト質土上面で検出した4条の溝状遺構で、西北西－東南東方向に伸びている。

2～3Grにかけては、これらの溝よりも新しい畝状に連なるピット列を多数検出しているとともに、A2～B2Grにおいては上部の削平が大きいことから、遺構の長さは明らかではない。しかし、SD07と推測される溝状遺構の痕跡がZ2Gr付近まで残っていることを考えると、本来は長さ17.0m以上を測る溝であったものと推測される。



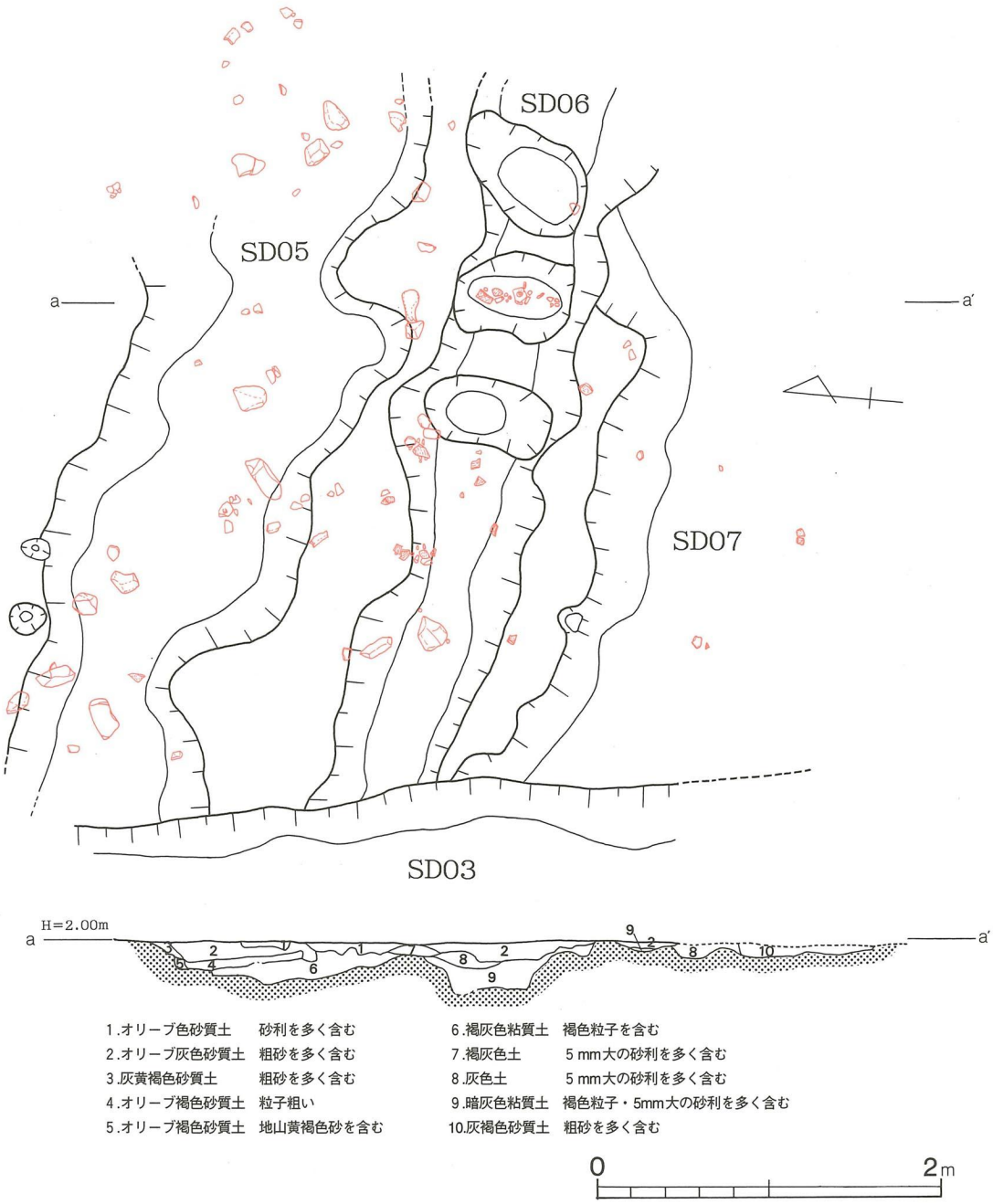
第24図　SD04出土遺物実測図



第23図　SD04実測図

検出した状況では、最大幅はSD05で1.60m、SD06が1.20m、SD07が1.60m、SD08は70cmを測る。なお、検出高は標高約2.00mである。また、SD06では溝内にさらにピットを掘り込んでいるのが特徴的であり、3つのピット状遺構が検出されている。これらの溝の最深部までの深さは、SD05が最も深く28cmで、南側の溝では次第に浅くなり、SD08では5cm程度の深さとなっている。また、底面における標高もSD05で約1.75mであるのに対し、SD08では1.90mと高くなっている。

覆土は溝によって一様ではないが、基本的には上層に5mm大の砂利を多く含むオリーブ色・灰褐色などの砂質土が堆積し、下層には褐灰色粘質土や灰色土が堆積して、地山である黄褐色シルト質土へと達している。これら4条の溝状遺構の断面は、両肩から緩やかに落ちて底面はレンズ状に丸く作



第25図　SD05～SD07実測図

り出しているのが特徴であるが、SD06内に掘り込まれたピット状遺構については、一様に平坦に作り出している。

遺物の検出状況をみると、SD05とSD06からの出土が多く認められているが、これは削平の大きい南側の溝よりも深さがあるうえ、上部の削平が少なかったことが要因であろう。遺物には古墳時代中期頃と考えられる土師器甕や須恵器坏身、甕などが検出されており、遺構が築かれたのも当該期である可能性が強い。

遺構の性格は判断しがたいが、覆土には砂質系の土が堆積していることから、常時水が流れていた状態とは考えにくく、空濠のような状態であったと考えられる。また、SD06内に掘り込まれたピットも何らかの機能を果たしていたものと思われるが、その機能については現状からは判断しがたい。

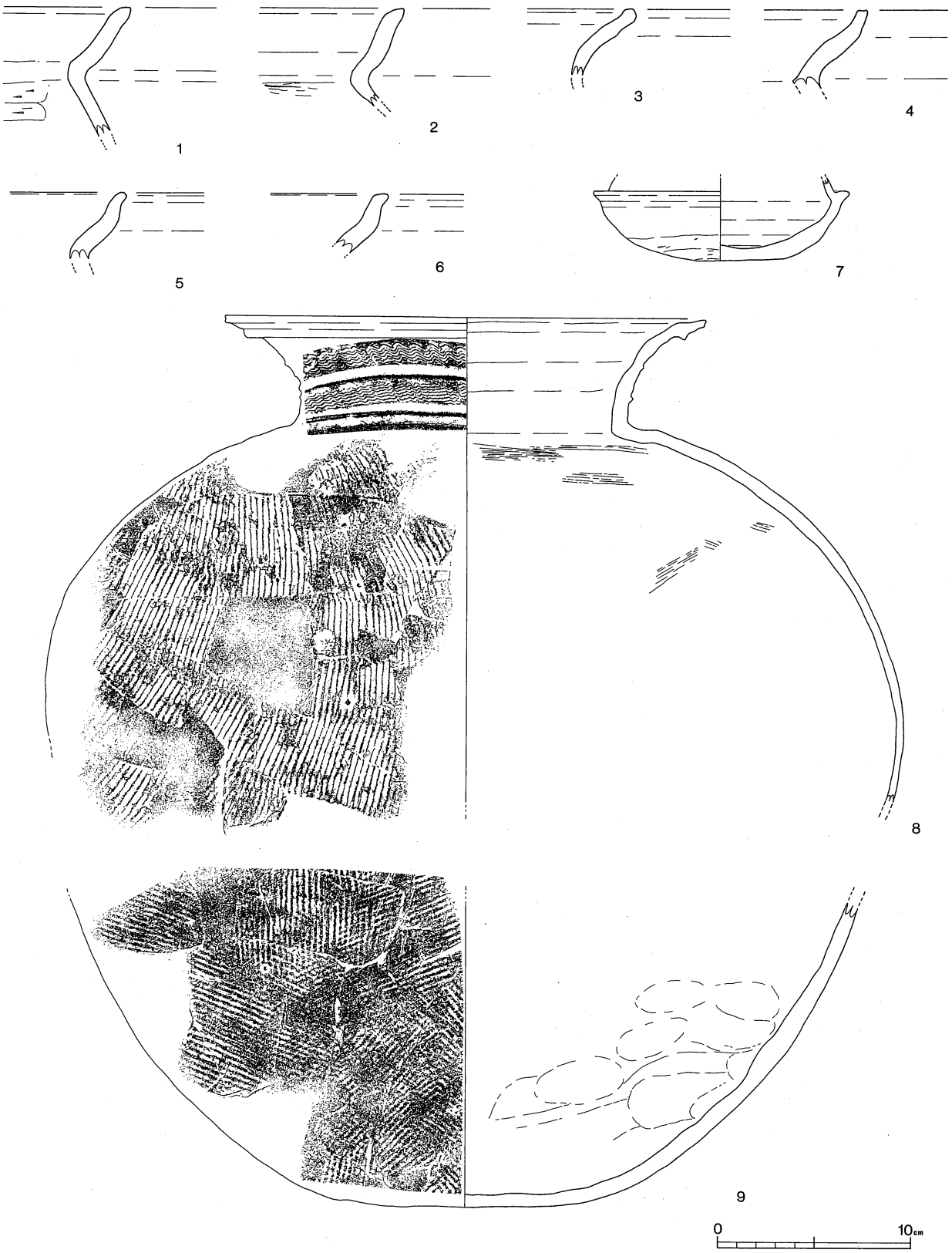
SD05～SD07の出土遺物（第26図・第27図）

１～６は、土師器甕である。いずれも口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。１は、頸部下内面にケズリによる調整が行われ、外面にススが付着している。口縁部のやや下位にわずかに稜をなし、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。２も１と同様な調整が行われているが、口縁端部の内側にフラットな面を作り出していることが特徴である。３・４は口縁部のやや上位に稜をなしており、３の口縁端部は丸く作り出し、４は端部を平坦におさめて凹面を作り出している。５・６は口縁の中位に稜をもつもので、５は口縁端部を丸くおさめ、６は平坦におさめている。

以上のような土師器甕は、口縁端部のおさめ方には様々な形態的特徴があるものの、口縁部にわずかに稜をなすもので、古墳時代中期に相当する資料であろう。

７は、須恵器坏身である。外面下半部は回転ケズリ、外面上半部と内面は回転ナデによる調整が行われており、底部はヘラ切りによって切り離されている。底部から内湾しながら立ち上がり、口唇部はやや内傾して長く伸びるタイプのものと考えられる。このような須恵器坏身は、山本編年Ⅱ期に相当する資料と考えられ、古墳時代中期頃（６世紀前半から中頃）にかけてのものであろう。

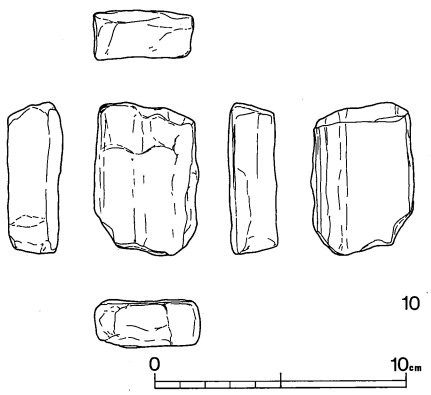
８・９は同一個体と考えられる須恵器の甕である。外面口縁部には三角形文帯を３条貼り付け、その間に波状文を２列に巡らせている。口縁部は朝顔形に大きく開いて端部を平坦に作り出している。外面胴部は上半位に縦方向のタタキ、下半部では縦・横方向のタタキによる調整が行われ、内面は頸部下に一部ハケによる調整が認められるが、下半部にかけてのほとんどがナデによる調整のみである。また、内面底部付近はやや粗雑な作りで、随所に指頭圧痕が認められている。このような特徴を持つ甕は、前述した坏蓋と同様に山本編年Ⅱ期に相当する資料と考えられ、古墳時代中期頃のものであろう。



第26図　SD05～SD07出土遺物実測図（1）

第27図－10は、砥石である。ほぼ完形で、両端と一方の側面を除く3面に使用痕が残っている。

以上のように、SD05～SD07内からは古墳時代中期頃の遺物が出土していることから、当該期の遺構と考えられるが、切合関係によりSD03よりも古い遺構であることが明らかである。しかしながら、遺物の形態的特徴がほとんど変化していないことから推測すれば、SD03とSD05～SD07の遺構との間には時期的な差はあまり生じていないものと考えられる。



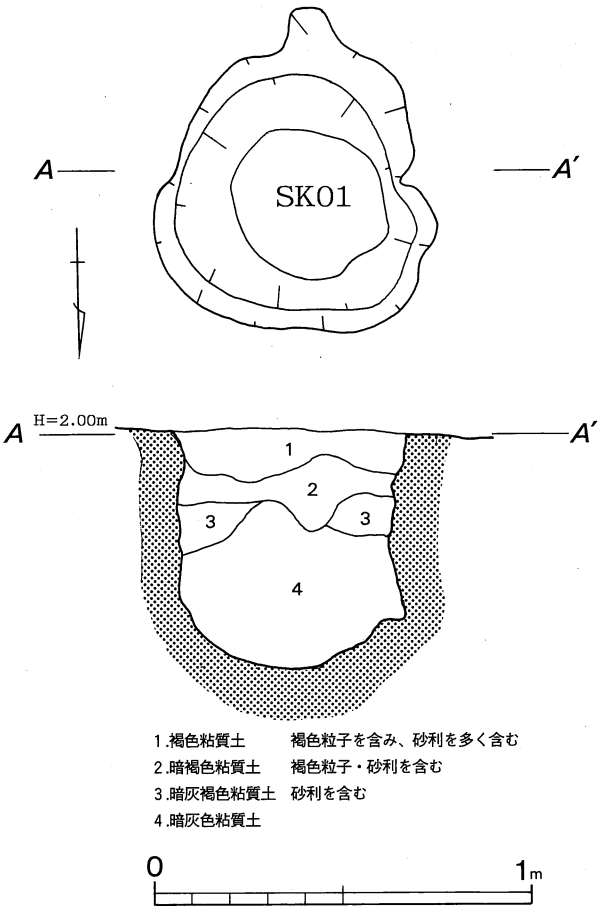
第27図　SD05～SD07出土遺物実測図（2）

C4Gr SK01（第28図）

C4Grの地山である黄褐色シルト質土上面で検出した土壙状遺構である。上部は削平を受けているものと考えられるが、平面プランは径約75cmほどの円形状を呈している。なお、検出高は標高2.02mである。

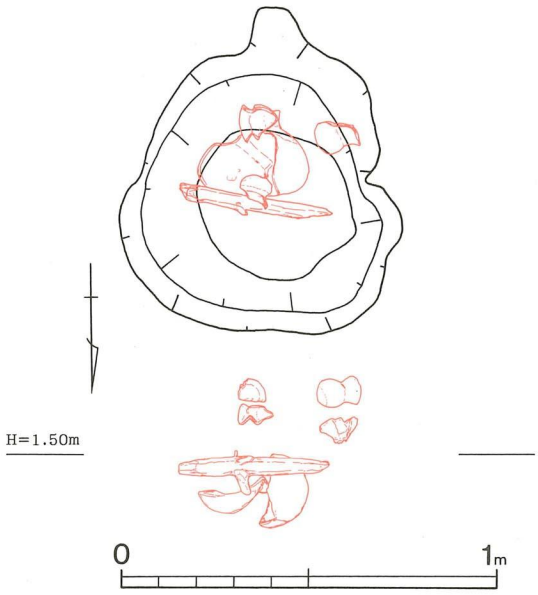
覆土には上層に褐色粒子や砂利を多く含む褐色粘質土が堆積し、中層には砂利を含む暗褐色・暗灰褐色粘質土、下層には粘性の強い暗灰色粘質土が堆積して地山である黄褐色シルト質土へと達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは65cmを測る。

遺物は、その全てが遺構の中層から下層にかけて堆積している暗灰色粘質土中からのものであり、土師器甕や小型丸底壺、小型台付鉢のほか、杭状の木片などが検出されている（第29図）。いずれもほぼ中央部からの出土で、甕が最深部に置かれ、その他は約10cmほど上位から検出されている。



第28図　C4Gr SK01実測図

遺構の性格としては、中央最深部から杭状の木片を検出していることから、木枠組みの井戸として利用されていたものと考えられる。そして、ほぼ完形の土師器は、井戸を廃棄する際に土器を投入し、祭祀を行っていた可能性が強い。そして、その後、人為的に埋められたものであろう。また、出土遺物から判断すると遺構が築かれた時期は古墳時代前期後半から中期頃と考えられ、SD03やSD04よりもやや古い時期のものであろう。

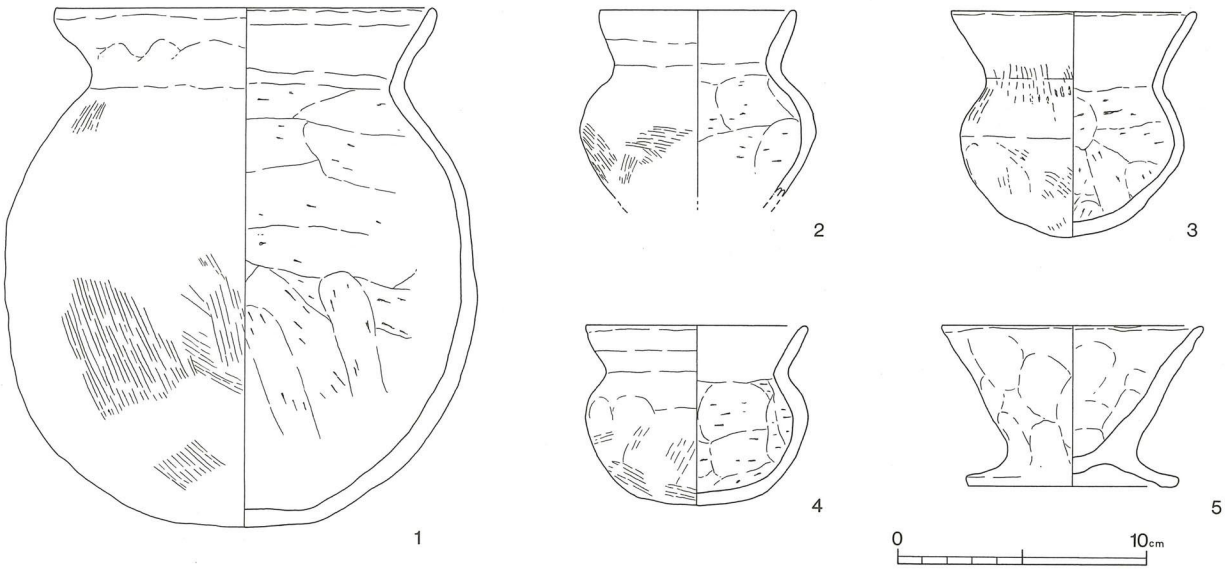


第29図　C4Gr SK01遺物出土状況実測図

C4Gr SK01の出土遺物（第30図）

1は、土師器甕である。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われ、口縁端部はやや内傾気味につまみ上げ、丸くおさめている。また、口縁部やや上位にはわずかに稜をなしている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。全体的にやや粗い作りとなっており、口縁部外面には粘土紐が充分結合しないまま貼り付けたような状態となっている。なお、胴部にはススが付着しているとともに中央部に人為的なものと考えられる孔を有している。

2～4は、土師器の小型丸底壺で、いずれも口縁部内外面はナデによる調整が行われている。2は頸部下外面は横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。3はほぼ完形で、外面頸部から胴部にかけて縦・横方向のハケ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。4はほぼ半分が欠損しているが、口径に比べると器高が低く、どっしりとしたプロポーションである。頸部下外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。5は、土師器の小型台付鉢である。内外面、脚部ともにほとんど手捏ねで作られており、随所に指頭圧痕が認められる。



第30図　C4Gr SK01出土遺物実測図

以上のような土師器は口縁部にわずかに稜をなしており、古墳時代前期後半から中期頃のものと考えられ、前述した溝状遺構よりも若干古い様相を示している。

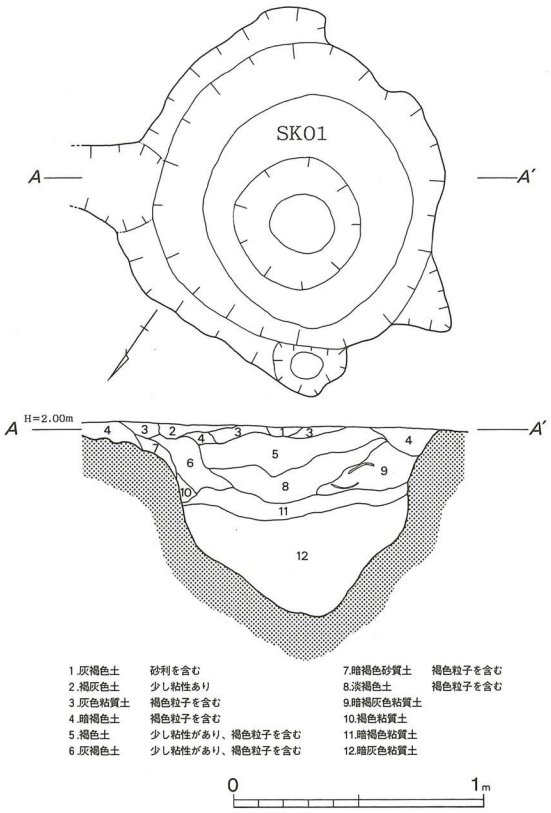
A4Gr SK01（第31図）

A4Grの地山である黄褐色シルト質土上面で検出した土壙状遺構である。平面プランは、部分的にややいびつな形状をなしている箇所もあるが、径約1.30mのほぼ円形状を呈している。なお、検出高は標高2.04mである。

覆土には、上層から中層にかけて褐色粒子を含む褐灰色土や暗褐色土・灰褐色土などの褐色系の土が堆積し、下層には暗褐色粘質土や暗灰色粘質土といった粘質土が堆積している。断面の形状は肩部から約45度の角度で落ちているが、中位からはさらに鋭角に落ちて底面は丸く作り出している。遺構のほぼ中央に位置する最深部までの深さは75cmを測る。

遺物は、遺構の中層に堆積する暗褐灰色粘質土・暗褐色粘質土中に集中して認められ、土師器甕が2点、小型丸底壺が1点出土している（第32図）。

遺構の性格は、形状や遺物の出土状況から考えると、素掘りの井戸として利用されていた可能性が強く、遺物は井戸を廃棄する際に投入されたものであろう。そして、遺物から判断すると遺構の築かれた時期は古墳時代前期後半から中期頃と考えられる。

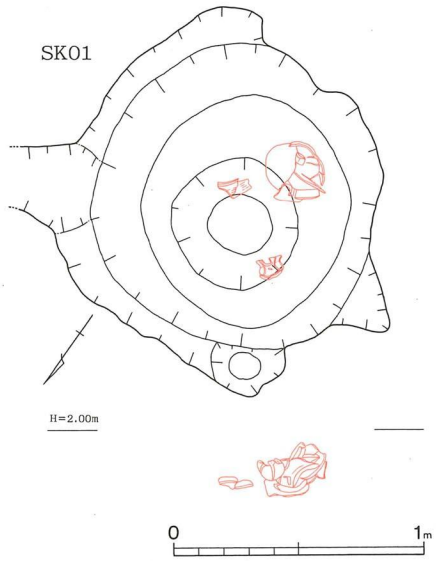


第31図　A4Gr SK01実測図

A4Gr SK01の出土遺物（第33図）

1は、土師器甕である。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面胴部にはススが付着している。また、全体的にやや粗い作りで胴部の一部を除けばほぼ完形品である。現状からは判断しがたいが、意図的に胴部に孔をあけた可能性もある。2も、土師器甕であり、口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。頸部下外面は横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。

3は、土師器の小型丸底壺である。風化が著しいが、口縁



第32図　A4Gr SK01遺物出土状況実測図

部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。口縁端部は丸くおさめ、形状は前述したC4Gr SK01の小型丸底壺とよく似ている。

以上のような特徴をもつ土師器は、古墳時代前期後半から中期頃に相当する資料と考えられ、C4Gr SK01の出土遺物とほぼ同時期のものと考えられる。

B4Gr SK01（第34図）

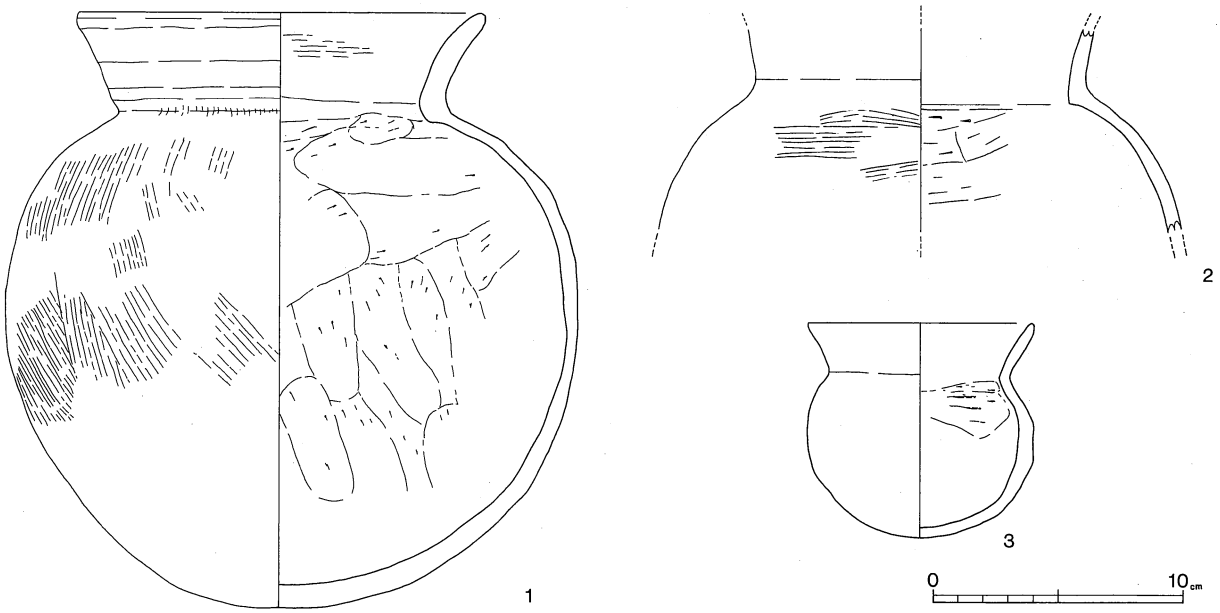
B4Grの地山である黄褐色シルト質土上面で検出した土壙状遺構である。上部は削平を受け、東側はこの遺構よりも新しい時期に築かれたSD03によって切られているが、現状における平面プランは、南北長1.15m、東西長1.0mのほぼ円形状を呈している。なお、検出高は標高1.98mである。

覆土には、上層に褐色粒子や砂利を多く含む褐色粘質土、中層には砂利を少し含む暗褐色粘質土・灰褐色粘質土、下層には暗灰色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは60cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、遺構の性格は判断しがたいが、覆土の状況や形状がC4Gr SK01とよく似ていることから、井戸として利用されていた可能性があろう。また、遺構が築かれた時期についても、C4Gr SK01と同様に古墳時代前期後半から中期頃と考えられる。

C3Gr P05（第35図）

C3Grの黄褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。上部と東側は水田耕作による削平によって失われているが、基軸は南西－北東方向を向いている。検出した状況での平面プランは、長軸63cm以上、短軸48cmの東西にやや長い楕円形状を呈するものと推測される。なお、検出高は標高2.05mである。

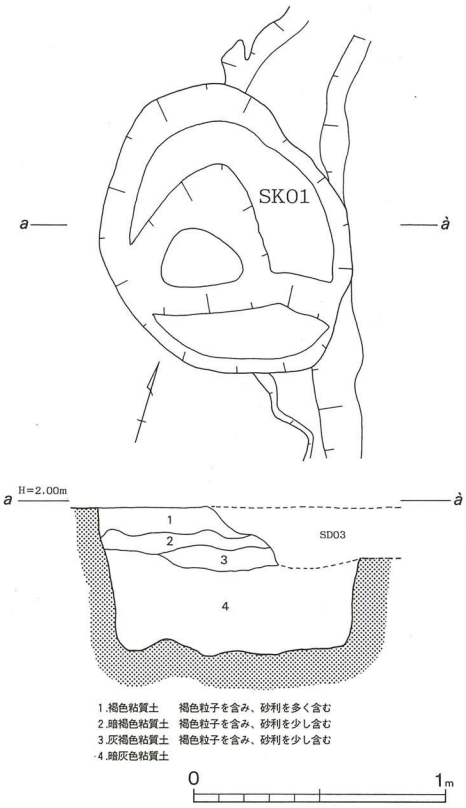


第33図　A4Gr SK01出土遺物実測図

覆土は、上層に粒子の粗い赤褐色砂質土、下層に褐色粒子を含む灰色土が堆積している。なお、このような赤褐色砂質土を覆土に含むピット状遺構は、1～3 Grまでの間に20余り検出されており、ほぼ同時期に築かれたものと考えられる。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面をやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約7cmと浅くなっている。これは、上部の削平が大きいことが要因であろう。

遺構の残存状況は良くないが、遺物は土師器・須恵器が共伴して出土している。

遺構の性格は判断しがたく、同様の覆土をもつ他のピット状遺構との間にも掘立柱建物跡などの配置は認められない。築かれた時期については、出土遺物から考えると古墳時代中期頃のものであろう。



第34図　B4Gr SK01実測図

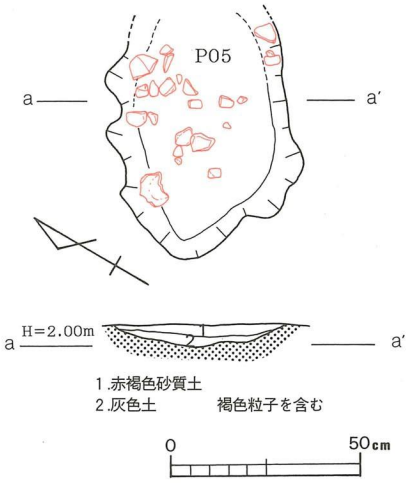
C3Gr P05の出土遺物（第36図）

1は、須恵器の有蓋高坏である。脚部3カ所に方形透し孔を有し、坏部内外面は回転ナデによる調整が行われている。口唇部はやや内傾して立ち上がっており、坏部外面の中位には2カ所にヘラ状の工具痕が残っている。脚部は内外面とも回転ナデによる調整が行われ、脚端部には1条の凹線文が施される。以上のような有蓋高坏は、山本編年Ⅰ期からⅡ期のものと考えられ、細片のみであるが、土師器にも当該期と考えられるものが多く出土している。

B5Gr P01（第37図）

B5Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。上部は水田耕作により削平されているが、平面プランは西側がやや張出していびつな形状を呈しており、長軸長は77cm、最大幅は50cmを測る。基軸は東西方向に向いており、検出高は標高2.01mである。

覆土は、上層に炭化物や砂利を含む灰褐色粘質土や灰色粘質土、中層に褐灰色粘質土・灰色粘質土、下層には粘性が強く、炭化物を含む暗灰色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩からほぼ垂直に落ちて底面をほぼ平坦に作り出しているが、西側ではさらに一段深くピット状に掘り込んで底面はやや丸く作り出している。東側での最深部までの深さは36cmであるのに対し、西側では52cmの深さがある。



第35図　C3Gr P05実測図

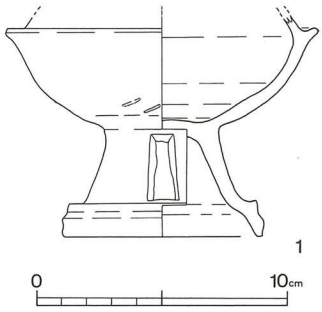
B5Gr P01の出土遺物（第38図）

遺物は遺構の西壁面で土師器高坏が１点出土している。

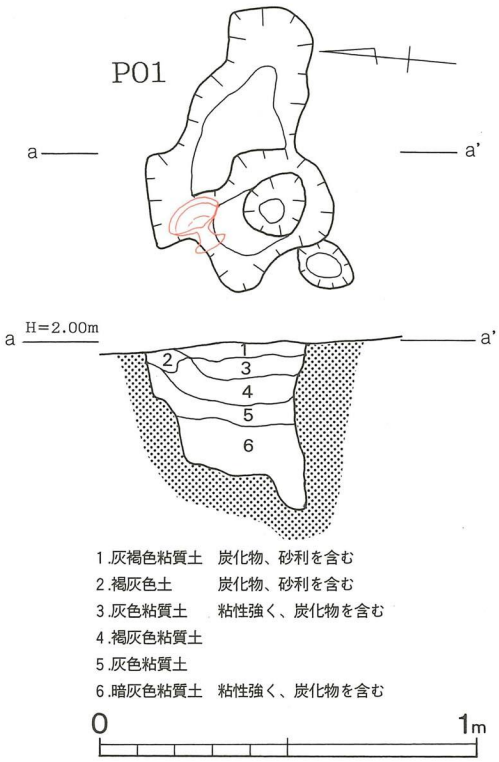
１は、風化が著しく全体の調整方法はわかりづらいが、筒部内面にはケズリによる調整が認められる。坏部と口縁部は二段に作られ、口縁部へ向かってやや外反しながら立ち上がっている。坏部と脚部とは円盤充填法によって接合され、外面の一部には赤色塗彩された痕跡が残っている。また、層位的には３・４層からの出土である。

以上のような特徴をもつ高坏は、古墳時代中期頃に相当する資料と考えられ、この遺構が築かれたのも当該期と考えられる。

遺構の性格は判断しがたいが、覆土には少量ながら炭化物が認められていることが注意される。井原遺跡では古墳時代中期頃と考えられる住居跡は検出されていないが、食物などの貯蔵穴などとして利用されていた可能性もある。なお、近辺で多数検出している他のピット状遺構との間には、掘立柱建物跡などの配列は認められない。



第36図　C3Gr P05出土遺物実測図



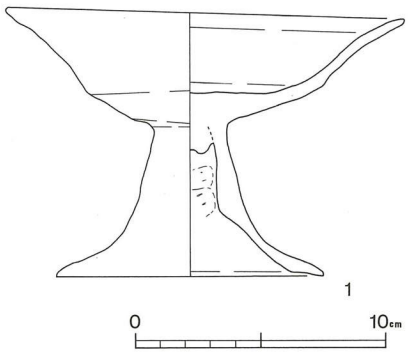
第37図　B5Gr P01実測図

A2Gr P10・P11（第39図）

A2Grの地山である黄褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。上部はかなり削平を受けているものと考えられるが、検出高は標高1.94mである。平面プランは、P10が長軸長1.20m、最大幅45cm、P11は長軸長1.30m、最大幅50cmを測る楕円形状を呈している。また、遺構の基軸はいずれも南西－北東を向いている。

P10の覆土には、上層に砂利を含む灰色土・淡灰色土が堆積し、下層には砂利を多く含む淡灰色砂質土が堆積している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ち、やや深さのある東側底面はほぼ平坦に作り出しており、西側肩部へ向かっては緩やかに丸く作り出しており、最深部までの深さは12cmである。一方、P11の覆土には上層に砂利を含む淡灰色土・灰褐色土、下層には赤褐色粗砂層が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは８cmである。

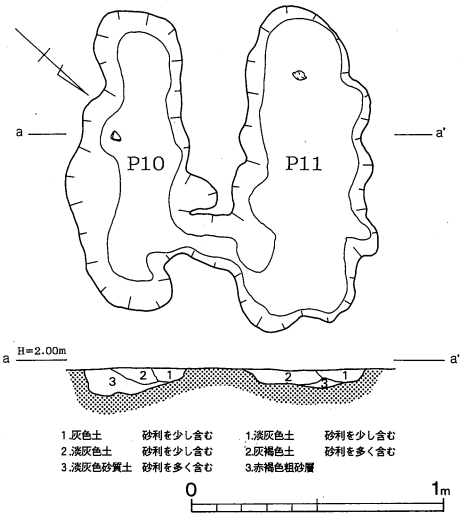
遺物は、少量ではあるが土師器甕などの細片が出土している。



第38図　B5Gr P01出土遺物実測図

部分的なものが多いが、特徴的には古墳時代中期頃に相当する資料と考えられ、当該期に築かれた遺構と考えられる。

遺構の性格は判断しがたいが、2～3Grで検出しているピット状遺構の中には、南西－北東方向に基軸をもつものが少なくとも3列に配置されていることが注意される。これらのピット列は、調査区の東端で検出した旧河道と同じ方向に基軸を有して畝状に配置され、底面の標高も約1.90mと一定であることなどから、旧河道の関連施設として機能していた可能性がある。



第39図　A2Gr P10・P11 実測図

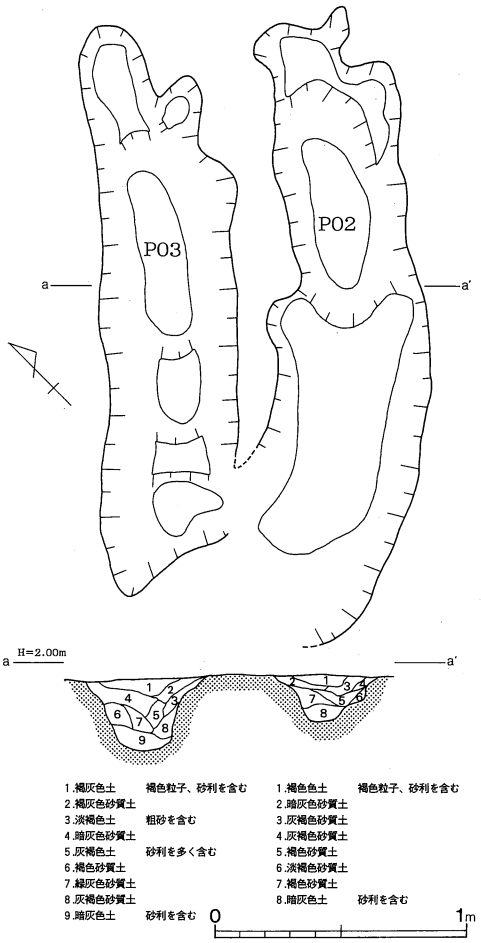
B3Gr P02・P03

B3Grの地山である黄褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。上部はかなり削平を受けているものと考えられるが、検出高は標高1.95mで、いずれも基軸を南西－北東方向にもつものである。平面プランは、P02が長軸長2.50m以上、最大幅60cm、P03は長軸長2.30m、最大幅55cmを測る楕円形状を呈している。

P02の覆土には、上層に褐色粒子や砂利を含む褐灰色土、中層には粗砂を含む淡褐色土や砂利を多く含む灰褐色土などが堆積して最下層には砂利を含む暗灰色土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ち、中位からはさらに鋭角に落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは30cmである。P03は、上層にP02と同様な褐灰色土、中層には褐色系の砂質土が堆積して最下層には砂利を含む暗灰色土が堆積している。断面の形状はP02と同様で、最深部までの深さは20cmである。

遺物には小片が多いが、土師器甕などが出土している。時期的には古墳時代中期頃に相当する資料と考えられ、これらの遺構も当該期に築かれたものであろう。

遺構の性格は、前述したように東端で検出したほぼ同時期に存在していたと考えられる旧河道と基軸の方向が一致することから、何らかの関連があったものと想定される。



第40図　B3Gr P02・P03 実測図

C3Gr P01（第41図）

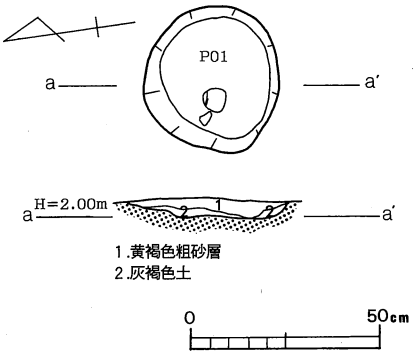
C3Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピッ

ト状遺構である。最深部までの深さが5cmと浅く、上部はかなりの削平を受けているものと考えられ、平面プランは、径約40cmほどの円形状を呈している。なお、検出高は標高約2.04mである。

覆土には、上層に粒子の粗い黄褐色砂質土、下層に灰褐色土が堆積している。断面の形状は、北側では緩やかに南側ではやや鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。

出土遺物は少ないが、内外面ともに赤色塗彩された土師器高坏の小片が出土している。やや内湾ぎみに長く立ち上がるという特徴をもち、古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。

覆土に粒子の粗い黄褐色砂質土が堆積する他のピット状遺構との間に建物跡などの配列は認められず、遺構の性格は判断しがたい。なお、同様の覆土をもつピット状遺構は、1～3Grにかけて10余り検出しているが、切合関係から畝状に配置されるピット状遺構よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。



第41図　C3Gr P01実測図

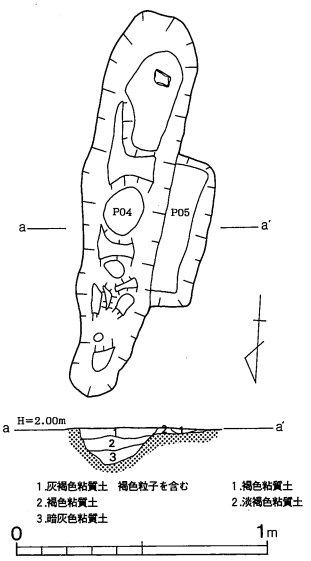
A5Gr P04・P05（第42図）

A5Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。なお、調査区における地山は東側では砂質の黄褐色シルト質土であるが、5Gr付近からやや粘質でしまりのある褐色シルト質土へとしだいに変化している。P04は、南北方向に基軸をもち長軸長1.55m、最大幅35cmを測り、楕円形状を呈している。ほぼ中央に位置する最深部までの深さは15cmを測る。P05は、切合関係からP04よりも新しい遺構であることが明らかで、東側はP04により切られているが、南北方向に基軸をもち、長軸長約60cmを測る長方形状を呈するものと推測される。なお、いずれも検出高は、標高2.00mである。

P04の覆土には、上層に褐色粒子を含む灰褐色粘質土が堆積し、褐色粘質土、褐灰色粘質土と続いている。断面の形状は、南北では緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しているが、遺構の最深部があるほぼ中央では約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出している。

P05は、上部がかなり削平されているものと考えられ、3cmほどの深さしかもたないが、覆土には褐色粘質土・淡褐色粘質土が認められている。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面は平坦に作り出している。

遺物は土師器小片が認められる程度であるが、調査区の東側に集中して検出された遺構と同様に古墳時代中期頃の特徴が認められており、遺構が築かれた時期についても当該期であろう。また、2～3Grにかけて畝状に続くピット列のような配置は認められず、遺構の性格は判断しがたい。



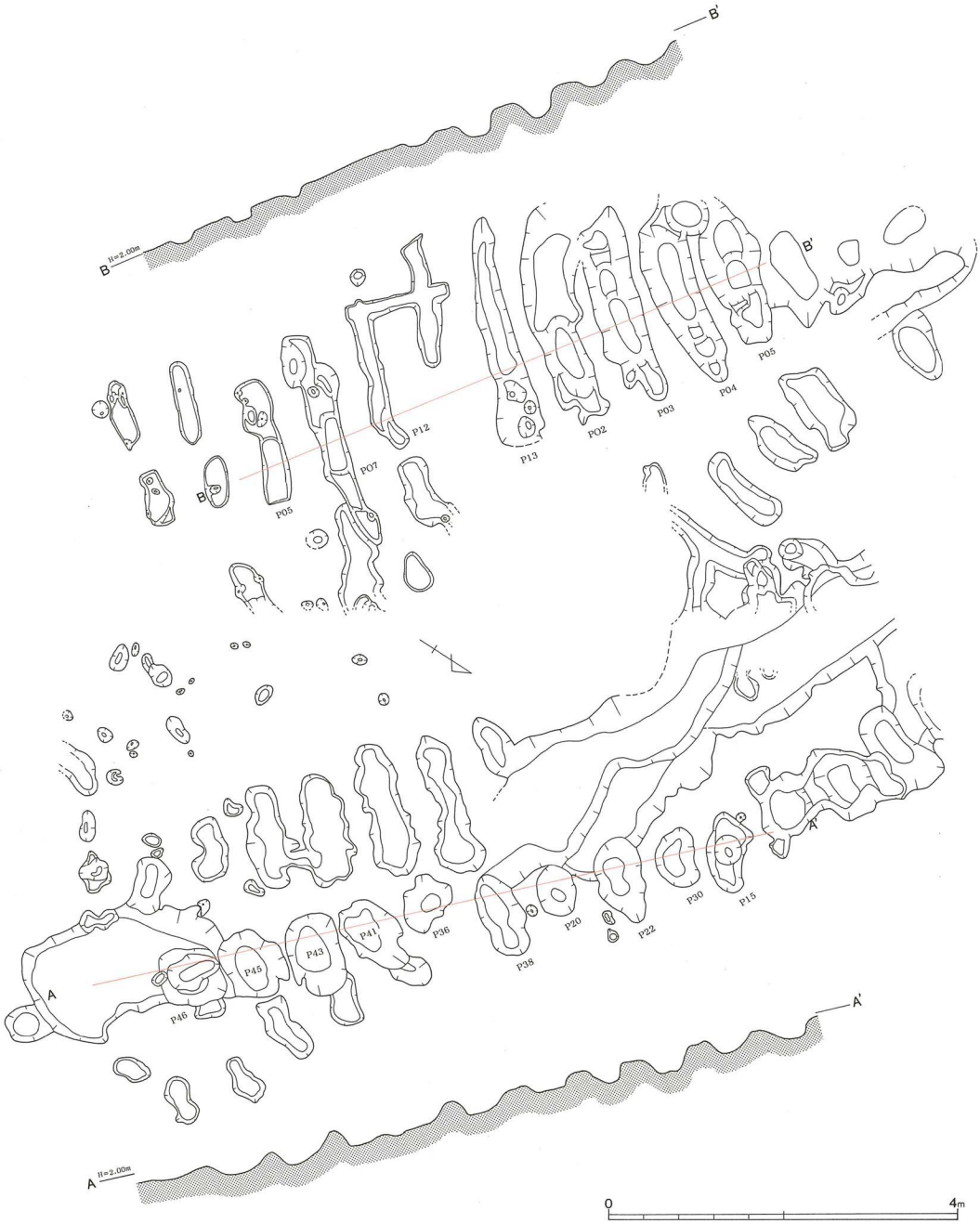
第42図　A5Gr P04・P05実測図

2～3Grのピット列（第43図）

2～3Grの地山である黄褐色シルト質土上面では、南西－北東方向に

基軸をもつピット状遺構が３列に配置されている。これらのピット列は調査区の東側で検出した旧河道と同じ方向の基軸をもつとともに、時期的にはほぼ同時期のものであると考えられることから、何らかの関連があるものと考えられる。

Ａ－Ａ’ラインでは、長さ11m以上にもわたってピット列が確認されている。ピットの形状や大きさに若干の違いは認められるものの、長軸長60cm～1.0m、幅40cm～70cmを測る楕円形状を呈している。南側では水田耕作によりかなりの削平を受けていると考えられるが、深さは約20～30cmを測り、底面の標高は1.90mとほぼ一定である。また、北側へ続くピット列は若干基軸を異にし、西南西－東北東を向いているが、旧河道も北側で同じ方向に基軸が変化していることから、このピット列は調査区外へとさらに伸びているものと推測される。



第43図　2～3Grピット列検出状況実測図

これらピット列の覆土には、一様に砂利を多く含む灰色系土が堆積しているのが特徴である。断面の形状は、その多くが両肩から約45度の角度で落ちているが、底面はほぼ平坦に作り出すものと丸く作り出すものとがある。

B－B'ラインにおいては、長さ7m以上にわたってピット列が配置されている。なお、北側ではSD03によって切られていると考えられることから、A－A'ラインと同様にさらに伸びていたものと推測される。ピットの形状や大きさには、北側と南側では若干の違いが認められる。北側では長軸長1.80m～2.60m、幅40cm～70cmを測る細長い楕円形状を呈しており、深さは20cm程度を測る。断面の形状は両肩から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出す傾向にある。一方、南側では細長い楕円形状を呈するのは同様であるが、幅が狭く、深さが約10cm程度と浅く、底面を平坦に作り出している。この違いは、南側における上部の削平が大きかったことに起因するものと考えられるが、底面のレベルが北側で20cm程度低いことが注意される。また、これらピット列の覆土には、砂利や粗砂を含む層が確認されている。

A・Bラインの他にも前述したA2GrのP10・P11ラインでも平面プランが楕円形状を呈し、南西－北東方向に基軸をもつピット列が確認されている。なお、旧河道に近いAラインでは平面プランが円形に近く、やや離れるBラインに向かって細長い楕円形状を呈していることが注意される。

以上のようなピット列が築かれた時期は、その出土遺物から古墳時代中期頃と考えられており、調査区の東端で検出した旧河道以東には当該期の遺跡は確認されていない。遺構の性格は判断しがたいが、掘立柱建物跡のような配置は認められず、遺跡の東端に位置することを考えると、集落を区画する柱列あるいは柵列などのような施設が想定される。

旧河道（第44図）

調査区東端の地山である黄褐色シルト質土上面で検出した旧河道と考えられるものである。上部は後世の水田耕作のために削平を受けているものと考えられるが、南北は調査区外へとさらに伸び、東側に向かってもさらに深くなっており、かなり大規模な河道であることが推測される。また、旧河道以東では試掘調査においても遺構や遺物は検出されておらず、遺跡としての東限を示している。

検出した状況では、南北長16.0m以上、幅6m以上を測り、南西－北東に基軸をもっており、北側ではやや西南西－東北東へと基軸を変化させている。なお、検出高は標高約1.80mである。

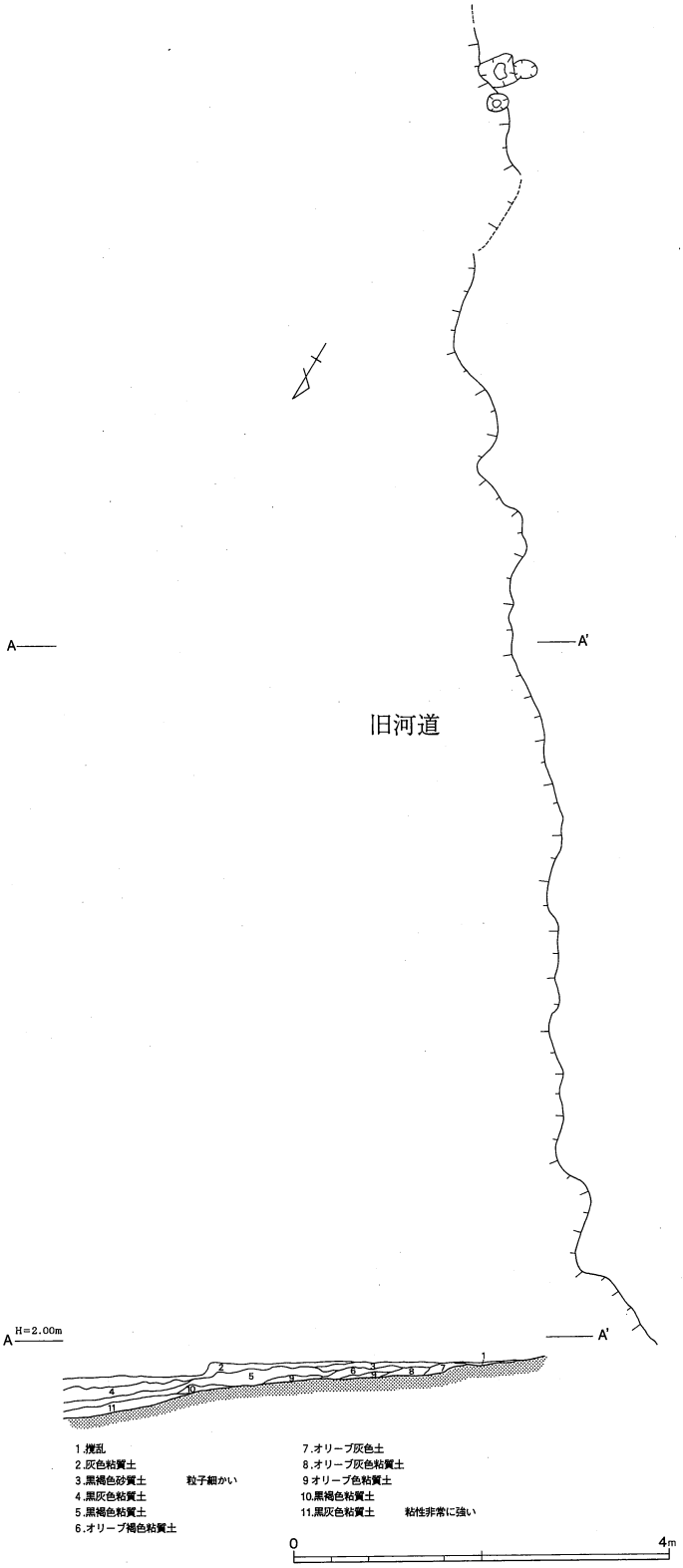
覆土には、肩部にわずかながら黒褐色砂質土が堆積しているものの、上層から黒灰色粘質土・黒褐色粘質土としだいに粘性が強くなり、最下層には非常に粘性の強い黒灰色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて2mほどの平坦面を有し、そこから東に向かってさらに落ちて調査区の東端に達しており、ここでは検出面から約70cmの深さがある。また、覆土の最下層である黒灰色粘質土の下面は粒子のやや粗い灰色砂層に達し、この層位からは現状でもかなりの湧水が認められる。

遺物は全く出土しておらず、旧河道が存在していた時期についての判断はしがたい。しかしながら、A0－A2ラインの堆積土状況から判断する限り、古墳時代中期頃あるいはそれ以前のものであると考えられる。また、古墳時代中期頃の遺構が旧河道を東端として検出されていないことは、少なくともこの時期に流路を保っていたかあるいは沼池のような湿地帯であったことが推測される。そして、旧河

道の西側に配置され、同一の基軸を持つピット列は、集落を区画するための柱列や柵列として機能していたのではないだろうか。

『出雲国風土記』によれば、井原遺跡が立地している地域の西方には周囲が18kmもある「神門水海」（現在の神西湖）と呼ばれる潟湖が存在していたことが知られている。そして、南方からは神門川が、東方からは出雲大川（現在の斐伊川）がこの付近で神門水海に注いでいたようである。

以上のことから考えると、9Gr以東に存在する古墳時代中期頃の遺構は、南方から神門水海に注いでいた神門川によって形成された旧自然堤防上に立地していたものと考えられ、旧河道は神門川の支流である可能性が強いものと考えられる。



第44図　旧河道実測図

その他の遺構

9Gr以西においては、その他にも遺構を多く検出している。そのほとんどは水田耕作によって上部を削平されているものと考えられるが、耕作土中からも多数の古墳時代中期頃の遺物が出土し、人々が生活していた様子が窺われる。その中にあって、5～7Grには幅約10mにわたって5～10cm程度の小ピットや筋状の遺構が密集して検出されている。いずれも5cm程度の深さのものであるとともに南西から北東へ帯状に連なっていることから考えると、稲株などを植えた水田跡の可能性もあろう。畝跡などは検出していないが、Ⅲ区の西端でもこのような遺構を検出し、遺物には古墳時代中期頃と考えられるものが出土していることから、当該期に築かれたものであろう。

その他、ピット状遺構や落ち込み状遺構などを検出しているが、残存状況が悪く遺物も少量であることから、遺構の性

格は不明なものが多い。いずれにしても古墳時代中期頃の遺構は、Ⅰ区においては9Gr以西の幅約40mにわたって帯状に形成されていたことが推測される。

（4）弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構

当該期の遺構は、地山面が微高地状に上昇する9Gr以西に集中して検出されており、溝状遺構4、落ち込み状遺構3のほかピット状遺構を多数検出している。なお、9Gr以東では当該期の遺構は全く検出されておらず、当該期における遺跡としての東限が9Gr付近にあったことを示している。

SD10（第45図）

調査区の西寄り、12～13Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構である。この辺りは近年まで畑地として利用されており、現状でもかなり削平を受けているうえ、その下面でも規則正しく長方形状に掘り込まれた新しい時期の撹乱があり、SD10も上部がかなり削平を受け、北側では大きな撹乱によってほとんど当時の現状を留めていない。

検出した状況では、検出長15.0m以上、最大幅4.86mを測るが、北側ではこの溝は2つに分岐している。分岐した東側の溝は北側で落ち込んでSX10へと続き、西側はC12Grにある大きな撹乱によって途切れている。遺構の基軸は、南側ではほぼ南北方向を向いているが、2つに分岐する北側では南西－北東方向を向いている。また、南側ではさらに調査区外へと伸びている。なお、検出高は標高約2.50mである。

覆土には、上層から中層にかけて粒子が粗く1cm大の砂利を含む褐色土や淡褐色土、下層には粒子の粗い褐灰色土や黄褐色砂質土が堆積して、この付近の基盤層である灰白色シルト質土へと達している。また、遺構の底面にさらにピット状の遺構を掘り込んでいる箇所も認められる。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約40cmを測る。

遺物の出土状況をみると、下層に堆積する黄褐色砂質土が安定した遺物包含層となっており、なかには集中して出土している箇所もある。遺物はそのほとんどが、弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えられるものであり、器種には甕・壺・鉢・高坏・器台などがあり、バラエティーに富んでいる。

遺構の性格は判断しがたいが、覆土には粒子の粗い砂質系土が堆積していることから、常時水の流れがあったとは考えにくく、空濠のような状態であったことが想定される。9Gr以東では当該期の遺構が検出されていないことや住居跡など遺跡の中心は調査区よりも西方にあることが推測されることから、集落を区画する溝である可能性もある。また、遺構の肩部ではピット状の遺構が検出されている。これらの中には中世など新しい時期のものもあるが、そのほとんどがSD10とさほど時期差を生じないものであり、柵列など関連した機能をもつことも考えられる。市内では天神遺跡や古志本郷遺跡[4]・下古志遺跡[5]などで当該期の大規模な環濠と指摘される遺構が検出されている。弥生時代終末期から古墳時代初頭におけるこのような溝状遺構のあり方は、今後も注視していく必要がある。

SD10の出土遺物（第46図～第47図）

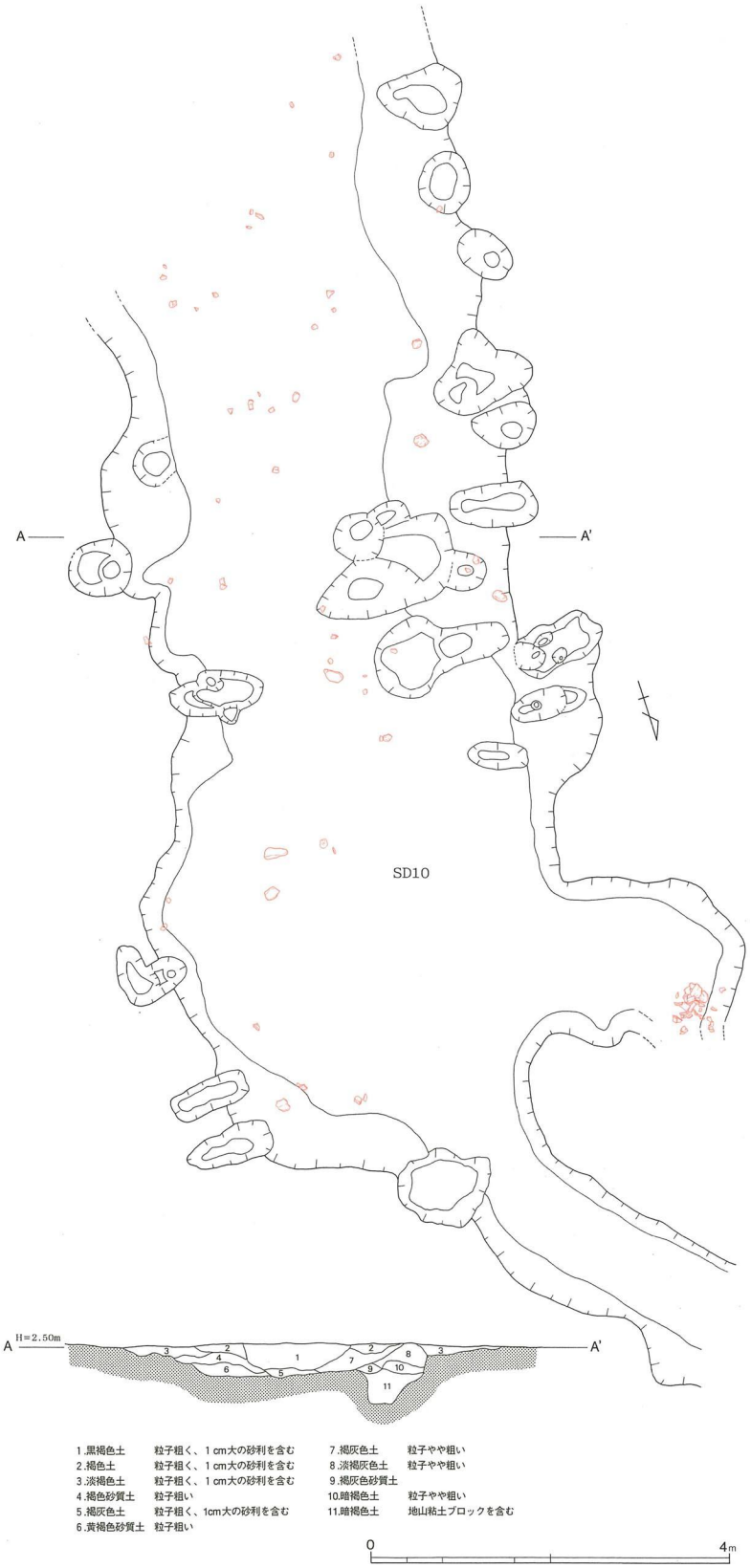
遺物には、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃のものを中心に甕・壺・鉢・高坏・器台などが出土しており、中にはほぼ完形となるものや在地的な特徴をもつものもある。また、数点ではあるが古墳

時代中期頃と考えられる遺物も出土しているが、これらは混入した可能性の強いものである。

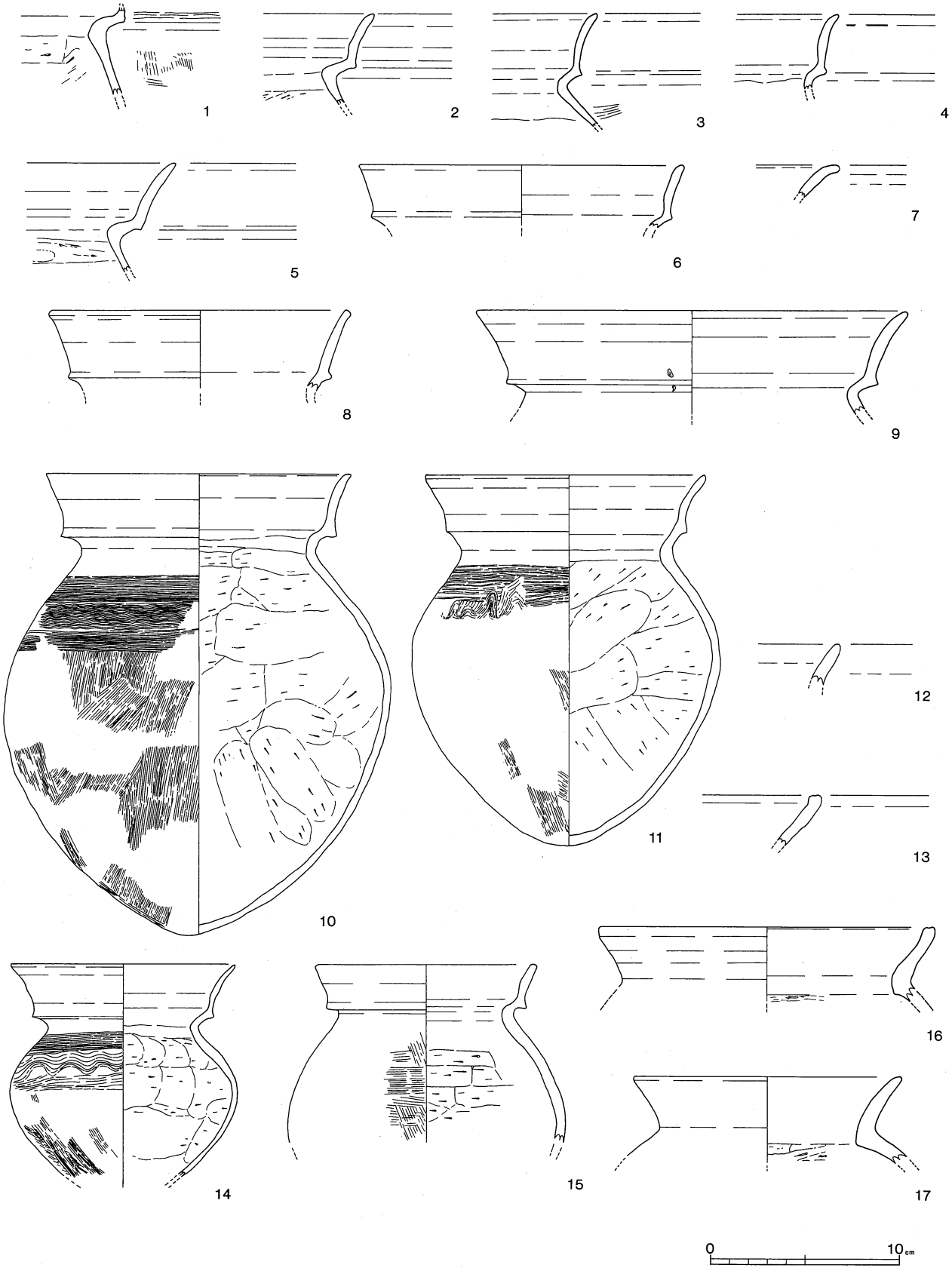
第48－1～6・8～15は、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃にかけての甕である。1は、複合口縁の稜は比較的突出し、稜の上部にはクシ状工具による平行線文がわずかに認められる。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。このような特徴をもつ甕は、草田編年4期頃に相当する資料と考えられ、SD10内から出土したものの中では最も古い時期の遺物と考えられる。2～6は複合口縁をもつ口縁部の細片で、内外面ともにナデによる調整が行われ、口縁端部はわずかに外反し先細りとなって丸くおさめている。なお、突出部の稜は2・5・6はやや下向きに、3・4は水平方向に突出している。

8・9も同様な形態的特徴をもつものであるが、9は口径22.6cmを測る比較的大形のものである。

10・11はSD10が2つの溝に分岐する西方の土器溜で検出したほぼ完形の甕である。10は、口縁部の稜はやや下方に突出し、口縁端部はやや外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われ、頸部下外面の肩部には2列にクシ状工具による平行線文を施し、その間を波状文を意識したと思われる文様で飾っている。胴部から下方にかけては縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が



第45図　SD10実測図



第46図　SD10出土遺物実測図（1）

行われている。体部のプロポーションは倒卵形でかすかな平底をもち、外面全体にススが付着しているのが特徴である。また、現状からは判断しがたいが、10と同様に土器溜で検出した11も接合できない箇所が認められ、意図的に甕の体部に孔をあけた可能性もある。11は、口縁部の稜はわずかに下方に突出し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、頸部下外面の肩部にはクシ状工具による平行線文や波状文が施されている。胴部から底部にかけては縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。10に比べるとやや小型ではあるが、体部は倒卵形でかすかな平底をもち、形態的特徴がよく似ている。以上のような甕は、草田編年６期頃に相当する資料と考えられ、SD10内からはこの時期のものが最も多く出土している。

12・13は口縁部の細片で全体的な形状は判断できないが、いずれも内外面ともにナデによる調整が行われ、13は口縁端部がやや内傾してフラットな面を有し、1条の凹線を作り出している。これらの遺物は、前述したものに比べるとやや後出し、古墳時代前期のものである可能性がある。

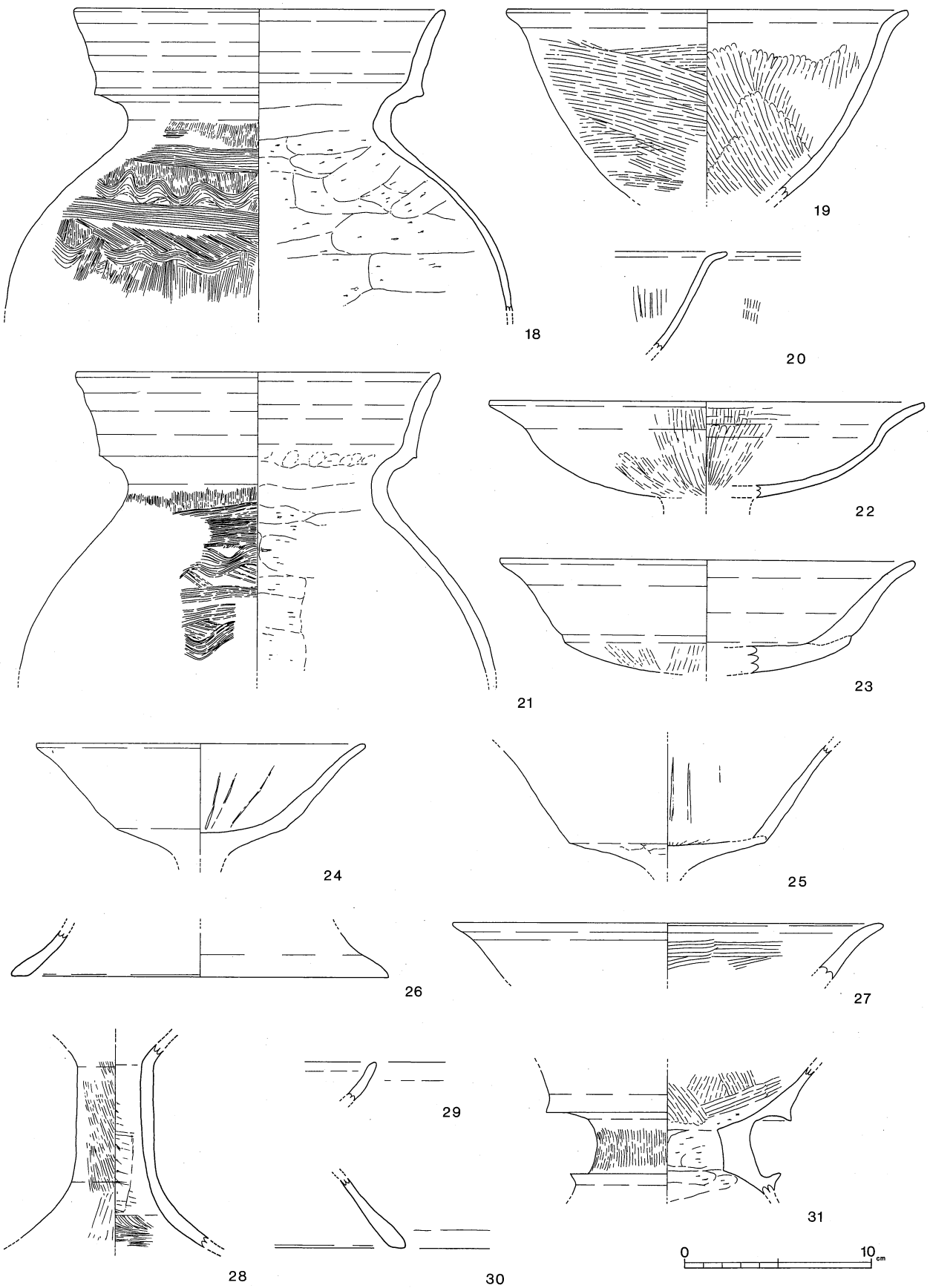
14は、複合口縁の稜は水平方向にわずかに突出し、口縁端部はやや外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、頸部下外面の肩部にはクシ状工具によって２列に平行線文を施し、その間を波頂間がやや広い波状文で飾っている。胴部から底部にかけては縦方向のハケ内面はケズリによる調整が行われている。また、器壁が非常に薄く、形態的には10・11とよく似ており、草田５期～6期に相当する資料と考えられる。

15は、複合口縁の稜はやや下向きに突出し、口縁端部にはわずかに平坦面を作り出している。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われ、頸部下外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。このような特徴をもつ甕は、10・11などよりもやや新しい様相を示すもので、草田６～7期に相当する資料と考えられる。

16・17は単純口縁をもつ土師器甕である。16は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部にフラットな面を有して1条の凹線を作り出している。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。また、口縁部の上位にわずかな稜をもち、外面にはススが付着している。形態的には13と似ており、古墳時代前期に相当する資料であろう。17は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。古墳時代中期から後期にかけての資料と考えられ、混入によるものであろう。

第47図－18・21はやや大形の壺である。18は、複合口縁の稜は水平方向に突出しているがやや鋭さを欠き、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面の肩部には２条の平行線文とやや波頂間の広い波状文を2列に巡らせており、その他は縦方向のハケによる調整が行われている。また、稜をもつ頸部上位の内面には指頭圧痕が認められ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。21も形態的特徴はよく似ており、同一個体の可能性もある。いずれも草田５～６期頃に相当する資料と考えられる。

19・20は鉢である。19は外方にゆるく屈折する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。外面は横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキによって丁寧に仕上げられている。20は、外方にやや強く屈折する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は縦方向の



第47図　SD10出土遺物実測図（2）

ミガキによる調整が行われている。以上のような鉢は、器壁が薄いうえ共伴している他の遺物から考えると草田５～６期頃に相当する資料と考えられる。

22～25・27～29は、高坏である。22は、坏部が2段に作られ、口縁端部は平坦におさめている。口縁部・坏部とも内外面は縦方向のミガキによる調整が行われている。23は、口縁部と坏部の境に段をもち、口縁端部は外方にゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。坏部外面の上位はナデ、下位は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。また、坏部と口縁部は別に作り、刻目を入れて合わせる接合法が観察できる。24は、口縁部と坏部の境に段をもち、口縁端部は外方にゆるく屈折して丸くおさめている。内外面ともに赤色塗彩され、内面には暗文が施されている。また、坏部と脚部は円盤充填法によって接合されている。25は、24と同様に赤色塗彩されており、内面には暗文が施されている。前述したものに比べると坏部から口縁端部にかけての立ち上がりが直線的で、やや深い坏部を有するものである。27は、口縁端部は外方にゆるく屈折し、丸くおさめている。外面はナデ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。

28は、高坏の脚部破片である。筒部外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、裾部外面は縦方向のミガキ、内面はハケによる調整が行われている。29は、高坏の坏部であろうか。内外面ともに赤色塗彩され、口縁端部は丸くおさめている。

以上のような高坏は、22・23などはやや古い様相を示しているが、共伴している他の遺物から考えるとおおよそ草田５～６期頃に相当する資料と考えられる。

26・30は鼓形器台の脚部であろう。いずれも内外面ともにナデによる調整が行われ、脚端部を平坦に作り出し、外面にわずかな膨らみをもっている。出雲地方における器台は、脚端部から筒部にかけて内傾して立ち上がり、平坦面をもたないものが一般的であり、このような特徴をもつ器台は珍しい。

31は、鼓形器台の筒部付近の破片である。やや長めの筒部を有し、外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。受部・脚部ともに外面はナデによる調整が行われ、受部内面はミガキ、脚部内面はケズリによる調整が行われている。この器台は、他の出土遺物から考えると古墳時代初頭頃のものと考えられるが、筒部がやや長く、器壁が非常に厚いことが特徴であり、在地的な手法の違いと考えることもできる。

第48図－32～39も鼓形器台である。32は、筒部が縮約され、脚端部は外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、筒部から脚部にかけての内面はケズリによる調整が行われている。33は、第47図－31と同様な形態的特徴をもつものである。SD10からはこのような異なる手法をもつ鼓形器台が共伴していることが注意される。

34・35は受部の破片である。34は口縁端部は外方に屈折し、先細りとなって丸くおさめている。外面はナデ、内面上位には横方向のミガキによる調整が認められる。35は、口縁端部は外方にゆるく屈折し、丸くおさめている。外面はナデ、内面上位は横方向のミガキ、下位はケズリによる調整が行われている。

36～39は鼓形器台の脚部破片である。36・37は細片で、脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。いずれも外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。38は、やや厚めの器壁をもつもので、脚端部を折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われてい

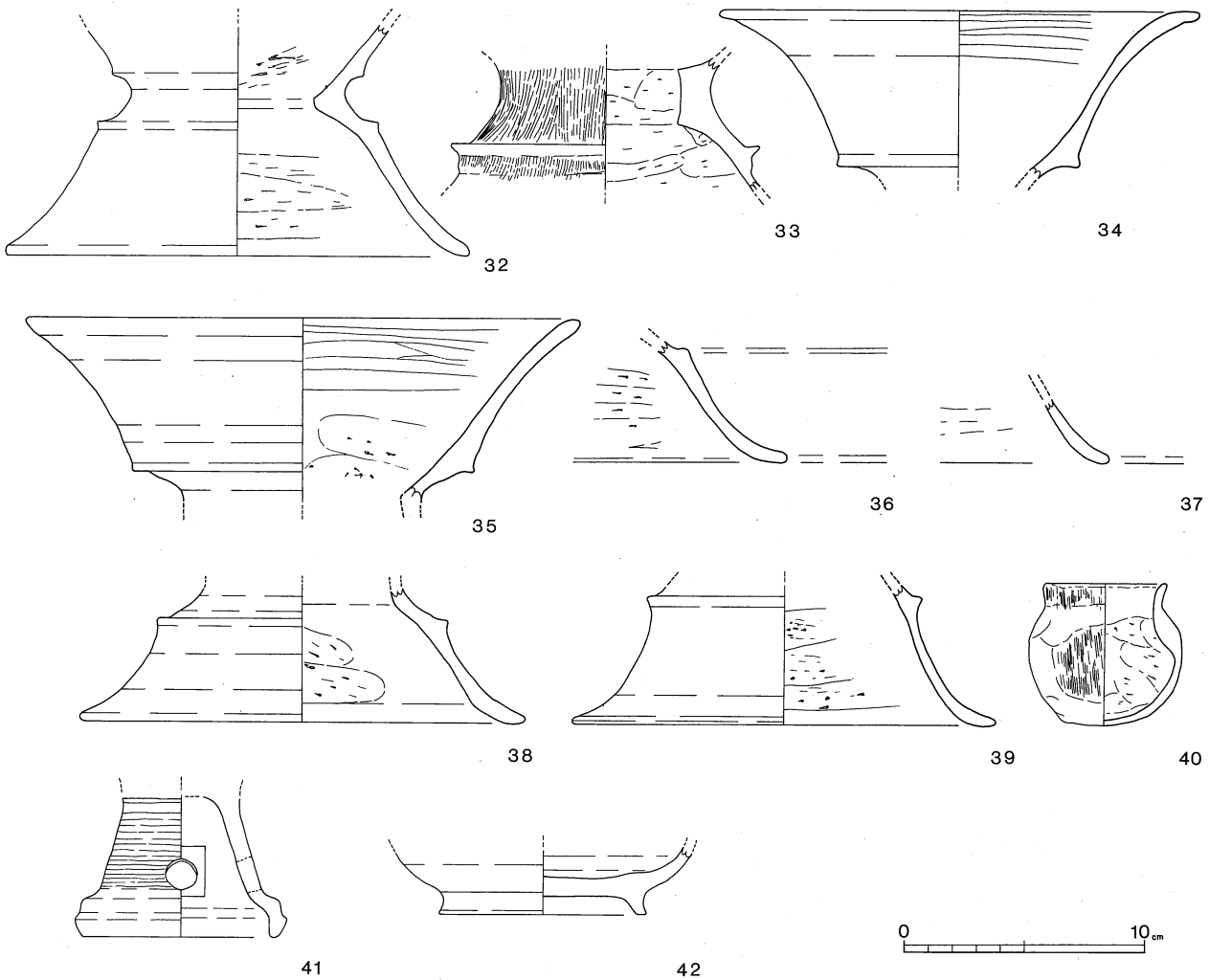
る。39は、器高がやや高くなるものと考えられ、脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

以上のような鼓形器台は、草田５～６期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものであろう。しかし、31・33のように筒部がやや長く器壁が非常に厚いものや26・30の脚部のように脚端部外面に膨らみをもつものなど、一般的な製作技法とは違うものが認められる。在地的なものか、人的交流によってもたらされたものかはわからないが、今後も注視していく必要がある。

40は、土師器の小型壺である。外面は粗いナデによる調整が行われ、至るところに指頭圧痕が認められる。頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面と口縁部内面には赤色塗彩された痕跡が残っている。

41は、須恵器高坏の脚部である。径1.4mmほどの円形の透しを３方向に入れるものと考えられ、脚端部は直立ぎみに立ち上がり、脚裾に沈線が入っている。外面はナデと横方向のカキメ、内面はナデによる調整が行われている。このような特徴をもつ高坏は、山本編年Ⅰ期に相当する資料であり、松江市薬師山古墳[6]などから出土しているが、出雲地方ではほとんど出土例のないものである。

42は、須恵器高台付坏である。高台部は短く直立し、内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナ



第48図　SD10出土遺物実測図（3）

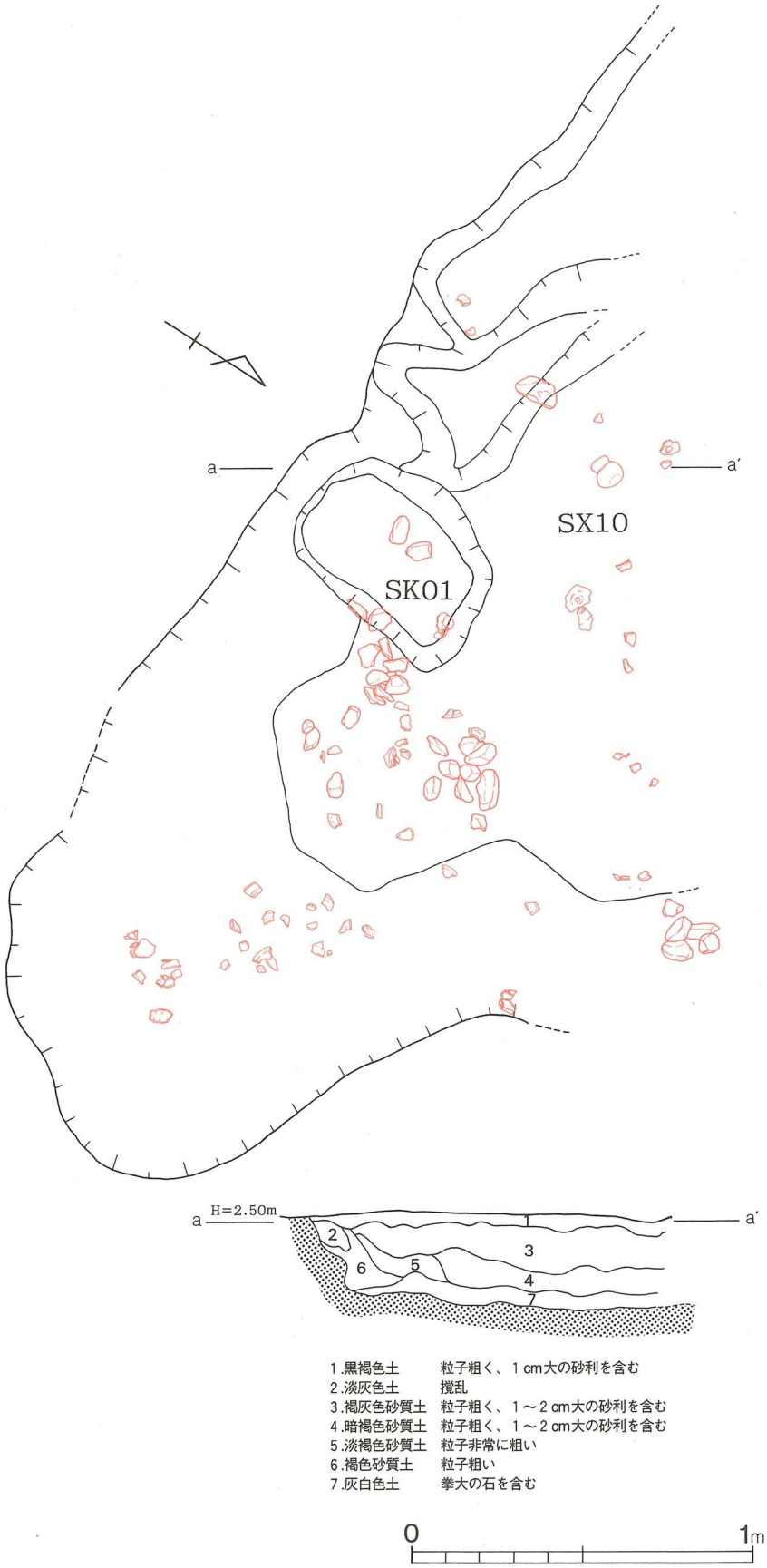
デ調整が行われている。8世紀以降のもので、混入したものであろう。

以上のようにSD10からは多くの遺物が出土しており、その中には出雲地方では珍しい形態的特徴をもつものがある。しかし、新しい時期の混入品がわずかに認められるものの、時期的には弥生時代終末期から古墳時代前期に相当する資料であると言える。

SX10（第49図）

12Gr北側の黄褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。この遺構の南側には大きな撹乱があるとともにSD10が築かれており、2つの溝に分岐している。この東側の溝が北側でさらに落ち込んだのがSX10である。

しかしながら、SD10とSX10の出土遺物には接合できるものがあり、時期的にも差が生じていないことから、SD10と一連のものである可能性が高いものと考えられる。また、近世墓と考えられるC12Gr SK03もSX10と切合関係にある。



第49図　SX10実測図

検出した状況では、東西長約6.0m、南北長約4.0m以上を測るものと推測されるが、北側では調査区外へと達しているため、平面プランは不明である。なお、検出高は標高2.04mである。

覆土は、上層に粒子が粗く１cm大の砂利を含む黒褐色土、中層に１～２cm大の砂利を含む褐灰色砂質土・暗褐色砂質土、下層には拳大の石を含む灰白色土が堆積して基盤層である灰白色シルト質土に達している。断面の形状は、遺構の東側ではやや鋭角に西側では緩やかに落ちて底面は平坦に作り出しており、最深部までの深さは50cmである。

遺物の出土状況をみると、SD10からさらに落ち込む東側からの出土量が多く、層位的には4層の暗褐色砂質土が比較的安定した遺物包含層となっている。時期的には弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものが多く、遺構が築かれたのも当該期と考えられる。

遺構の性格は判断しがたいが、SD10と同じ遺構と考えられることから、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。しかしながら、SD10に比べると底面のレベルが10～20cm低くなっており、この落ち込み部が別の機能をもっていたことも考えられよう。

SX10の出土遺物（第50図・第51図）

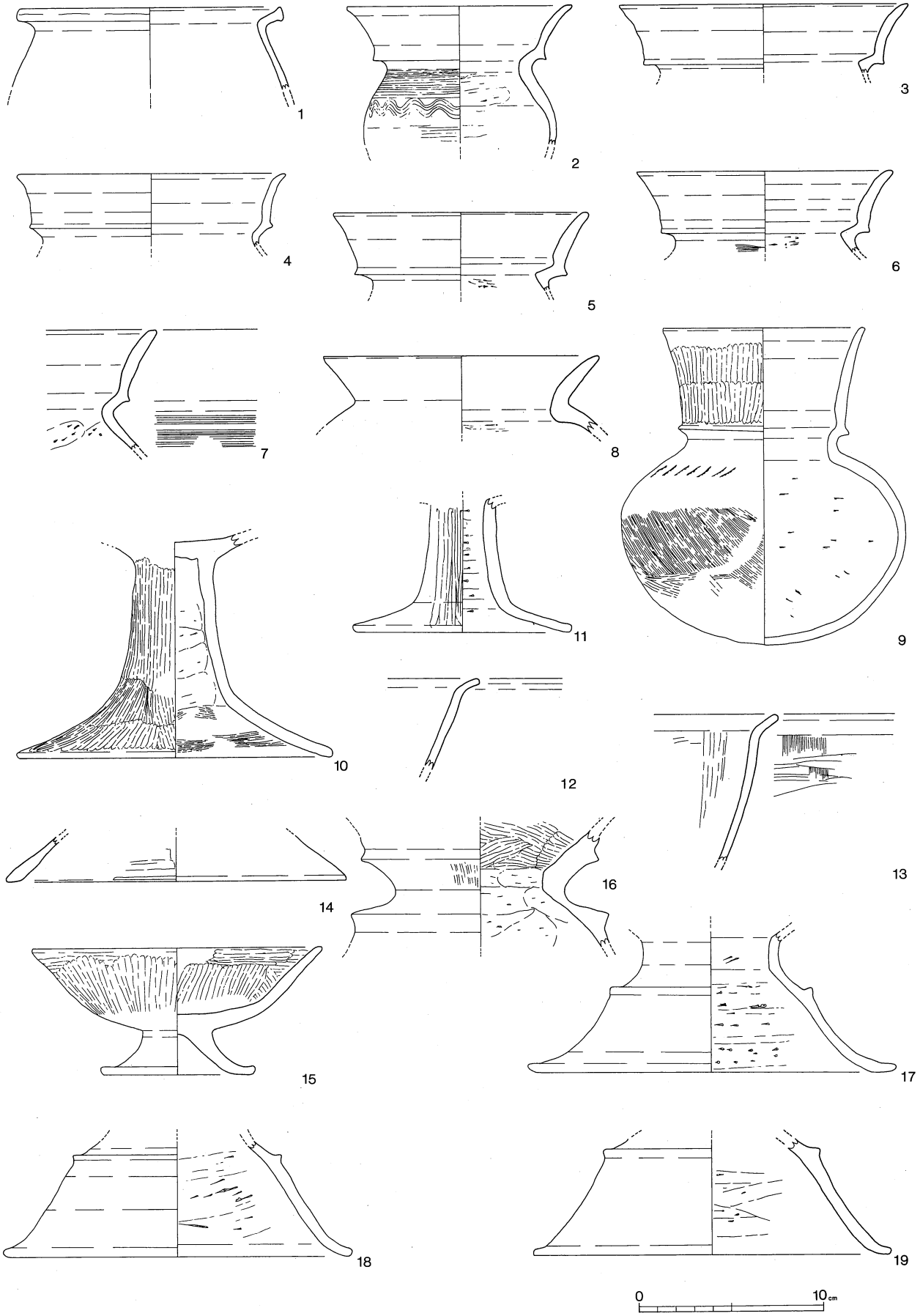
遺物には、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものを中心に、甕・壺・高坏・低脚坏・鼓形器台などが出土しており、バラエティーに富んでいる。

第50図－１は、弥生土器の甕である。口縁部はゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作り出している。口縁部内外面はナデ、頸部下も内外面ナデによる調整が行われている。このような特徴をもつ甕は、松本編年Ⅲ－２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。なお、井原遺跡では遺構に直接伴うものではないが、調査区の西側で弥生時代中期頃の遺物が検出されている。調査区の東側には当該期の遺構や遺物が皆無であるであることから、さらに西方に当該期の集落が形成されていた可能性が高い。

２～７は、古式土師器の甕である。２は、複合口縁の稜はやや下方に突出し、口縁端部はやや外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、頸部下外面の肩部はクシ状工具による平行線文と波状文で飾っている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。３・４は細片で、１と同様な特徴をもっている。５・６は焼成や胎土がよく似ており、同一個体の可能性があるものである。口縁端部は丸くおさめ、６は頸部下外面の肩部にクシ状工具による平行線文が認められる。７は、複合口縁の稜はやや鋭さを欠き、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。頸部下外面の肩部はクシ状工具による平行線文を施し、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ甕は、草田５～6期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃にかけてのものであろう。

８は、土師器甕である。口縁部は「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。混入したものと考えられ、第46図－17と同様に古墳時代中期から後期にかけてのものであろう。

９は、複合口縁をもつ完形の直口壺である。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。頸部下外面は縦・横方向のハケ、肩部には2枚貝による貝殻施状文が部分的に施されている。頸部下内面はケズリ



第50図　SX10出土遺物実測図（1）

による調整が行われ、胴部はかなり張り出している。市内では天神遺跡や下古志遺跡などから同じ特徴をもつものが出土している。

10・11は高坏の脚部である。10は底径17.2cmを測る大形品で、外面は縦方向のミガキ、内面筒部はケズリ、裾部はハケによる調整が行われている。坏部と脚部は円盤充填法により結合されている。

11もほぼ同様の特徴をもつものである。以上のような高坏も、他の出土遺物から考えると草田5～6期に相当する資料であろう。

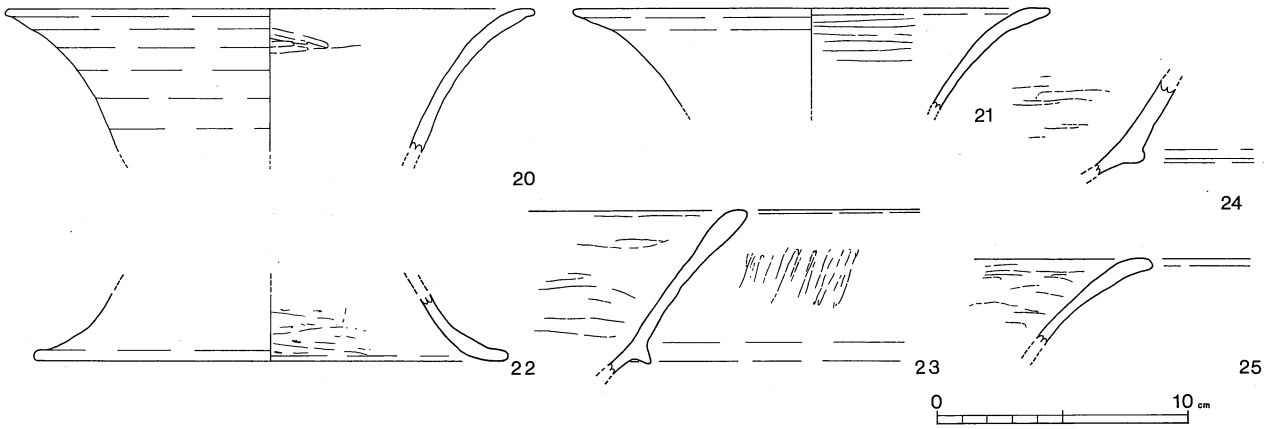
12・13は鉢である。12は、口縁部はゆるく外方に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部から胴部にかけての内外面はナデによる調整が行われている。13も口縁部の特徴は12とほぼ同様であるが、頸部下外面は縦方向のハケの後に横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキによる調整が行われている。以上のような鉢は、草田5～6期に相当する資料と考えられる。

15は、低脚坏である。やや深い坏部をもち、内外面とも上位は横方向、下位は縦方向のミガキによる調整が行われている。脚部は外方に折り曲げて脚端部は丸くおさめ、外面はナデ、内面筒部はケズリによる調整が行われている。器壁がやや厚く坏部に深さがあり、一般的な低脚坏とは形状が異なっている。天神遺跡でも同様な低脚坏が多く出土していることから、在地的な特徴をもつものと考えられる。

16～19は、鼓形器台の脚部から筒部にかけての破片である。16は、やや長めの筒部をもち、器壁が非常に厚く、筒部外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。受部内面はミガキ、脚部はケズリによる調整が行われている。第47図－31や第48図－33と同様の特徴をもつもので、一般的な器台とは形状が異なっている。14は器台の脚部と考えられるが特異な形状をもつもので、第47図－26と同様なタイプである。

17～18は、脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われる出雲地方では一般的な鼓形器台である。

第51図－20・21は受部破片である。いずれも口縁端部はやや外反し、丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリの後に横方向のミガキによる調整が行われている。25も同様な特徴をもつものである。22は脚部、24は筒部から受部にかけての破片で、出雲地方では一般的な手法によって調整が行



第51図　SX10出土遺物実測図（2）

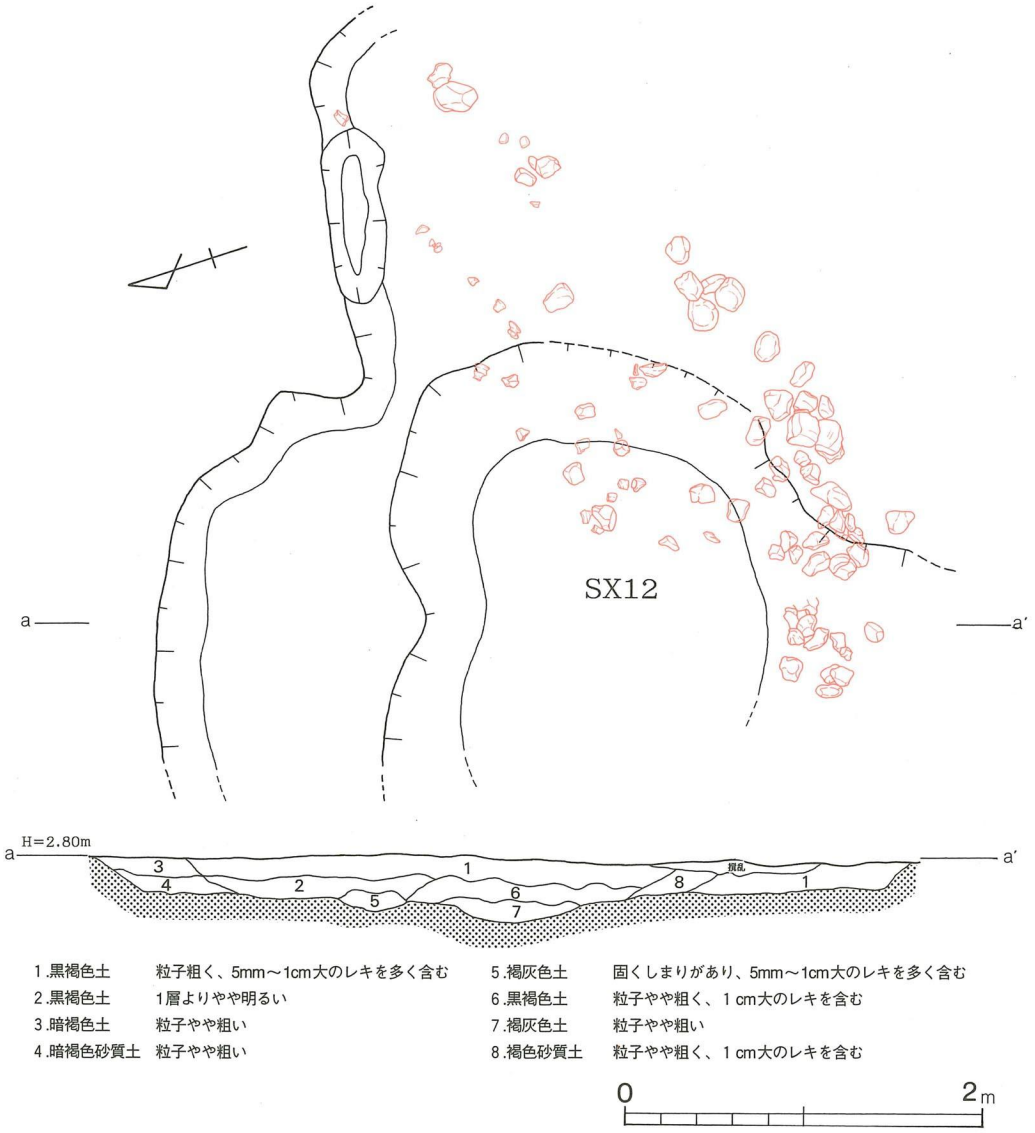
われるものである。

23は、口縁端部が肥厚して端部に平坦面を作り出しており、第50図－14・16などと同様に異なる手法をもつものである。外面は縦方向のミガキ、内面はケズリの後に横方向のミガキによる調整が行われている。

以上のようにSX10からは多くの遺物が出土しており、その中には特異な形態的特徴をもつものがある。この手法の違いは人的交流によるものか在地的な特徴であるのかは判断しがたいが、多くの遺物が草田５～6期の範疇に入るものであることから、これらの遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭に相当する資料と考えられる。

SX12（第52図）

調査区の西端、A15Grで検出した落ち込み状遺構である。西側は調査区外へと達し、南側は近世の遺構であるSD13によって切られており、畑地の耕作によって上部も削平を受けているものと考えられる。平面プランは現状からは判断できないが、東西長4.6m以上、南北長4.2m以上を測るかなり大規模



第52図　SX12実測図

なものであることが推測される。なお、検出高は標高2.80mである。　覆土は、上層に粒子が粗く5mm～1cm大のレキを多く含む黒褐色土が広く堆積し、一段深くなる中央部下層には、粒子がやや粗い黒褐色土や褐灰色土が堆積してこの辺りの基盤層である灰白色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて平坦面を作り出し、中央部ではさらに落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは約36cmを測る。

遺物の出土状況をみると、中央部の最深部よりもやや東側に偏って出土する傾向にあり、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物を中心として出土している。また、下層には10～20cm大の割石が多く認められていることが注意される。焼成痕などは認められないが、付近には存在しないものであることから、人為的に持ち込まれたものであろう。

遺構の性格は現状からは判断できないが、人為的に持ち込まれた石が何らかの意味をもつものと考えられる。井原遺跡では、前述したSD10・SX10や、Ⅴ区でもほぼ同様な状況で石が検出されており、今後も注視していく必要がある。

SX12の出土遺物（第53図）

遺物には、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものを中心に甕・鉢・高坏・鼓形器台などが出土している。

1～3は、複合口縁をもつ甕である。1は、複合口縁の稜はやや下方に突出し、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。2は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部に平坦面を作り出している。3は、2と同様な特徴をもち、口縁部内外面はナデ、頸部下外面の肩部にはわずかにクシ状工具による平行線文が認められるが、ナデて消している。頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。以上のような特徴をもつ甕は、1がやや古い様相を示しているが、草田6期に相当する資料と考えられる。

4は、鉢であろうか。口縁部はゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はミガキによって平坦面を作り出している。口縁部、体部ともに丁寧なミガキによって調整が行われている。

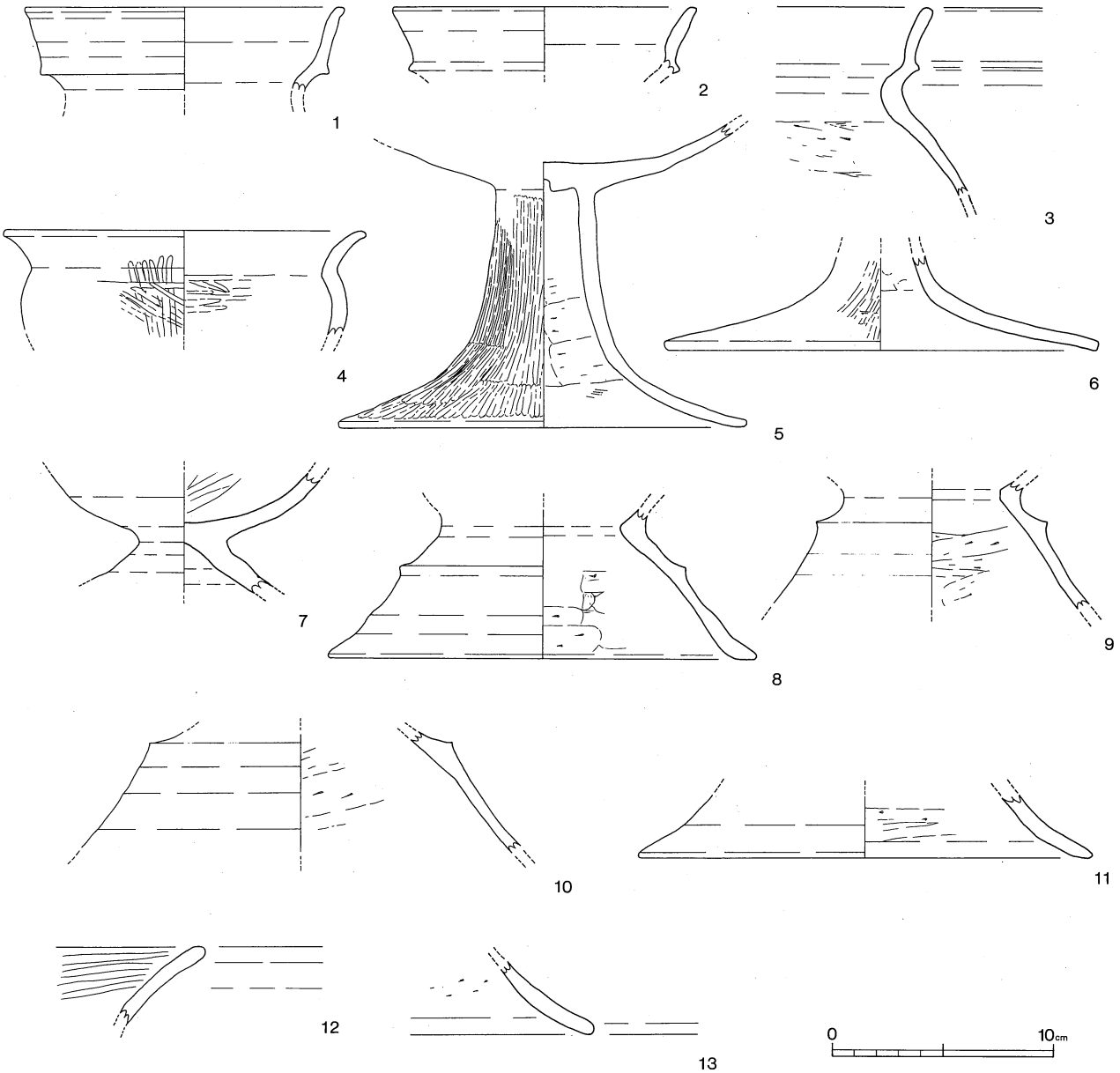
5・6は高坏の脚部である。5は、底径18.4cmを測る大形品で、外面は縦方向のミガキ、筒部内面はケズリ、裾部はハケによる調整が行われている。また、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。6は裾部が大きく開くタイプで、脚端部を平坦におさめている。外面は縦方向のミガキ、筒部内面はケズリ、裾部はハケによる調整が行われている。脚部破片からは時期的判断はしがたいが、他の出土遺物から考えると草田6期頃に相当する資料であろう。

7は、低脚坏あるいは台付の鉢であろうか。器壁が厚く、坏部と脚部の口径差は小さいものと推測される。坏部外面はナデ、内面はミガキ、脚部は内外面ともナデよる調整が行われている。また、脚部の開きが大きく、胎土も出雲地方のものとは異なることから、搬入品の可能性もある。

8～11は、鼓形器台の脚部である。8は、脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。やや器高が高くなるものと考えられ、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。9は、やや厚めの筒部をもつものである。筒部は縮約され、やや新しい様相を示すものである。10は大形の脚部破片であるが、やや器壁が厚いのが特徴である。11・13は、10と同様の特徴をもつもので、出雲地方で一般的に見られるものである。

12は受部の破片で、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。外面はナデ、内面は丁寧な横方向のミガキによる調整が行われている。

以上のようにSX12からは多くの遺物が出土しており、その中にはSD10やSX10から出土した器壁の厚い鼓形器台や搬入品と考えられる遺物も出土している。そして、出土遺物から考えると、そのほとんどが草田6期に相当する資料と考えられる。SX12はSD10やSX10にやや後出して築かれた遺構である可能性が強い。



第53図　SX12出土遺物実測図

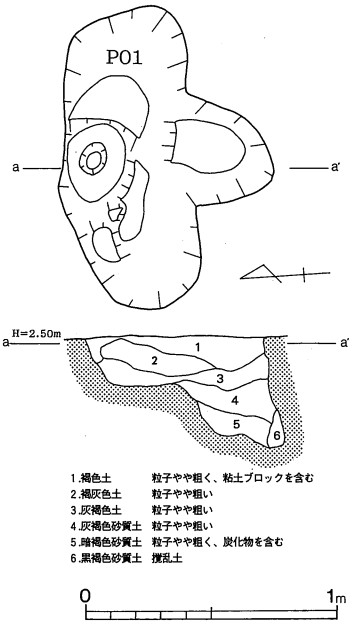
A11Gr P01（第54図）

A11Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。上部は耕作によって削平を受けているものと考えられるが、基軸を東西方向にもつものである。平面プランは、長軸長1.20m、最大幅48cmを測る東西に長い楕円形状を呈しているが、遺構のほぼ中央部の南側には一段高い張出し部を設けている。この張出し部は、覆土の状況からは切合関係は認められず、ほぼ同じ時期に築かれたものであるものと考えられる。なお、検出高は標高2.53mである。

覆土には、上層に地山粘土ブロックを含む褐色土、中層に粒子のやや粗い灰褐色土・灰褐色砂質土、下層には炭化物を含む暗褐色砂質土が堆積し、基盤層である褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、長軸からは緩やかに短軸からはほぼ垂直に落ちて、底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは45cmである。また、張出し部の深さは約20cmで底面はほぼ平坦に作り出している。

遺物には弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての甕の小片が出土しており、遺構が築かれた時期も当該期であろう。

遺構の性格は、張出し部が存在することに何らかの機能をもたせていたと考えられ、深さがあり炭化物が認められることから、土壙墓である可能性もある。10～15Grにかけて検出された当該期のピット状遺構は、そのほとんどが東西方向に基軸を向けていることは、出土遺物は少ないながら注意される。



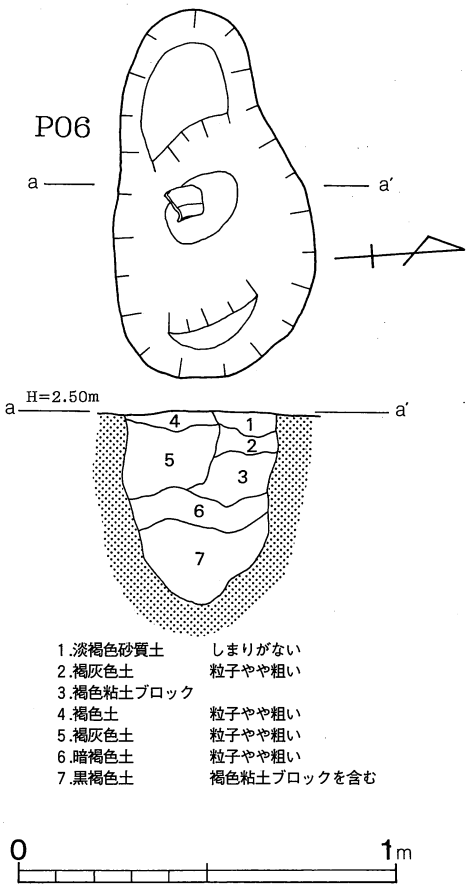
第54図　A11Gr P01実測図

A11Gr P06（第52図）

前述したP01の北側で検出した東西方向に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは、長軸長98cm、最大幅50cmを測り、東西に長い楕円形状を呈している。なお、検出高は標高2.50mである。

覆土の上層は撹乱されているが、中層には粒子のやや粗い暗褐色土、下層には地山粘土ブロックを含む黒褐色土が堆積して、褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは51cmを測る。

出土遺物は、口縁部から肩部にかけての壺が中層に堆積する暗褐色土中から1点のみ検出されている。この壺は、第47図－18に示すものでSD10内の破片と接



第55図　A11Gr P06実測図

合されることが注意される。草田５～6期に相当する資料と考えられ、遺構が築かれた時期も当該期でSD10と同時期のものであろう。

遺構の性格は、形状や基軸の方向が10～15Grに存在するピット状遺構とほぼ一致することから、関連のあるものと考えられ、土壙墓の可能性がある。

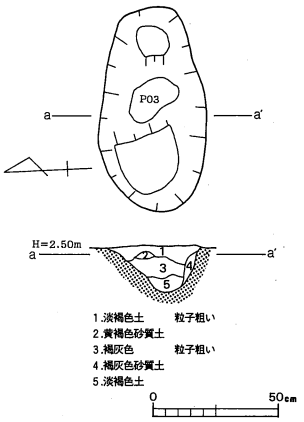
A11Gr P03（第46図）

A11Grの黄褐色砂質土上面で検出した東西方向に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは長軸長80cm、最大幅40cmを測り、東西に長い楕円形状を呈している。なお、検出高は標高2.53mである。

覆土は上層に粒子の粗い淡褐色土が堆積し、褐灰色土・淡褐色土と続いて基盤層である褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、北側からは緩く落ちているが、その他は鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは10cmを測る。

遺物は細片が出土しているにすぎないが、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃のものと考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。

遺構の性格は、前述したピット状遺構と同様に土壙墓の可能性がある。P03は他のピット状遺構よりも小規模で深さもないが、10cmほど北側にはP03よりも大きなP04が存在していることを考えると、血縁関係をもつ幼児の墓である可能性もあろう。



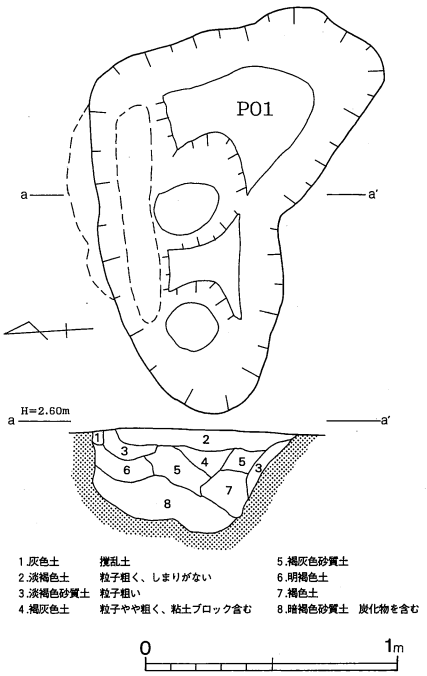
第56図　A11Gr P03実測図

B11Gr P01（第57図）

B11Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。基本的には東西方向に基軸をもつが、東側では北東－南西方向に基軸を変化させて張出しており、平面プランはいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高2.56mである。

覆土には上層にしまりのない淡褐色土、下層には炭化物を含む暗褐色砂質土が堆積している。断面の形状は、約45度の角度で落ちているが北側ではほぼ垂直に落ちて、上面よりも内側に入り込む箇所もある。やや南寄りにある最深部までの深さは40cmを測る。

他のピット状遺構に比べるとややいびつな形状を呈しているが、基軸の方向は基本的に一致するとともに、下層には炭化物が認められることから、土壙墓である可能性がある。なお、遺物は出土していないが、P01は長軸長1.50m、最大幅70cmを測り、他のピット状遺構よりも大規模なものである。



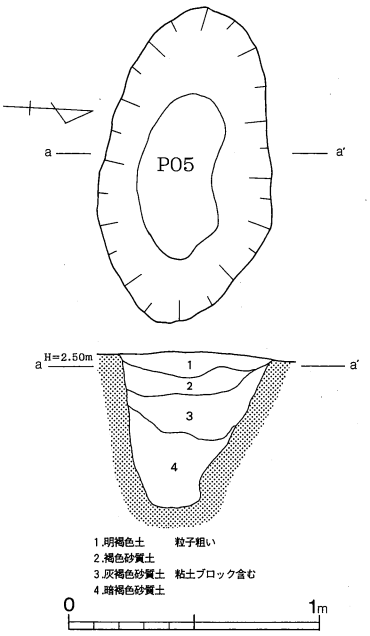
第57図　B11Gr P01実測図

A14Gr　P05（第58図）

A14Grの黄褐色砂質土上面で検出した東西方向に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは長軸長1.28m、最大幅70cmを測り、東西に長い楕円形状を呈している。なお、検出高は標高2.53mである。

覆土は、上層に粒子の粗い明褐色土・褐色砂質土、中層には灰褐色砂質土、下層には暗褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは62cmを測る。

遺物には細片が出土しているにすぎないが、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃のものと考えられる。他のピット状遺構と同様に東西方向に基軸をもつことから、土壙墓の可能性がある。

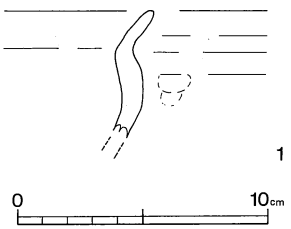


第58図　A14Gr P05実測図

A11Gr P14

A11Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。P12・P15によって切られているが、本来は長軸長1.0m、最大幅40cmの東西方向に基軸をもち、楕円形状を呈するものと推測される。

遺物には、小型壺が1点出土している。第59図－1は、口縁部は外方にゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下は内外面とも手捏ねで作られており、随所に指頭圧痕が認められている。遺物からは時期的判断はしがたいが、他のピット状遺構と基軸が一致することから、弥生時代終末期から古墳時代初頭に築かれたと考えられ、土壙墓の可能性がある。

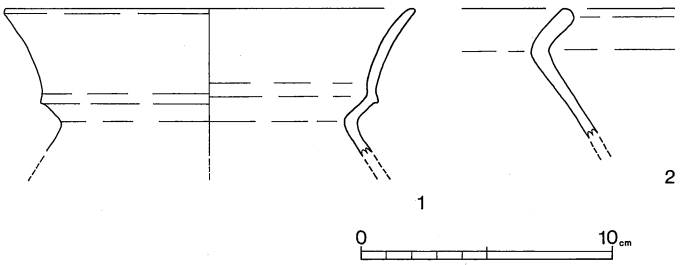


第59図　A11Gr P14
出土遺物実測図

A12Gr P01

A12Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構で、南に張り出すややいびつな形状を呈している。SD10の東肩部に掘り込まれたもので、何らかの関連をもつものと考えられる。

第60図－1は複合口縁をもつ甕である。複合口縁の稜はやや下方に向いて突出し、口縁端部はやや外反して先細りとなっている。口縁部は内外面とも



第60図　A12Gr P01出土遺物実測図

ナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。2は、単純口縁をもつ甕である。口縁部は「く」の字状に屈折し、口縁端部は平坦面を意識しておさめている。口縁部、頸部下内外面ともにナデによる調整が行われている。

1は草田5期、2は松本編年Ⅲ—2様式頃に相当する資料と考えられるが、2は混入したものであろう。なお弥生時代中期頃の遺物は、この他にもⅠ区の西側で数点検出されている。

遺構に伴う出土遺物（第61図）

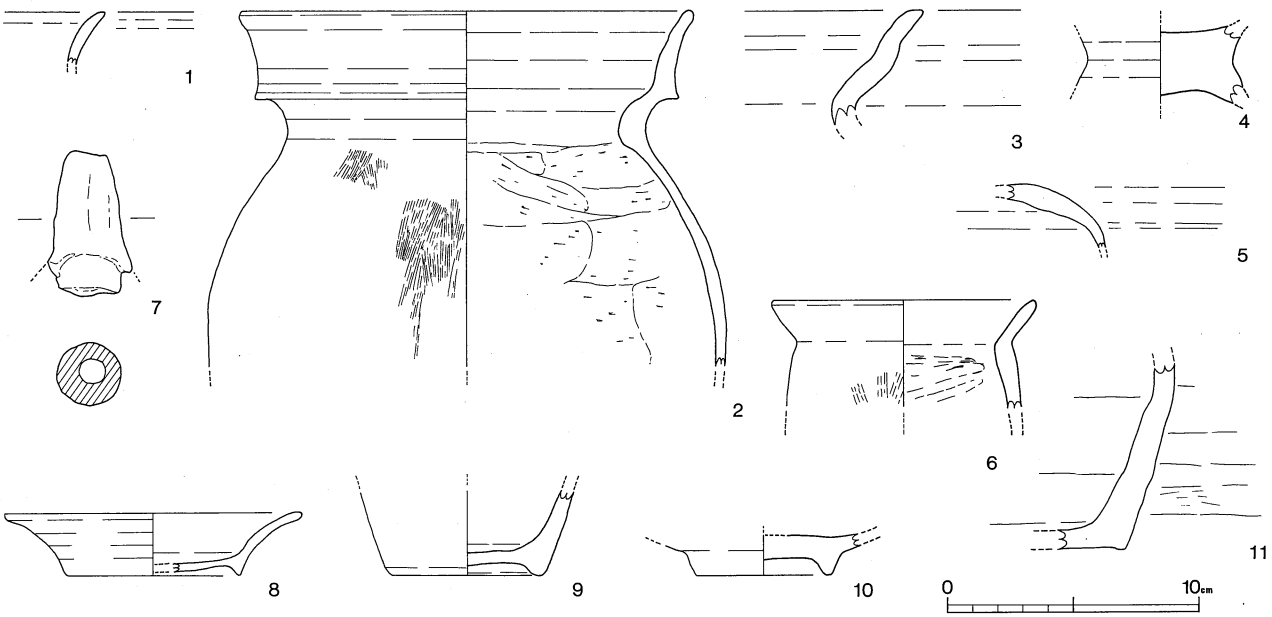
1は甕の口縁部であろう。口縁端部はやや外反し、先細りとなっている。小片で時期的判断はしがたいが、弥生時代終末期のものの可能性がある。A1Gr SX06からの出土である。

2は、B14Gr SX11から出土した古式土師器の甕である。複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。草田5～6期に相当する資料であろう。

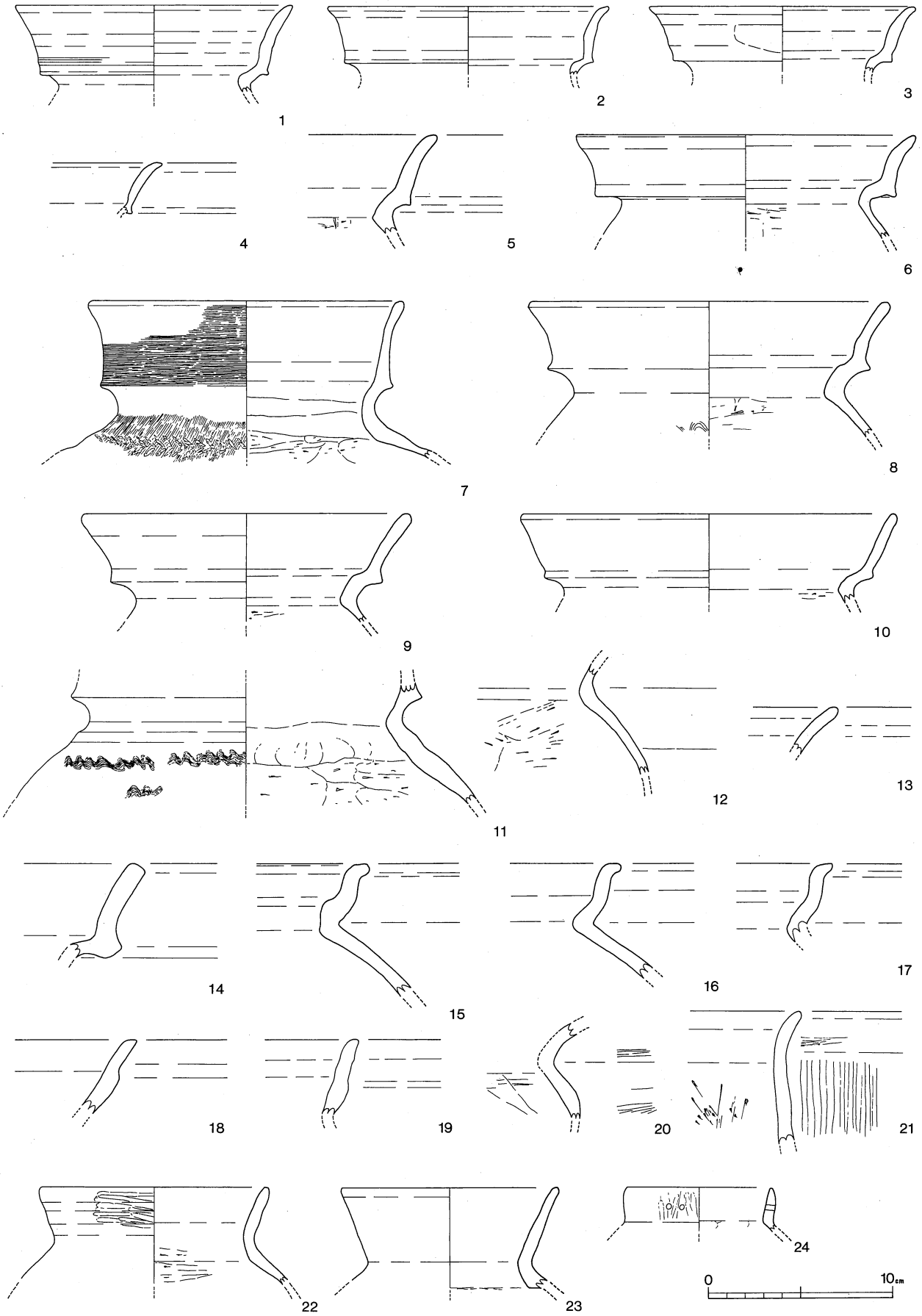
3は、C3Gr P05から出土した土師器甕である。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われ、口縁端部はやや内傾して平坦面を作り出し、口縁部の中位に稜をなしている。古墳時代前期から中期にかけてのものであろう。

4・5はともにA1Gr SX02から出土しているもので、4は高坏の坏部と脚部との接合部であろう。かなり大形品と考えられ、接合は付加法である。5は、須恵器の坏身であろう。外面上位は回転ヘラケズリ、下位は回転ナデによる調整が行われている。他の遺構の出土遺物から考えると、古墳時代中期頃の資料であろう。

6は、A14Gr P02から出土した小型の甕である。単純口縁で口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。この遺物だけでは判断しがたいが、古墳時代中期頃の可能性をもつものである。



第61図　遺構に伴う出土遺物実測図



第62図　遺構外出土遺物実測図（1）

7は、A13Gr P04から出土した注口土器である。ナデによる調整が行われ、貼付けたものであろう。市内では下古志遺跡などからほぼ完形品が出土している。

8・9はA12Gr P02から出土した白磁である。8は高台をもつ皿で、全面が乳白色に施釉されている。いずれも形状から中世末以降のものであろう。

10は、Z11Gr P07から出土した青磁の高台付碗である。外面底部を除き淡緑灰色に施釉されている。中世末頃の資料であろう。なお、P07付近には、当該期に築かれたと考えられるピット状遺構が集中している。

11は、備前焼の鉢あるいは甕であろう。粘土紐を巻き上げて作られており、内外面ともにナデによる調整が行われている。A12Gr SK01からの出土で、中世末以降の遺物であろう。

遺構外の出土遺物（第62図・第63図）

前述したように、遺構内からは多量の遺物が出土しているが、遺構検出面の上層に堆積する層全てが遺物包含層となっており、出土量も多い。遺物の時期としては、弥生時代終末期から近世にかけてのものが出土しているが、その中でも弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物の量が多い。

第62図－1～12は、古式土師器の甕である。1は、複合口縁の稜はやや下方に向き、鋭さを欠いている。口縁端部はやや外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケによる調整が認められる。2は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は外方へ折り曲げて先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。3・4も2と同様な形態的特徴をもつものである。5は、器壁が厚く、複合口縁の稜はやや下方に向いて突出している。口縁端部は丸くおさめ、外面全体にススが付着している。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。6も同様で、外面にはススが付着している。

7は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。口縁部外面には2枚貝の貝殻腹縁によって平行線文が施され、内面はナデによる調整が行われている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面肩部には2枚貝腹縁の刺突によって綾杉文を巡らせている。8・9は、器壁が厚く、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われ、8の外面肩部にはクシ状工具によって波状文が施されている。10は、複合口縁の稜は水平方向に突出するが、やや鋭さを欠いている。口縁端部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胎土は他の遺物と同じであるが、内湾ぎみに立ち上がる口縁部を有すもので、出雲地方では珍しい形態をもつものである。

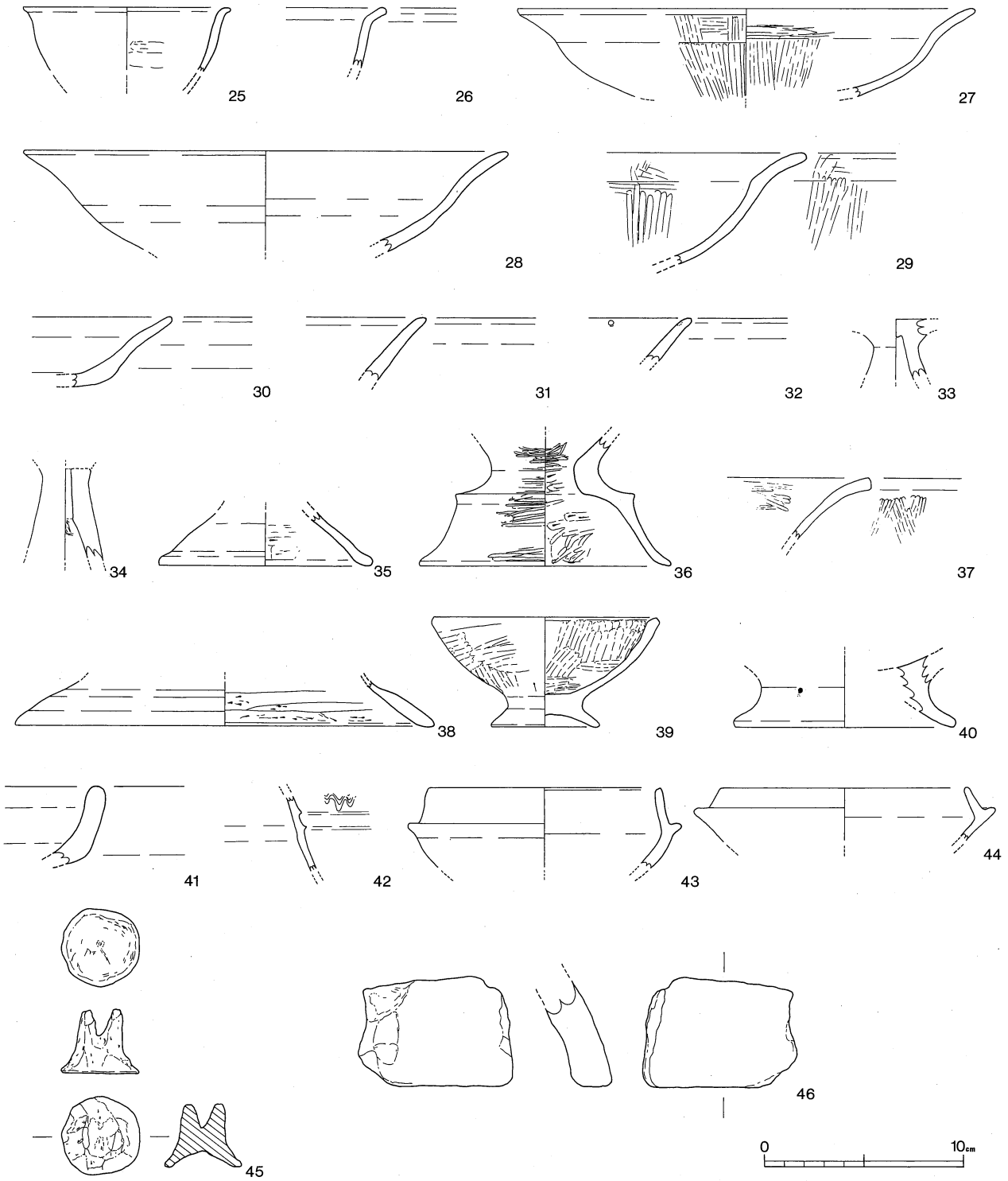
11は、口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。頸部下外面には、クシ状工具によって波頂間の狭い波状文を2列に巡らせ、その下方に平行線文を施している。内面はケズリによる調整が行われている。12は外面にススが付着し、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

以上のような古式土師器甕は、1～4は草田5期、7が草田3期に相当する資料と考えられ、その他は草田5～6期の範疇に入るものであろう。なお、10のように形態的特徴の異なる遺物は、人的交流

が考えられ、今後も注視していく必要がある。

14～19は、古墳時代前期から中期頃にかけての土師器甕である。14は、器壁が非常に厚く、複合口縁の稜は厚く下方に突出し、口縁端部はやや丸みを帯びるが平坦面を意識している。内外面ともナデによる調整が行われ、草田7期に相当する資料と考えられる。

15～17はほぼ同様の形態で、口縁部中位に稜をなすものである。口縁端部は外方に折り曲げて内側にフラットな面を作り出している。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリに



第63図　遺構外出土遺物実測図（2）

よる調整が行われている。18は、口縁部の上位に稜をなし、やや長い口縁部をもつものである。19は、口縁部中位に稜をなすが膨らみは小さく、口縁端部はやや外反して先細りとなっている。20は、頸部付近の破片で、頸部下外面は横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ甕は、おおよそ古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。

21は、土師器鉢である。口縁端部はゆるく外方に屈折し、丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリの後にミガキによる調整が行われている。

22～24は、土師器壺である。22は、口縁部は外方へゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面は横方向のミガキ、頸部下外面も横方向のミガキによる調整が行われる珍しいものである。口縁部内面はナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。23は、口縁部はやや外方に開いて立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部中位にはわずかに稜をなし、口縁部内面と外面は赤色塗彩されている。24は、壺の口縁部の破片で、径２mmほどの円形孔を２ヵ所に穿っている。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ壺は、古墳時代中期頃の資料であろう。

第63図－25・26は鉢であろう。25は小型のもので、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面の一部にはケズリによる調整が行われている。26は、口縁端部が外方にゆるく屈折し、平坦におさめている。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。いずれも器壁が薄く、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

27～32は、高坏の坏部である。27は、口縁部が外方へ屈折して長めに伸びるもので、口縁端部は平坦におさめている。口縁部内外面は横方向のミガキ、坏部内外面は縦方向のミガキによる調整が行われている。28は、口縁部はやや外反し、口縁端部は平坦におさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。29は、27と同様の特徴をもつものである。30は、坏部と口縁部に段をもち、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。風化が著しく、調整は不明である。31は、内外面ともに赤色塗彩され、口縁端部はやや外反して丸くおさめている、32は、内外面ともに赤色塗彩され、内面には径2mm、深さ1mm程の円形の凹みが認められる。以上のような高坏は、30が古墳時代中期頃の特徴を示しているが、その他は弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての資料であろう。

33・34は高坏の筒部破片である。33は外面に赤色塗彩された痕跡があり、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。34も円盤充填法により接合されるものである。

35～38は、鼓形器台である。35は、脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われているが、低脚坏の脚部である可能性もある。36は器壁がやや厚く、脚端部は外傾して丸くおさめている。外面はナデと横方向のミガキによる調整が行われる珍しいものである。筒部内面はケズリ、脚部は基本的にはケズリであるが、部分的にミガキ、受部は横方向のミガキによる調整が行われている。37は受部の破片で、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによって丁寧に仕上げられている。38は脚部の破片で、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。外面に膨らみをもち、出雲地方では珍しいものである。以上のような器台は、形状や遺構内で出土した遺物から考えると弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

39・40は低脚坏である。39は、内湾しながら立ち上がる深めの坏部をもち、口縁端部は丸くおさめ

ている。坏部外面は上位が横、下位が縦方向のミガキ、内面上位は縦、下位は横方向のミガキによる調整が行われている。脚部は短く、内外面ともにナデによる調整が行われている。40は、低脚坏の脚部であろう。外面は横方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。このような低脚坏は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられるが、器壁が厚く、坏部が深いという在地的な特徴をもつものである。市内では天神遺跡から同じような低脚坏が出土している。

41は、焙烙である。内外面ともにナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。

42は、須恵器の甕であろう、２条の三角形貼付文帯を有し、その上方に波状文を巡らせている。

43・44は、須恵器坏身である。43は長めの口唇部をもつもので、山本編年Ⅱ期に相当する資料であろう。44はやや内傾して立ち上がる口唇部を有し、外面には自然釉がかかっている。山本編年Ⅱ～Ⅲ期に相当する資料であろう。

45は、用途不明の土製品である。径約３cmほどの円形の面をもち、片端には２本の脚のような突起状のものを作り出している。円形部はナデ、突起部はケズリによる調整が行われている。容器に蓋をする栓としての役割をもつものではないだろうか。

46は、移動式竈の脚部破片である。内外面ともにナデによる調整が行われ、内面には随所に指頭圧痕が認められる。

註

（１）『渡橋沖遺跡』　島根県教育委員会　1999年

（２）『天神遺跡第７次発掘調査報告書』　出雲市教育委員会　1997年

（３）『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』　「三田谷Ⅰ遺跡 vol. 3」
島根県教育委員会　2000年

（４）『古志本郷遺跡Ⅰ』　島根県教育委員会　1999年

（５）『下古志遺跡』　出雲市教育委員会　2001年

（６）『島根大学論集（人文科学）』　第５号「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」
山本　清　1955年

I区　出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
11－1	A9Gr SK01	土師器 坏	12.3	6.9	2.55	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－2	A9Gr SK01	土師器 坏	11.8	6.7	2.3	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－3	A9Gr SK01	土師器 坏	10.0	4.9	2.35	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－4	A9Gr SK01	土師器 小皿	8.3	5.65	1.9	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－5	A9Gr SK01	土師器 小皿	8.3	5.0	1.85	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－6	A9Gr SK01	土師器 小皿	7.85	5.1	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－7	A9Gr SK01	土師器 小皿	8.0	5.1	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
15－1	B9Gr SK01	土師器 小皿	8.6	5.7	2.05	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英を含む	良好	「さ」の墨書あり
－2	B9Gr SK01	土師器 坏	11.8	7.0	2.25	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英を含む	良好	
17－1	C12Gr SK03	土師器 坏	13.4	8.0	2.65	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－2	C12Gr SK03	土師器 小皿	8.2	6.0	1.9	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－3	C12Gr SK03	土師器 小皿	8.2	5.8	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
20－1	B9Gr SD01	土師器 甕	10.6	－	－	口縁部外／ナデ 内／ナデ、ハケ 頸部下外／縦方向ハケ 内／ケズリ	褐色	普通 1mm大の砂粒・石英を含む	普通	外面スス付着
－2	B10Gr SD01	土師器 鉢or甕	－	－	－	内外面横方向ミガキ	淡褐色	普通 1mm大の砂粒・石英を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22－1	C4Gr SD03	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む	普通	口縁端部外反する
－2	B4Gr SD03	須恵器 短頸壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／波状文 内／ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－3	B4Gr SD03	須恵器 高坏	－	7.0	－	外／回転ナデ、坏部に横方向カキメ 内／回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	3ヵ所に円形透し孔あり
－4	C3Gr SD03	土師器 竈	－	－	－	外／ナデ、指頭圧痕残る 内／ケズリ	外／灰褐色 内／褐色	普通 1mm以下の白砂粒・石英・雲母を含む	普通	
24－1	C2Gr SD04	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英を含む	普通	
26－1	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面口縁部にスス付着
－2	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－3	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡橙褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－4	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	口縁端部に凹面を作る
－5	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部外反する 26－6と同一個体の可能性あり
－6	C3Gr SD05	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部外反する 26－5と同一個体の可能性あり
－7	C3Gr SD05	須恵器 坏身	－	－	－	外／回転ナデ、下半部は回転ケズリ 内／回転ナデ 底／ヘラ切り	灰色	密 石英・雲母を含む	良好	
－8	C3Gr SD05	須恵器 甕	24.8	8.0	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／タタキ 内／ナデ、一部ハケ	暗灰色	密 石英を含む	良好	外面口縁部に三角形貼付文帯、その間に2条の波状文 26－9と同一個体
－9	C3Gr SD05	須恵器 甕	24.8	8.0	－	外／タタキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	暗灰色	密 石英を含む	良好	26－8と同一個体
30－1	C4Gr SK01	土師器 甕	15.2	－	20.7	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡橙褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	粗雑な作り 外面スス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
30－2	C4Gr SK01	土師器 小型 丸底壺	7.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－3	C4Gr SK01	土師器 小型 丸底壺	9.8	－	9.0	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－4	C4Gr SK01	土師器 小型 丸底壺	8.8	－	7.2	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－5	C4Gr SK01	土師器 小型 台付鉢	10.4	8.4	6.4	外／ナデ、指頭圧痕残る 内／ナデ、指頭圧痕残る	褐色	普通 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	
33－1	A4Gr SK01	土師器 甕	16.2	－	23.7	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面胴部にスス付着
－2	A4Gr SK01	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－3	A4Gr SK01	土師器 小型 丸底壺	9.0	－	8.55	口縁部内外面ナデ 頸部下外／風化著しく不明 内／ケズリ	淡橙褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
36－1	C3Gr P05	須恵器 有蓋 高坏	－	8.0	－	坏部内外面回転ナデ 脚部内外面回転ナデ 脚端部外面に1条の凹線	灰色	密	良好	脚部3ヶ所に方形透し孔あり
38－1	B5Gr P01	土師器 高坏	15.8	10.6	10.5	風化著しく不明 筒部内面はケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	外面に赤色塗彩痕が一部残る 円盤充填法
46－1	A12Gr SD10	古式 土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－2	B12Gr SD10	古式 土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－3	C12Gr SD10	古式 土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－4	C12Gr SD10	古式 土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
－5	C12Gr SD10	古式 土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
－6	A12Gr SD10	古式 土師器 甕	17.2	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
46－ 7	Z13Gr SD10	古式土師器 器台	－	－	－	内外面ナデ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－ 8	A12Gr SD10	古式土師器 甕	14.4	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－ 9	C12Gr SD10	古式土師器 甕	22.6	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－10	B12Gr SD10	古式土師器 甕	16.0	－	24.6	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文、縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－11	B12Gr SD10	古式土師器 甕	14.8	－	19.7	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文、縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－12	Z13Gr SD10	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－13	Z13Gr SD10	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	口縁端部に凹面を作る
－14	C12Gr SD10	古式土師器 壺	11.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文、縦方向ハケ 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－15	A12Gr SD10	古式土師器 壺	11.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－16	A12Gr SD10	土師器 壺	17.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部に凹面を作る
－17	A12Gr SD10	土師器 甕	14.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
47－18	B11Gr SD10	古式土師器 壺	19.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文、縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	内面頸部に指頭圧痕残る
－19	C12Gr SD10	古式土師器 鉢	21.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／横方向ミガキ 内／縦方向ミガキ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－20	C12Gr SD10	古式土師器 鉢	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ、縦方向ハケ 内／縦方向ミガキ	淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－21	B11Gr SD10	古式土師器 壺	19.3	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文、縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	内面頸部に指頭圧痕残る

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
47−22	Z13Gr SD10	古式 土師器 高坏	23.4	−	−	坏部外／縦方向ミガキ 内／縦方向ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
−23	A12Gr SD10	古式 土師器 高坏	22.2	−	−	坏部外／上半部ナデ 下半部ハケ 内／ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや 不良	上半部と下半部に接合面あり 47−27と同一個体の可能性あり
−24	A13Gr SD10	古式 土師器 高坏	17.6	−	−	内外面赤色塗彩 内面に暗文入る	内外面／赤褐色 断／褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	円盤充填法
−25	A12Gr SD10	古式 土師器 高坏	−	−	−	内外面赤色塗彩 内面に暗文入る	内外面 ／赤褐色 断／褐色	普通 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	円盤充填法
−26	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	20.2	−	−	内外面ナデ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−27	A12Gr SD10	古式 土師器 高坏	23.0	−	−	外／ナデ 内／横方向ハケ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや 不良	47−23と同一個体の可能性あり
−28	A12Gr SD10	古式 土師器 高坏	−	−	−	外／筒部ハケ、裾部ミガキ 内／筒部ケズリ、裾部ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
−29	Z13Gr SD10	古式 土師器 高坏？	−	−	−	内外面赤色塗彩	内外面／朱色 断／淡褐色	密 石英を含む	良好	
−30	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	−	−	内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−31	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	−	−	受部　外／ナデ 内／ミガキ 脚部　外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	筒部外面縦方向ハケ
48−32	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	19.2	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
−33	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ、筒部は縦方向ハケ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−34	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	20.0	−	−	外／ナデ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片
−35	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	23.0	−	−	外／ナデ 内／上半部横方向ミガキ 下半部ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片
−36	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
48−37	A12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−38	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	18.4	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−39	C12Gr SD10	古式 土師器 器台	−	17.6	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−40	Z13Gr SD10	土師器 小型壺	5.0	−	6.0	口縁部内外面ナデ 頸部下外／一部ハケ 内／ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面と内面口縁部に赤色塗彩の痕跡あり 外面に指頭圧痕残る
−41	A13~A14 SEC SD10	須恵器 高坏	−	8.0	−	外／ナデ、横方向カキメ、脚端部に凹線文入る 内／ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	円形透し孔2ヵ所以上にあり
−42	A13~A14 SEC SD10	須恵器 高台付坏	−	8.6	−	内外面ナデ 底／ヘテ切り後、ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	口縁端部上下に拡張する
50− 1	C12Gr SX10	弥生土器 甕	14.2	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ナデ	褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
− 2	C12Gr SX10	古式 土師器 甕	12.2	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文、波状文 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
− 3	C12Gr SX10	古式 土師器 甕	15.7	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
− 4	C12Gr SX10	古式 土師器 甕	14.6	−	−	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
− 5	C12Gr SX10	古式 土師器 甕	13.9	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	50−6と同一個体の可能性あり
− 6	C12Gr SX10	古式 土師器 甕	13.9	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	50−5と同一個体の可能性あり
− 7	C12Gr SX10	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／クシ描き直線文 内／ケズリ	褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
− 8	C12Gr SX10	土師器 甕	15.0	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
− 9	C12Gr SX10	古式 土師器 直口壺	13.0	−	17.2	口縁部外／縦方向ミガキ 内／ナデ 頸部下外／貝殻施状文、縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	完形

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
50−10	C12Gr SX10	古式土師器高坏	−	17.2	−	外／縦方向ミガキ 内／裾部ハケ、筒部ケズリ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−11	C12Gr SX10	古式土師器高坏	−	−	−	外／縦方向ミガキ 内／裾部ハケ、筒部ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−12	C12Gr SX10	古式土師器鉢	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−13	C12Gr SX10	古式土師器鉢	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ハケ 内／縦方向ミガキ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−14	C12Gr SX10	古式土師器鉢	18.4	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ナデ、一部ミガキ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
−15	C12Gr SX10	古式土師器低脚坏	15.8	8.1	6.9	坏部内外面縦・横方面ミガキ 脚部　外／ナデ 内／ナデ、筒部ミガキ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−16	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	−	−	外／ナデ、筒部縦方向ハケ 内／受部ミガキ 筒部・脚部ケズリ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
−17	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	19.8	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
−18	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	18.8	−	外／ナデ 内／ケズリ	外／橙褐色 内／淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
−19	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	19.4	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
51−20	C12Gr SX10	古式土師器器台	21.0	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	受部破片
−21	C12Gr SX10	古式土師器器台	19.0	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	受部破片
−22	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	14.8	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
−23	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	−	−	外／縦方向ミガキ 内／ミガキ	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片
−24	C12Gr SX10	古式土師器器台	−	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
51−25	C12Gr SX10	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片
53− 1	A15Gr SX12	古式 土師器 甕	14.4	−	−	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
− 2	A15Gr SX12	古式 土師器 甕	11.6	−	−	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部平坦におさめる
− 3	A15Gr SX12	古式 土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部平坦におさめる
− 4	A15Gr SX12	古式 土師器 鉢	16.2	−	−	口縁部外／ミガキ 内／ナデ 頸部下内外面ミガキ	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁端部にスス付着
− 5	C12Gr SX10	古式 土師器 高坏	−	18.4	−	外／縦方向ミガキ 内／裾部ナデ、ハケ、筒部ケズリ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	円盤充填法
− 6	C12Gr SX10	古式 土師器 高坏	−	19.4	−	外／縦方向ミガキ 内／裾部ハケ、筒部ケズリ	外／淡橙褐色 内／黄褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
− 7	A15Gr SX12	古式 土師器 脚坏or台付鉢	−	−	−	坏部　外／ナデ 内／ナデ 脚部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
− 8	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	19.4	−	外／ナデ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
− 9	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	外／橙褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−10	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−11	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	20.4	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	脚部破片
−12	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	受部破片
−13	A15Gr SX12	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
59− 1	A11Gr P14	土師器 小型壺	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下内外面に指頭圧痕残る	暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
60－1	A12Gr P01	古式土師器甕	16.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－2	A12Gr P01	古式土師器甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ナデ 内／ナデ	褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	
61－1	A1Gr SX06	古式土師器甕	－	－	－	内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
－2	B14Gr SX11	古式土師器甕	17.9	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－3	C3Gr P05	土師器甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－4	A1Gr SX02	土師器高坏	－	－	－	内外面ナデ 脚部内面に指頭圧痕残る	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－5	A1Gr SX02	須恵器坏身	－	－	－	外／上半部回転ヘラケズリ 下半部回転ケズリ 内／回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	
－6	A14Gr P02	土師器甕	10.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ハケ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－7	A13Gr P04	古式土師器注口土器	－	－	－	ナデ 注口部貼り付け	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	注口部破片
－8	A12Gr P03	白磁高台付皿	11.8	6.8	2.5	内外面とも乳白色に施釉	乳白色	密 黒色の不純物混じる	良好	
－9	A12Gr P03	白磁高台付碗	－	10.0	－	内外面とも乳白色に施釉	乳白色	密	良好	
－10	Z11Gr P07	青磁高台付碗	－	5.4	－	外面底部を除き淡緑灰色に施釉	淡緑灰色	密 黒色の不純物混じる	良好	
－11	A12Gr SX01	備前焼鉢？	－	－	－	内外面ナデ	灰褐色	密	良好	
62－1	C12Gr 遺構面	古式土師器甕	15.0	－	－	口縁部内外面ナデ	外／淡橙褐色 内／褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－2	C12Gr 遺構面	古式土師器甕	15.2	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
62−18	C3Gr 遺構面	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	やや 不良	
−19	A1Gr 遺構面	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
−20	C3Gr 遺構面	土師器 甕	−	−	−	内面剥離により不明 外面口縁部／ナデ 頸部下／ハケ	暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	やや 不良	
−21	表土 掘削中	土師器 鉢	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／縦方向ミガキ 内／ケズリの後、ミガキ	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
−22	A10Gr 遺構面	古式 土師器 壺	12.4	−	−	口縁部　外／ミガキ 内／ナデ 頸部下　外／ミガキ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
−23	Z9Gr 遺構面	土師器 壺	11.8	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下外／不明 内／ケズリ	内外面／朱色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	外面と口縁部内面に赤色塗彩
−24	A10Gr 褐色砂 質土	土師器 壺	7.8	−	−	口縁部　外／縦方向ミガキ 内／ナデ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	2ヶ所に円形孔あり
63−25	南側溝	土師器 鉢	10.4	−	−	外／ナデ 内／一部ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	やや 不良	
−26	表土 掘削中	土師器 鉢	−	−	−	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
−27	A15~A16 SEC	古式 土師器 高坏	23.0	−	−	頸部下外／ナデ、ハケ 内／ケズリ	外／褐色 内／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
−28	C12Gr 遺構面	古式 土師器 高坏	24.2	−	−	内外面ナデ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	坏部破片
−29	表採	古式 土師器 高坏	−	−	−	外／ナデ 内／口縁部ナデ、坏部縦方向ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	坏部破片
−30	A15~A16 SEC	土師器 高坏	−	−	−	内外面とも風化著しく不明	褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	坏部破片
−31	A15Gr 遺構面	土師器 高坏	−	−	−	内外面赤色塗彩 内外面ナデ	内外面／ 赤褐色 断／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	坏部破片
−32	C9Gr 遺構面	土師器 高坏？	−	−	−	内外面赤色塗彩 内面に円形の凹みあり	内外面／ 赤褐色 断／淡褐色	密 石英を含む	普通	坏部破片

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
63−33	A1~A2 SEC	土師器 高坏	−	−	−	風化著しく不明 筒部外面に赤色塗彩の痕跡あり	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	筒部破片 円盤充填法
−34	第3トレンチ	土師器 高坏	−	−	−	外／風化著しく不明 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	筒部破片 円盤充填法
−35	A1Gr 遺構面	土師器 高坏？	−	−	−	内外面赤色塗彩 内外面ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−36	A10Gr 遺構面	古式 土師器 器台	−	12.6	−	外／ナデ、縦方向ミガキ 内／ケズリ、ミガキ	褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
−37	A15~A16 SEC	古式 土師器 器台	−	−	−	外／ミガキ 内／ミガキ	黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	受部破片
−38	表土 掘削中	古式 土師器 器台	−	21.0	−	外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
−39	Z15Gr 遺構面	古式 土師器 低脚坏	11.1	5.3	5.5	坏部内外面ミガキ 脚部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−40	A10Gr 褐色砂質土	古式 土師器 低脚坏	−	11.0	−	内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
−41	Z1Gr 1層	土師器 焙烙	−	−	−	内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
−42	C3Gr 遺構面	須恵器 甕	−	−	−	外／ナデ、波状文 内／ナデ	暗灰色	密	良好	
−43	Z13Gr 遺構面	須恵器 坏身	11.6	−	−	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	
−44	南側溝	須恵器 坏身	12.6	−	−	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	外面に自然釉がかかる
−45	B12Gr 遺構面	土師器 栓？	−	−	−	尖った部分はケズリ、その他はナデ 指頭圧痕残る	褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英を含む	良好	
−46	C12Gr 遺構面	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ナデ、指頭圧痕残る	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	焚口左側部分破片

出土遺物観察表（その他の遺物）

挿図番号	出土地点	遺存状況	製品名	材 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備　　考
12－ 1	A9Gr SK01	完形	古銭	銅	2.4	2.4	0.1	2.3	表／開元通寶 裏／無文
－ 2	A9Gr SK01	完形	古銭	銅	2.4	2.4	0.1	2.6	表／皇宋通寶 裏／無文
22－ 5	B4Gr SD03	片側欠損	砥石	細粒凝灰質 砂 岩	12.0	3.2	3.2	260	3面に使用痕残る
27－10	C3Gr SD05	ほぼ完形	砥石	硅質泥岩	5.8	1.9	1.9	83	3面に使用痕残る

Ⅳ. Ⅱ区の調査

Ⅳ．Ⅱ区の調査

１．発掘調査の概要

調査地は、新内藤川を拡幅した後に道路改良に伴って架橋する橋桁部分で、現状では農道と荒蕪地であった。調査に入る前に、Ⅰ区で確認されていた遺物包含層までの堆積土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西に５m、南北に４mのグリッドを設定し、東から1～2Grとした。調査面積は、東西10m、南北４mの約40㎡である。なお、水処理のために調査区を囲むように約30cm幅で側溝を設定しているが、この際にも多くの遺物を検出している。

層　序（第64図）

調査地は農道と荒蕪地であったが、農道敷設時の造成土と表土を除くと、その下面には40cm程度の堆積土が確認されている。なお、農道敷設時の基礎が深く入り込んでいる地点では、大きな撹乱を受けている。

基本的な層序は、上層に水田耕作土である褐灰色土、中層に暗褐色粘質土・褐色粘質土、下層には明褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色シルト質土へと達している。西側ではやや異なる堆積を示しているところもあるが、明褐色砂質土の上面は粘質土の堆積で、基盤層における標高は約1.95mとほぼ一定である。

遺　構（第64図）

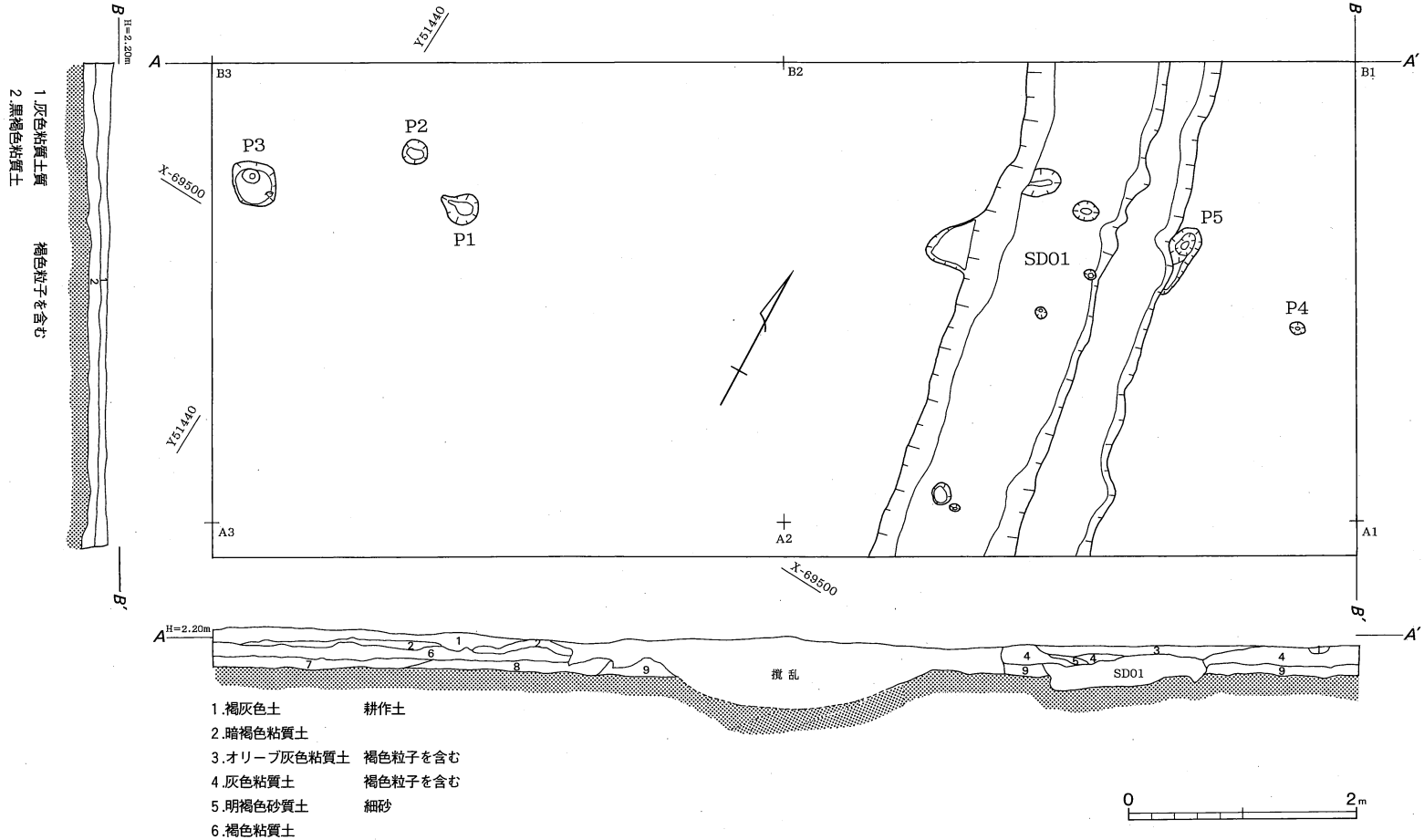
遺構は、溝状遺構１、ピット状遺構５を検出している。遺構が築かれた時期は、いずれも古墳時代中期頃のものであり、その他の異なる時期の遺構は検出されていない。

このうち、SD01からは多くの遺物が検出されているとともに、Ⅰ区で検出したSD03と基軸や覆土、断面の形状がほぼ一致することなどから、同一の溝と考えられ、長さ50m以上にも及ぶことが明らかとなっている。ピット状遺構はいずれも小規模なものであるが、古墳時代中期頃の遺物が検出されており、当該期に築かれたものであろう。なお、これらのピット状遺構には掘立柱建物跡などの配置は認められない。

遺　物

遺物は、造成土と明褐色砂質土を除く全ての層に包含しており、土師器・須恵器のほか、移動式竈などが出土しており、調査区は40㎡にすぎないが、コンテナ10箱分にも及んでいる。器種には土師器甕・壺・高坏、低脚坏・埦、須恵器坏身・坏、移動式竈・土錘などがある。

そのほとんどがSD01からの出土であるが、ピット状遺構内からもわずかに小片が認められている。特に、SD01内から出土している多量の移動式竈は、出雲地方での使用時期としてはもっとも早い時期のものと考えられ、注目される。



1.褐灰色土　耕作土
2.暗褐色粘質土
3.オリーブ灰色粘質土　褐色粒子を含む
4.灰色粘質土　褐色粒子を含む
5.明褐色砂質土　細砂
6.褐色粘質土
7.暗褐色砂質土　褐色粒子を含む
8.暗褐色粘質土　褐色粒子を含む
9.明褐色砂質土　細砂

第64図　Ⅱ区遺構配置図

2．遺構と遺物

遺構は、その全てが古墳時代中期頃に築かれたものと考えられ、溝状遺構１、ピット状遺構５を検出している。

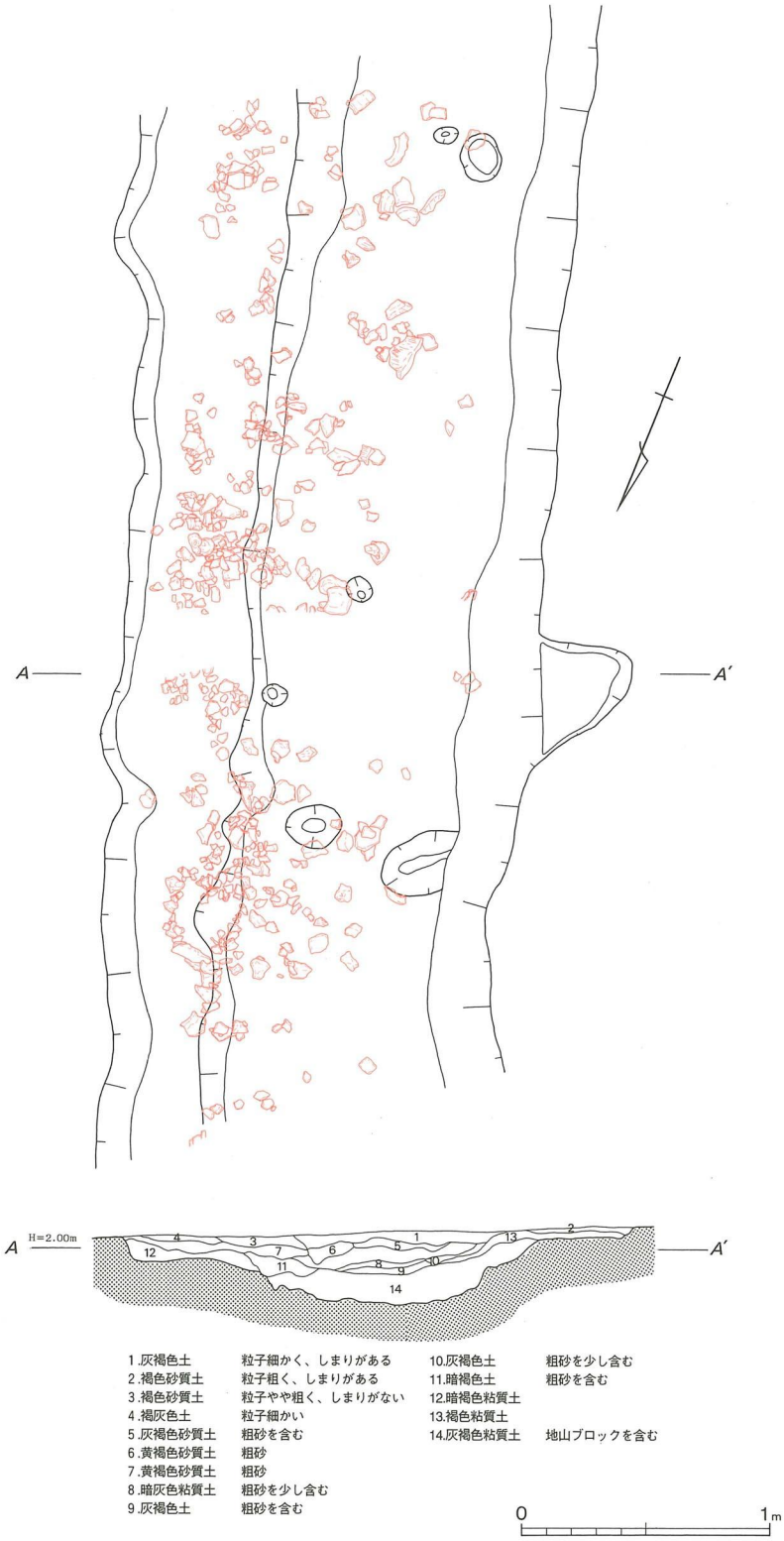
SD01（第65図）

調査区の東側、1Grの明褐色砂質土上面で検出した南北方向に基軸をもつ溝状遺構である。上部に堆積する粘質土は水田耕作によるもので、上部は削平を受けているものと考えられるが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。

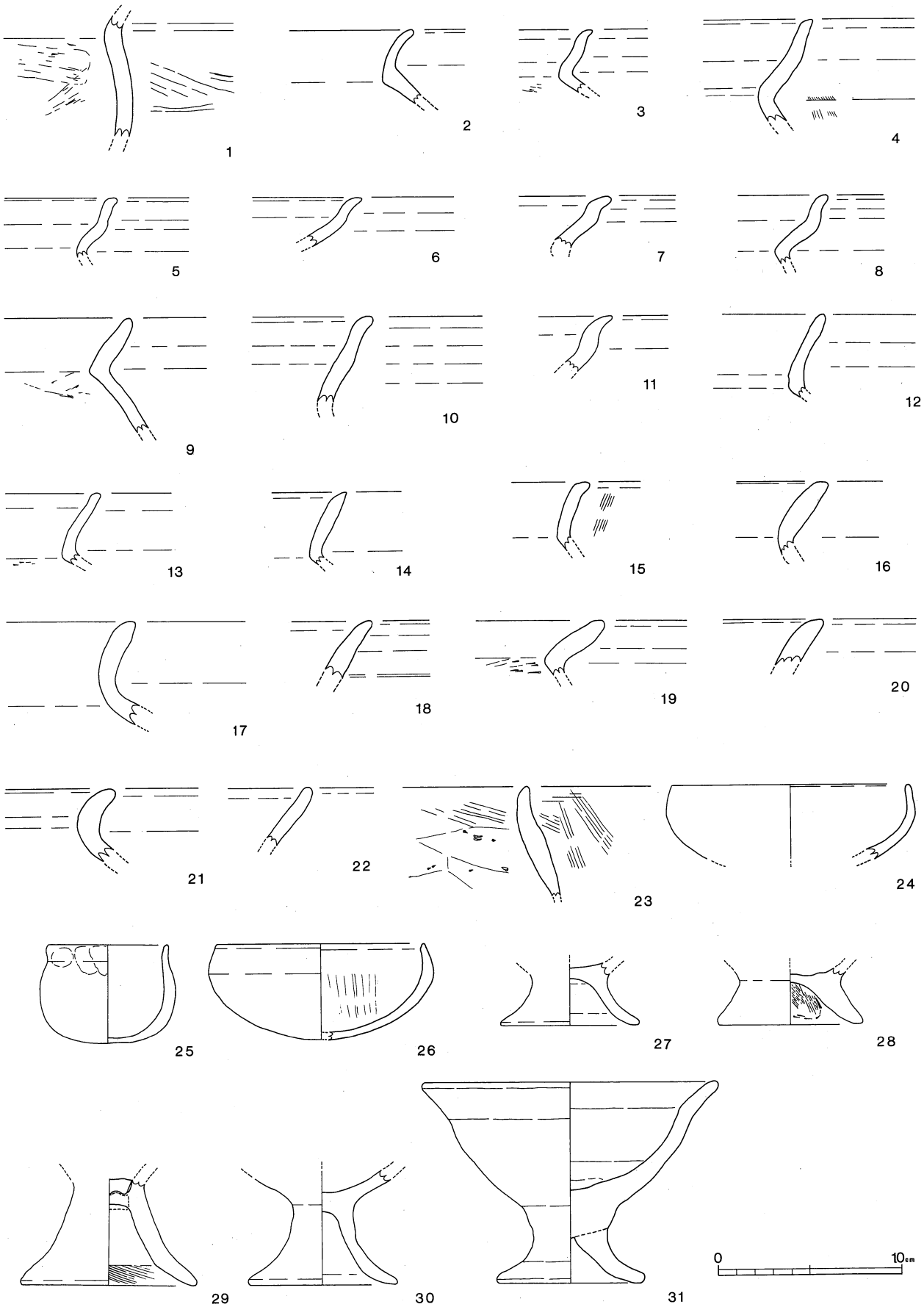
検出した状況では、検出長4.40m以上、最大幅85cmを測る。なお、検出高は標高2.10mである。

覆土は、上層には褐色系土の粒子が粗いものと細かいものが互層状に堆積している。中層には粗砂を含む褐色系土と暗褐色粘質土・褐色粘質土などが互層状に堆積し、下層には地山である灰白色シルト質土を混入する灰褐色粘質土が広く堆積している。断面の形状は、西側では肩部から約45度の角度で落ちているが、東側では鋭角に落ちて一度は平坦な面を作り出し、そこからさらに落ちて底面はわずかな凹凸は認められるものの、ほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは30cmを測り、底面における標高は約1.80mと一定である。

遺物には、土師器甕・壺・高



第65図　SD01実測図



第66図　SD01出土遺物実測図（1）

坏のほか、移動式竈が多量に出土している。これらの遺物は上層から下層にかけてほぼ一様に検出されており、位置的には遺構の東側に集中する傾向にある。

遺構の性格は、覆土に粗砂層と粘質土が互層状に堆積していることから、ある程度の水の流れがあったことが推測され、灌漑用水路などとして機能していたことが想定される。また、Ⅰ区SD03と同一の溝であるとともに、「ふるさと農道整備事業」に伴う調査でもⅡ区の南側で同一の溝と考えられる遺構が検出されている。試掘調査の結果から考えると、30mほど南側では旧河道が存在していたと考えられることから、この河道が取水口となっていた可能性がある。Ⅲ区からは水田の稲株跡と考えられる遺構が検出されており、西側の水田への灌漑用水路として機能していたのではないだろうか。

SD01の出土遺物（第66図～第68図）

第66図－1～22は、甕である。1は肩部から胴部にかけての破片で、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。外面肩部にはヘラ状工具によって直線文、斜線文を巡らせている。2は、単純口縁をもつ甕で、口縁端部は外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。1・2は、出土遺物の中ではやや古めの様相を示すもので、古墳時代初頭頃に相当する資料であろう。このうち2は、胎土は在地のものと考えられるが、畿内布留式の甕を模倣した可能性がある。

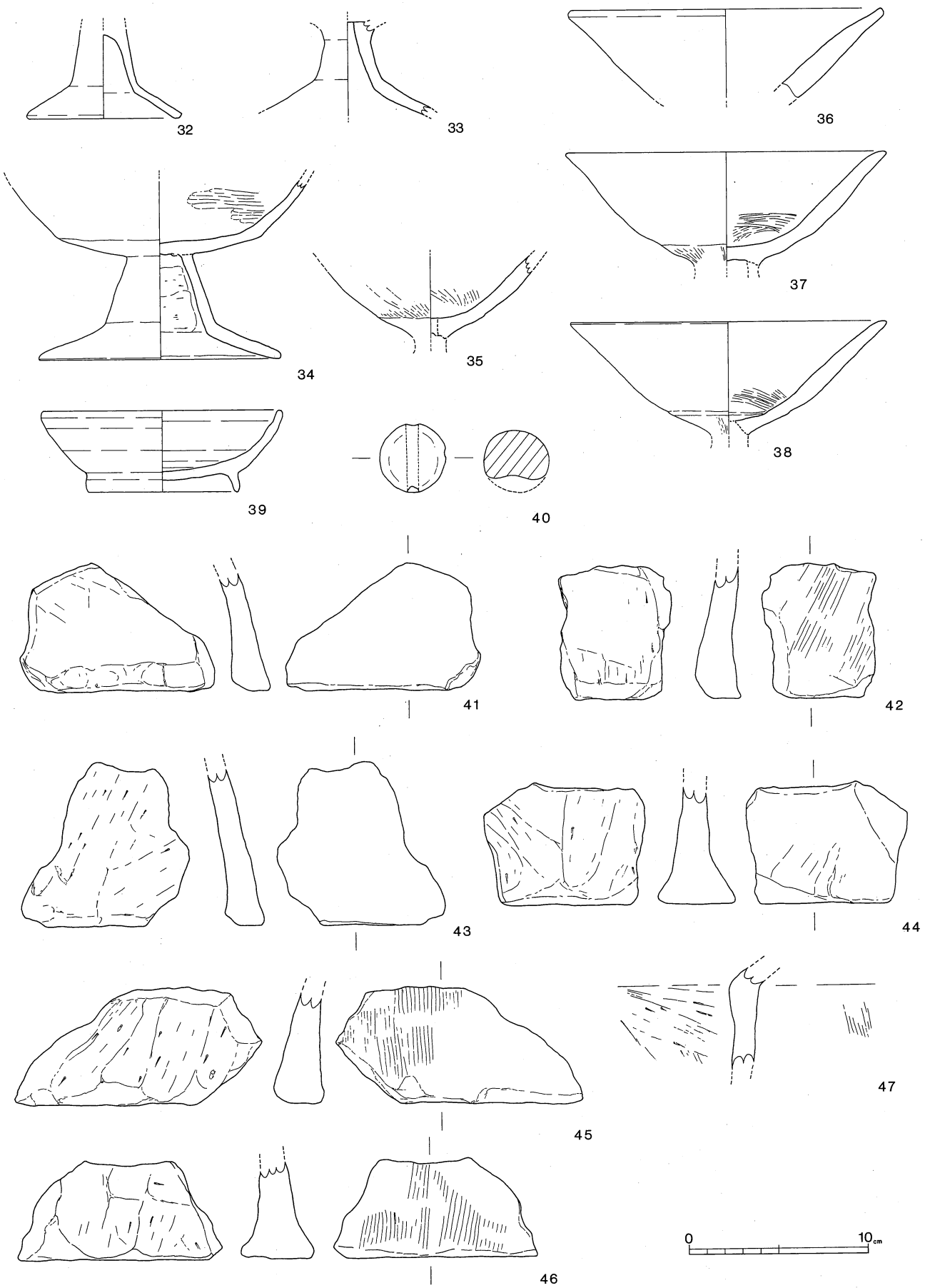
3は、口縁部中位に稜をもち、口縁端部は外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われるものである。このような特徴をもつ甕には6・7・11がある。4は、口縁部中位に稜をもち、口縁端部は直立して先細りとなっている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。5は、口縁部中位に稜をもつが、口縁端部は平坦におさめている。8は、口縁部のやや上位に稜をもち、口縁端部は丸くおさめている。

9は、口縁部中位にわずかな膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。同様の特徴をもつものには19がある。10は、口縁部中位にわずかな膨らみをもち、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。11は、口縁部には膨らみをもたず、口縁端部は直立して丸くおさめるのが特徴である。13は、口縁部上位にわずかな膨らみをもち、口縁端部は直立して平坦におさめている。14は、口縁部中位にわずかな膨らみをもち、口縁端部は内傾してフラットな面を作り出している。同様の特徴をもつものには、16・18・20がある。

15は単純口縁の甕で、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部外面には一部に縦方向のハケによる調整が認められ、外面にはススが付着している。16も単純口縁の甕で、口縁端部は先細りとなっている。21は、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。17は、口縁部上位にわずかに膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。

以上のような甕は、17・21などがやや後出するものと考えられるが、その他は古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。

23は、土師器の無頸壺であろう。口縁端部はわずかに外方に屈折し、口縁端部は先細りとなっている。外面は縦方向のハケ、内面上位は横方向のハケ、下位はケズリによる調整が行われている。



第67図　SD01出土遺物実測図（2）

24・26は、土師器高坏の坏部であろう。いずれも内外面ともに赤色塗彩され、坏部から内湾しながら立ち上がり、坏部と口縁部には明瞭な境をもたないものである。口縁端部はわずかに外反して先細りとなっている。古墳時代中期頃の資料であろう。

25は、手捏ねの小型無頸壺である。口縁端部はわずかに外反して丸くおさめており、内外面ともに指頭圧痕が認められる。

第66図－27～第67図－38は、土師器高坏である。27は脚部破片で、脚部は短く外傾して脚端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われ、坏部と脚部とは付加法により接合されている。28は、脚部は短く外傾して丸くおさめ、外面はナデ、筒部内面はケズリによる調整が行われている。坏部と脚部とは付加法により接合されている。

29は、脚端部は末広がりとなり、丸くおさめている。外面は縦方向のミガキ、筒部内面はケズリ、裾部はハケによる調整が行われている。坏部と脚部とは円盤充填法により接合され、外面には赤色塗彩された痕跡が認められる。30もほぼ同様の形態をもつもので、外面は赤色塗彩されている。31は、脚端部は短く外傾し、丸くおさめている。坏部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。器壁が厚く坏部が深いもので、脚部内面を除いて赤色塗彩された痕跡が認められている。風化が著しく調整が不明であるが、坏部と口縁部には明瞭な境をもたず、坏部と脚部とは付加法によって接合されている。

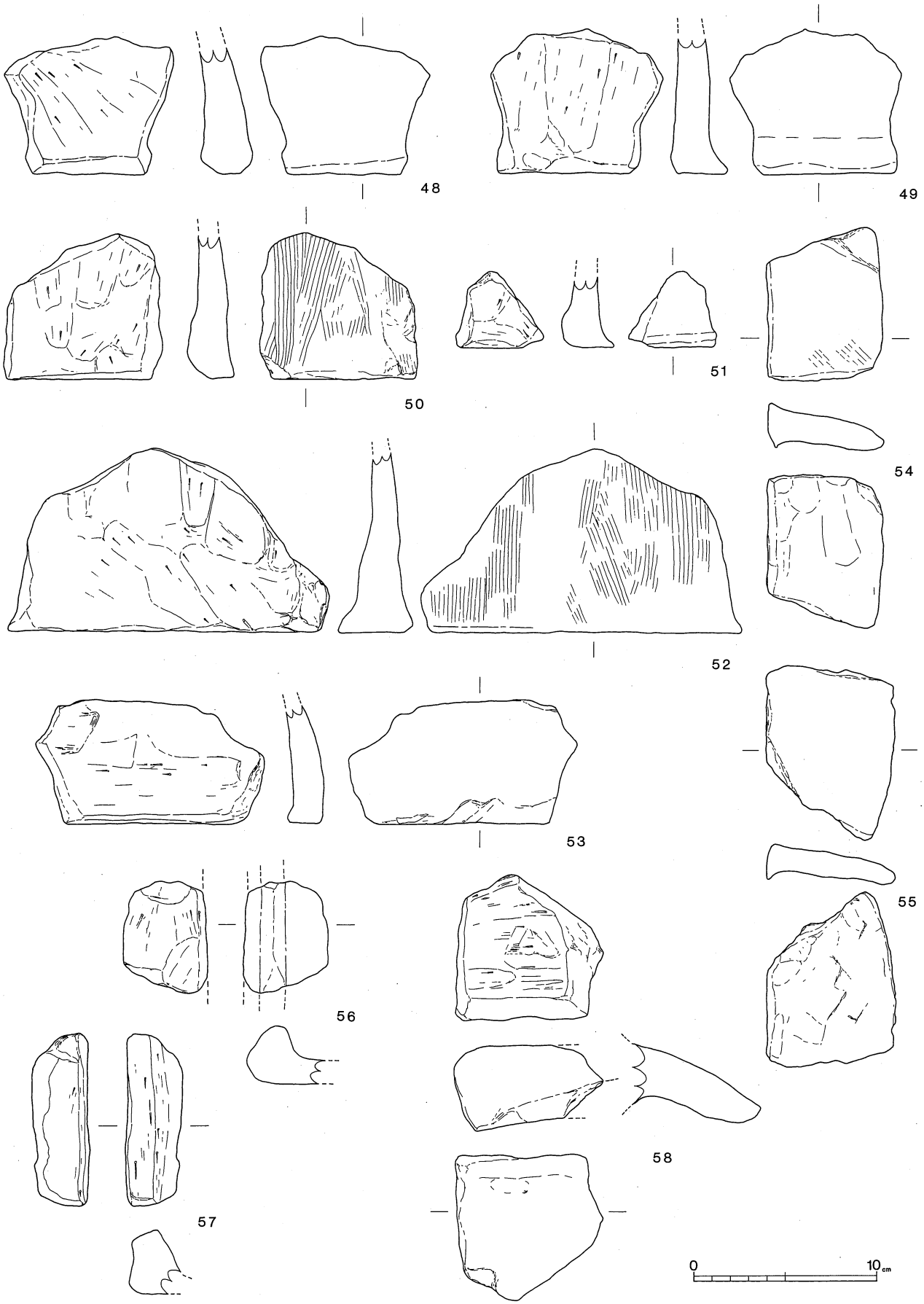
第67図－32・33は、高坏の脚部である。32は、脚端部が大きく末広がりになって丸くおさめている。内外面ともに風化が著しく調整は不明であるが、内外面ともに赤色塗彩された痕跡が残っている。坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。33もほぼ同様の特徴をもち、外面に赤色塗彩された痕跡が認められる。

34は、脚端部は末広がりに大きく開き、丸くおさめている。坏部は2段に作られ、脚部内面を除いて赤色塗彩されている。坏部内面は横方向のミガキ、外面はナデによる調整が行われ、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。脚部外面はナデ、筒部内面はケズリ、裾部はナデによる調整が行われている。

35～38は、土師器高坏の坏部破片である。35は坏部と口縁部は2段に作られ、内外面ともに赤色塗彩されている。内外面とも一部ハケによる調整が認められ、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。36は器壁が非常に厚く、口縁部は逆「ハ」の字状に開いて口縁端部は平坦におさめている。欠損部から2段に作られるものと考えられ、内外面ともに赤色塗彩されている。37は、坏部と口縁部は2段に作られ、口縁部は逆「ハ」の字状に開いて口縁端部は先細りとなっている。風化が著しいが、内外面の下位にはハケによる調整が行われ、内外面ともに赤色塗彩された痕跡が認められる。38も同様の特徴をもつものである。

以上のような高坏には、坏部が2段に作られるものと境をもたないものに大別できるが、並存する時期があると考えられ、古墳時代前期後半から中期に相当する資料であろう。このうち、境をもたないものは脚部が短く外傾して坏部は深く、坏部と脚部は付加法によって接合されるという傾向にある。

39は、須恵器の高台付皿である。高台部は直立し、脚端部は丸くおさめている。坏部は内湾しながら短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、底部



第68図　SD01出土遺物実測図（3）

はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。このような高台付皿は奈良時代後半から平安期にかけての資料であり、SD01内に混入したものであろう。

40は土錘である。欠損しているが、円形を呈するものと考えられ、中心に径5mmの円形孔が穿たれている。全体に丁寧にナデ調整されているのが特徴である。

41～46は、移動式竈の脚部である。41は外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、脚端部内面は外方にケズリ出してやや薄くなっている。42は、外面は約2mm間隔の縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。脚端部はやや外方に突出させて太くなり、底面にも粗いハケ調整が施されている。43・46もほぼ同様の特徴をもつものである。44は外面は粗いナデ、内面はケズリによる調整が行われている。脚端部は外方に突出して太くなり、底面にはススが付着している。46は、外面は約2mm間隔の縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。脚端部は外方に突出させて太くなり、底面と外面にはススが付着している。また、外面の一部にはヘラ状工具による調整痕が認められる。

47は、移動式竈の頸部付近の破片であろう。外面は縦方向のハケ、内面は強いケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。

第68図－48～52は移動式竈の脚部である。このうち、外面が縦方向のハケによる調整が行われるものには50・53、ナデによる調整が行われるものには48・49・51・52がある。また、底面にハケ調整が行われるものには50・51・52がある。

53～55・58は、移動式竈の庇部であろう。いずれも内外面ともに粗いナデによる調整が行われており、随所に指頭圧痕が認められる。胴部の上位に貼付けたものと考えられ、貼付け部は平坦に作られている。

56・57は、焚口側面の耳にあたる部分の破片である。56は外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。57は、外面はケズリの後ナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

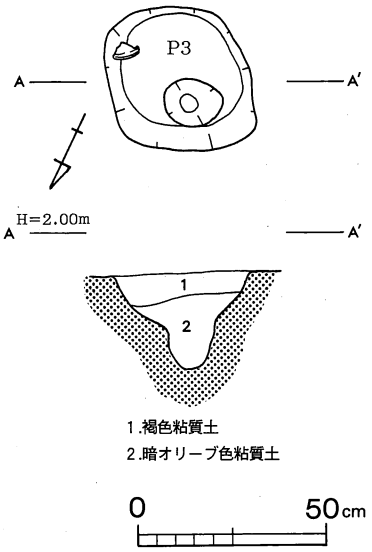
以上のような移動式竈は、他の出土遺物からも古墳時代前期から中期にかけての資料と考えられ、山陰地方では最も早い段階に導入されたものと考えられる。市内では三田谷Ⅰ遺跡[1]でほぼ同時期のものが出土しているが、今後も注視していく必要がある。

P03（第69図）

2Grの灰白色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長40cm、最大幅36cmを測る隅丸方形状を呈している。なお、検出高は標高1.89mである。

覆土には、上層に褐色粘質土、下層に暗オリーブ色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しているが、北側ではさらにピット状に掘り込んで、最深部までの深さは30cmを測る。

遺物には土師器高坏の小片が1点出土している。古墳時代前期



第69図　P03実測図

から中期にかけての資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。調査区の西端での検出であり遺構の性格は判断しがたいが、二段に掘り込まれていることから、掘立柱建物跡の可能性をもつ遺構である。

遺構外の出土遺物（第70図）

1～8は、土師器の甕であろう。1は、口縁部中位にわずかに膨らみをもち、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。2は、口縁部やや下位に稜をなし、口縁端部は外反して先細りとなっている。頸部下外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。3は、口縁部中位に稜をなし、口縁端部は先細りとなっている。同様な特徴をもつものには4・6・7があり、4は器壁が厚いのが特徴である。

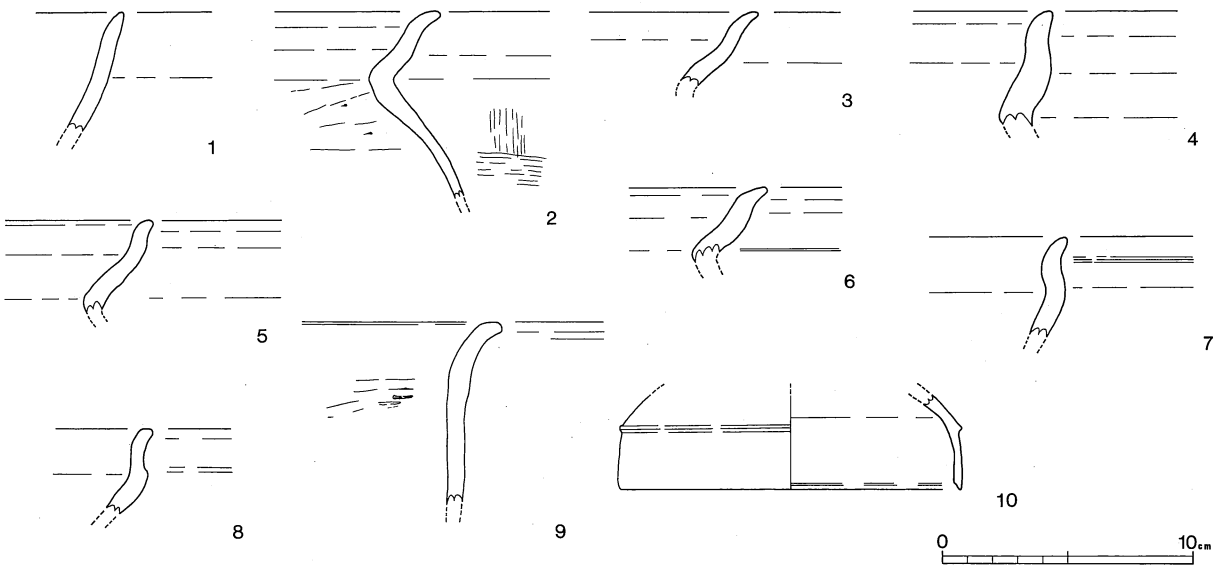
5は、口縁部やや上位に稜をなし、口縁端部は丸くおさめている。8は、口縁部の中位に稜をなし、口縁端部は折り曲げて平坦におさめている。

以上のような土師器甕は、形態的には区別できるものもあるが古墳時代中期頃のものであろう。

9は、土師器の無頸壺であろう。口縁部はゆるく外方に屈折し、丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

10は、須恵器坏蓋である。ほぼ直立する長めの口唇部をもち、口縁端部は内面から外傾して先細りとなっている。このような坏蓋は、山本編年Ⅰ期[2]に相当する資料と考えられ、出雲平野の集落遺跡から出土する例はほとんど認められないものである。井原遺跡からはⅠ区など他の調査区からも当該期の須恵器が出土している。

以上のように、Ⅱ区では調査面積は小さいものの多量の遺物が出土しており、おおよそ古墳時代中期頃の資料と考えられる。



第70図　遺構外出土遺物実測図

Ⅱ区　出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
66－1	SDO1 SEC	土師器 甕	－	－	－	頸部下　外／ヘラ描き直線文、斜線文 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－2	SDO1 SEC南	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－3	SDO1 SEC南	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面口縁部にススト付着
－4	SDO1 SEC北	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－5	SDO1 上層	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部を平坦におさめる	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－6	SDO1 SEC北	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－7	SDO1 上層	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－8	SDO1 上層	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－9	SDO1 上層	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－10	SDO1 SEC	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－11	SDO1 SEC	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面口縁部にススト付着
－12	SDO1 SEC	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	外／橙褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－13	SDO1 上層	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部を平坦におさめる	外／淡褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・母雲を含む	良好	
－14	SDO1 SEC	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
66−15	SDO1 SEC北	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ、外面一部にハケ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部平坦におさめる
−16	SDO1 上層	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
−17	SDO1 上層	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
−18	SDO1 SEC北	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
−19	SDO1 SEC	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−20	SDO1 上層	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／暗褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−21	SDO1 SEC北	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	外/褐色 内/淡橙褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	やや 不良	
−22	SDO1 SEC	土師器 甕or鉢	−	−	−	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−23	SDO1 SEC北	土師器 無頸壺	−	−	−	外／ハケ 内／上方ハケ、下方ケズリ	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	やや 不良	
−24	SDO1 SEC北	土師器 高坏	13.0	−	−	内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内面一部に赤色塗彩痕残る
−25	SDO1 上層	土師器 小型壺	6.4	−	−	内外面ナデ 外面に指頭圧痕残る	黄褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
−26	SDO1 SEC南	土師器 塊or高坏	11.4	−	−	内外面赤色塗彩 外／ナデ 内／ミガキ	内外面／朱色 断／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−27	SDO1 上層	土師器 低脚坏	−	7.4	−	脚部内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	脚部外面と坏部内面に赤色塗彩痕残る
−28	SDO1 上層	土師器 低脚坏	−	7.8	−	外／ナデ 内／上方ケズリ、下方ナデ	淡黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	脚部破片
−29	SDO1 SEC北	土師器 高坏	−	9.4	−	外／ミガキ 内／裾部ハケ、筒部ケズリ	外／褐色 内／暗褐色	普通 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	脚部破片 外面に赤色塗彩痕残る 円盤充填法

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
66−30	SDO1 SEC	土師器 高坏	−	8.2	−	外／風化著しく不明 内／裾部不明、筒部ケズリ	淡黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 円盤充填法
−31	SDO1 上層	土師器 高坏	15.8	7.8	10.9	内外面とも風化著しく不明	黄褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 付加法
67−32	SDO1 上層	土師器 高坏	−	8.3	−	外／風化著しく不明 内／裾部不明、筒部ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 円盤充填法 脚部破片
−33	SDO1 上層	土師器 高坏	−	−	−	内外面とも風化著しく不明	淡黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	外面に赤色塗彩痕残る 円盤充填法 脚部破片
−34	SDO1 SEC南	土師器 高坏	−	13.4	−	坏部　外／ナデ 内／ミガキ 脚部　外／ナデ 内／裾部ナデ、筒部ケズリ	内外面／赤褐色 断／淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	普通	坏部内外面と脚部外 面に赤色塗彩痕残る 円盤充填法
−35	SDO1 上層	土師器 高坏	−	−	−	外／一部ハケ 内／一部ハケ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 円盤充填法 坏部破片
−36	SDO1 上層	土師器 高坏	17.2	−	−	内外面とも風化著しく不明	内外面／朱色 断／灰褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 坏部破片
−37	SDO1 上層	土師器 高坏	17.6	−	−	外／風化著しく不明、下方はハケ 内／ハケ	淡黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 円盤充填法 坏部破片
−38	SDO1 上層	土師器 高坏	17.5	−	−	外／下方ハケ 内／下方横方向ハケ	淡黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面に赤色塗彩 痕残る 円盤充填法 坏部破片
−39	SDO1 上層	須恵器 高台付坏	13.2	8.3	4.55	内外面回転ナデ 底／ナデ	灰色	密 石英を含む	良好	
−40	SDO1 SEC	土錘	−	−	−	ナデ	淡褐色	密 1mm大の砂粒・石 英・雲母を含む	普通	最大径3.6cm、径5mm の穿孔あり 一部欠損
−41	SDO1 側溝	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	内面下方に指頭圧痕残る
−42	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ 底／ハケ	褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
−43	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ 底／ハケ	外／褐色 内／黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
−44	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	底部スス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
67−45	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	外／黄褐色 内／淡褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着 外面にヘラ状工具による調整痕残る
−46	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ 底／ハケ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−47	SDO1 SEC南	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面一部にスス付着
68−48	SDO1 SEC南	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	
−49	SDO1 SEC北	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	外／淡橙褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内面底部付近に指頭圧痕残る
−50	SDO1 SEC北	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡黄褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	焚口左側の破片 底部と外面にスス付着
−51	SDO1 SEC南	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ 底／ハケ	黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−52	SDO1 SEC南	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ 底／ハケ	黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
−53	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／風化著しく不明 内／ケズリ	褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	不良	
−54	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／ハケ、指頭圧痕残る 内／ナデ、指頭圧痕残る	外／黄褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	庇部破片
−55	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ、指頭圧痕残る 内／ナデ、指頭圧痕残る	外／黄褐色 内／褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	庇部破片
−56	SDO1 SEC	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
−57	SDO1 上層	土師器 竈	−	−	−	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	外／黄褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
−58	SDO1 SEC北	土師器 竈	−	−	−	外／ナデ、指頭圧痕残る 内／ケズリ	外／淡橙褐色 内／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内面スス付着 庇部破片
70− 1	A2Gr 褐灰色 粘質土	土師器 甕	−	−	−	口縁部内外面ナデ	外／淡黄褐色 内／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
70－2	A1Gr 黒褐色 粘質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm大の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
－3	A1Gr 黒褐色 粘質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－4	A1Gr 黒褐色 粘質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	橙褐色	密 1mm大の砂粒・石 英・雲母を含む	不良	
－5	A1Gr 灰色粘 質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
－6	A1Gr 灰色粘 質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
－7	A1Gr 灰色粘 質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	外／淡褐色 内／黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
－8	A1Gr 灰色粘 質土	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部を平坦におさめる	外／淡橙褐色 内／黄褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
－9	A2Gr 褐灰色 粘質土	土師器 無頸壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
－10	A1Gr 黒褐色 粘質土	土師器 坏蓋	11.6	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	

註

（1）『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』「三田谷Ⅰ遺跡　vol. 3」
島根県教育委員会　2000年

（2）『島根大学開学十周年記念論集』　「山陰の須恵器」　山本清　1960年

Ⅴ．Ⅲ区の調査

V．Ⅲ区の調査

1．発掘調査の概要

調査地は、近年まで水田として利用されていた。調査に入る前に、Ⅱ区で確認されていた遺物包含層までの耕作土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北ともに4m間隔のグリッドを設定し、東からA1～A10Gr、B1～B10Grとした。調査面積は、東西約35m、南北約5mの約175㎡である。なお、水処理のために調査区を囲むように約30cmの幅で側溝を設定している。

層　　序（第72図）

調査区が東西に長いために調査区における堆積土は一定ではないが、水田耕作土を除くと基盤層までの層厚は約20cm程度である。また、Ⅱ・Ⅲ区での基盤層が灰白色シルト質土であるのに対し、Ⅲ区ではやや粘性の強い褐色シルト質土に変化している。この褐色シルト質土は、Ⅰ区6～9 Grにかけての基盤層とよく似ており、相対的にみると北東―南西方向に帯状に伸びているものと推測される。

西側での堆積は、耕作土の下には褐色粒子を含む暗褐色粘質土が堆積し、地山である褐色シルト質土上面には灰褐色土や細かい砂利を含む暗褐色土が堆積している。一方東側には、上層に5 mm～1 cm大の砂利を含む灰色土が広く上層に堆積し、その下には砂利を多く含む灰褐色土が堆積して褐色シルト質土へと達している。

遺　　構（第71図）

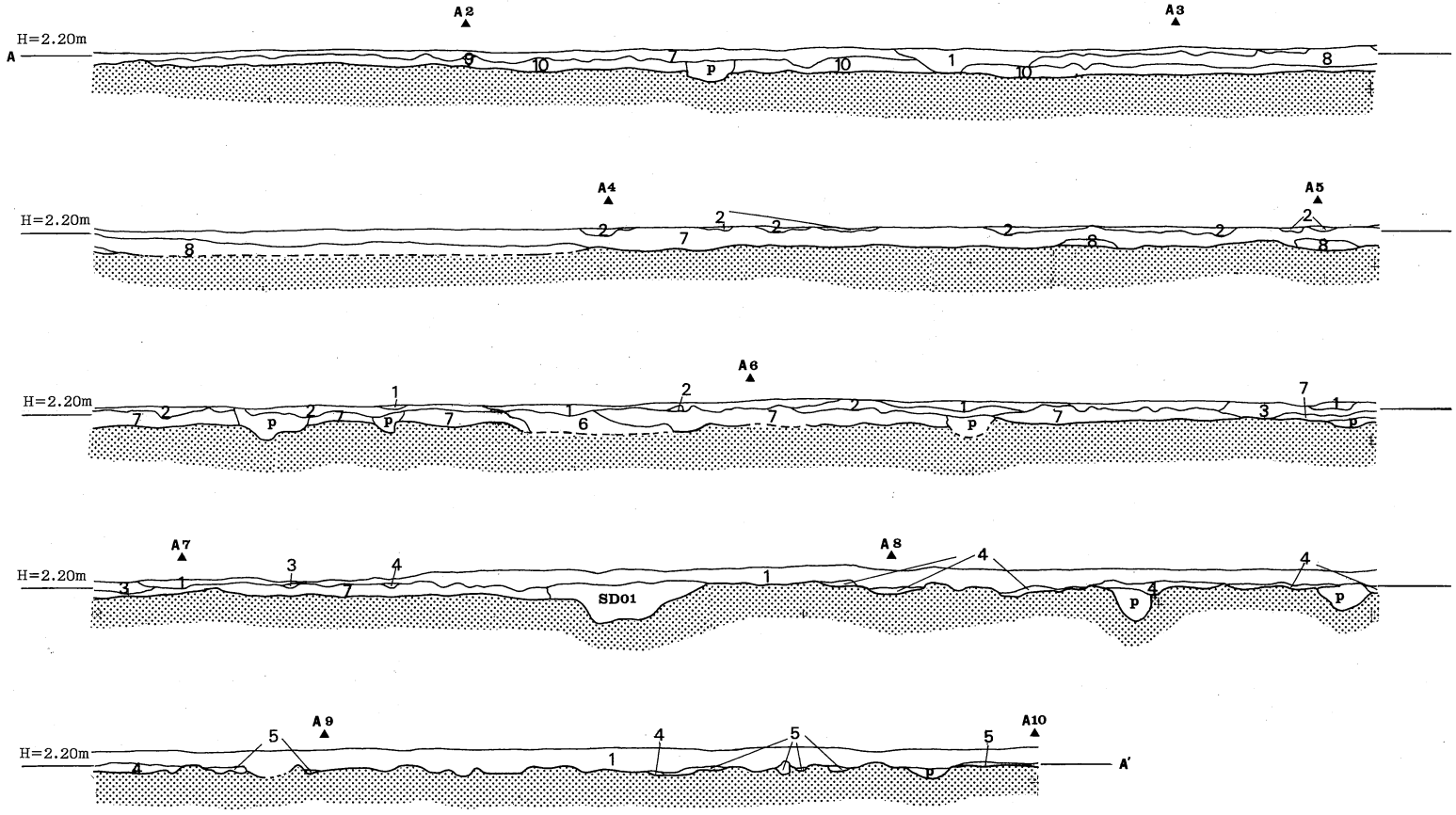
遺構は、溝状遺構1、土壙状遺構1、落ち込み状遺構やピット状遺構を多数検出しており、検出数は500を超えている。遺構が築かれた時期は、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけてのもので、Ⅰ区で確認されていたように、西側に弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構、東側で古墳時代中期頃の遺構が配置される傾向にある。

このうち、ピット状遺構にはさまざまな形態を示すものがある。5～6 Grで検出されたピット状遺構は、その覆土のほとんどに炭化物を含んでおり、何らかの要因により物を燃やしたか、あるいは焼失を受けたものと考えられる。7～9 Grにかけては掘立柱建物跡とはならないが、底面がほぼ一定レベルの一列に配置されるピット列が確認されている。また、8 Gr以西に密集する5 cm程度の小ピットは、プラントオパール分析により稲作が行われていたことが明らかとなっている。井原遺跡における経済的基盤として稲作が行われていたことを示す貴重な資料である。

遺　　物

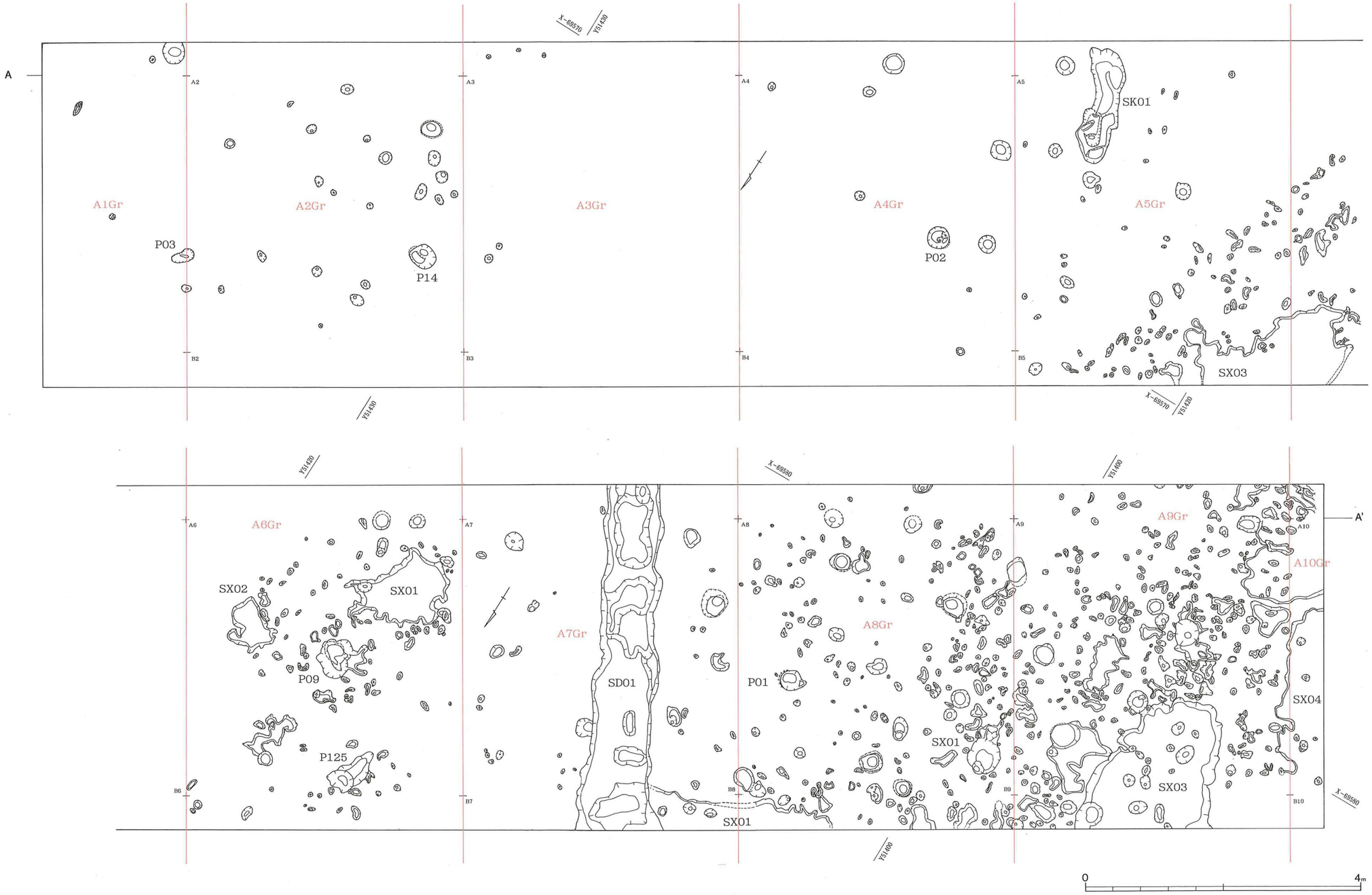
遺物は、地山である褐色シルト質土上面に堆積する全ての層に包含しており、弥生土器・土師器・須恵器などを検出している。なかでも、古墳時代中期頃の遺物が最も多く、その他Ⅱ区で検出された移動式竈や近世磁器・胸胎染付なども出土している。

また、Ⅰ区と同様に調査区の東側で古墳時代中期頃の遺物が多く、西側でやや古い時期の遺物が検出されていることが注意される。



1.灰色土　5mm～1cm大の砂利を含む
2.黒褐色土
3.黒褐色土　5mm～1cm大の砂利を非常に多く含む
4.灰褐色土　砂利を多く含む
5.褐色土　粗砂を多く含む
6.暗褐色粘質土　褐色粒子を含む
7.暗褐色粘質土　褐色粒子を含み、6層より明るい
8.暗褐色土　5mm以下の砂利を多く含む
9.灰色土
10.灰褐色土

第71図　Ⅲ区堆積土層図



第72図　Ⅲ区遺構配置図

2．遺構と遺物

遺構は、調査区の東側で密に検出されており、溝状遺構１、土壙状遺構１のほか落ち込み状遺構やピット状遺構を多く検出している。

SD01（第73図）

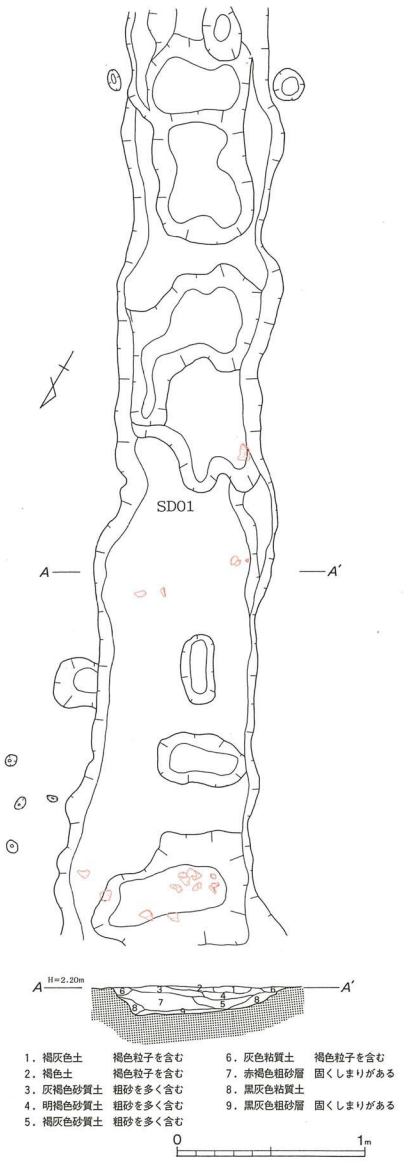
調査区のやや東寄り、7Grの褐色シルト質土上面で検出した北北東－南南西に基軸をもつ溝状遺構である。調査地は近年まで水田として利用され、上部は削平を受けているものと考えられるが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況では、検出長5.0m以上、最大幅1.26m、狭いところでも80cmを測る。なお、検出高は標高約2.00mで、Ⅲ区の東側ではⅡ区の遺構検出面とほぼ同様のレベルにある。

覆土には、上層に褐色粒子を含む褐灰色土や褐色土など褐色系の土が堆積し、中層には粗砂を多く含む明褐色砂質土・褐灰色砂質土・赤褐色粗砂層、下層には黒灰色粘質土や固くしまりのある黒灰色粗砂層が堆積している。断面の形状は、基本的には両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。しかしながら、溝の中にさらにピット状に深く掘り込んで底面を丸く作り出しているところがあり、溝内のレベルにはかなり凹凸が認められている。

遺物には、須恵器や土師器の小片が多いが、古墳時代中期頃の特徴をもつもので、遺構が築かれたのも当該期であろう。なお、遺物は溝内をさらにピット状に掘り込んだ北側で多く検出されている。

遺構の性格は判断しがたいが、覆土の下層には粘質土と粗砂層が堆積していることから、ある程度堆水していた時期があったものと推測される。なお、底面には凹凸があり、形状や方向から考えてもⅠ区のSD01などの遺構と一致するものとは考えにくい。



第73図　SD01実測図

A5Gr SK01（第74図）

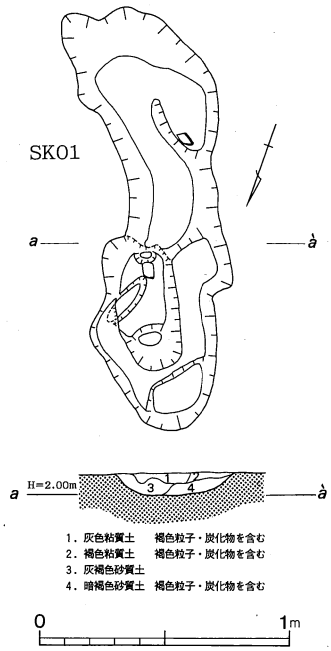
調査区のほぼ中央、5Grの南側で検出した土壙状遺構である。平面プランは、長軸長1.70m、最大幅54cmを測り、北北東－南南西に基軸をもつややいびつな楕円形状を呈している。なお、検出高は標高2.09mである。

覆土には、上層から下層にかけて炭化物を含む粘質土が堆積し、褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面は丸く作り出す傾向にあるが一定で

はなく、北側では約５cmと浅く、南側ではさらに深く掘りこんで最深部までの深さは約15cmを測る。

遺物には、赤色塗彩された土師器高坏の小片が出土している。その特徴から、遺構が築かれた時期は古墳時代中期頃と考えられる。

遺構の性格は現状からは判断しがたいが、覆土に炭化物が認めらていることが注意される。５～６Grで検出された遺構の覆土からは、そのほとんどに炭化物が認められ、この地域で何らかの要因により物を燃やしたか、あるいは焼失を受けたものと推測される。



第74図　A5Gr SK01実測図

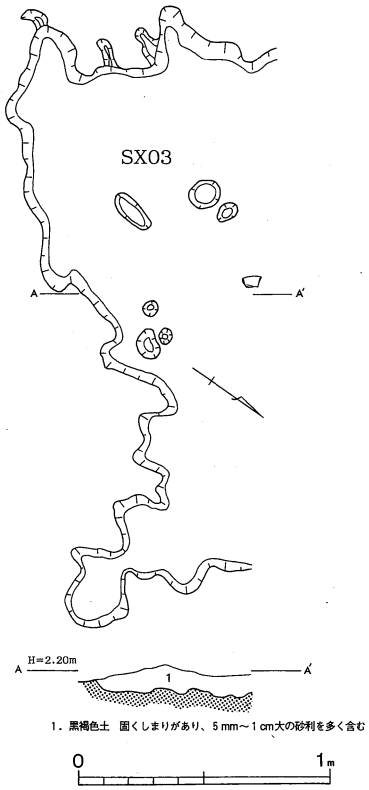
A5Gr SX03（第75図）

5Grの地山である褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。南側は調査区外へ達し、上部は削平を受けているものと考えられるが、現状では長軸長約4.80m、最大幅約2.0mを測るいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高2.00mである。

覆土には、５mm～１cm大の砂利を多く含む黒褐色土が一様に堆積している。また、黒褐色土中には炭化物が認められ、固くしまりがある。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面には随所にピット状のものを掘り込んで凹凸が認められ、最深部までの深さは10cmである。

遺物には少量ながら古墳時代中期頃と考えられる土師器高坏などが出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。

調査区外へと達しており、形状が不明確であるために遺構の性格は判断しがたい。しかしながら、覆土に炭化物が認められることや5Gr以西で検出した落ち込み状遺構内からは、総じて５mm～１cm大の砂利を多く含んでいることが注意される。そして、この付近に存在する小ピット内からは、プラントオパールが検出されている。以上のことから考えると、SX03は稲作に関連した機能をもつ遺構の可能性もある。



第75図　A5Gr SX03実測図

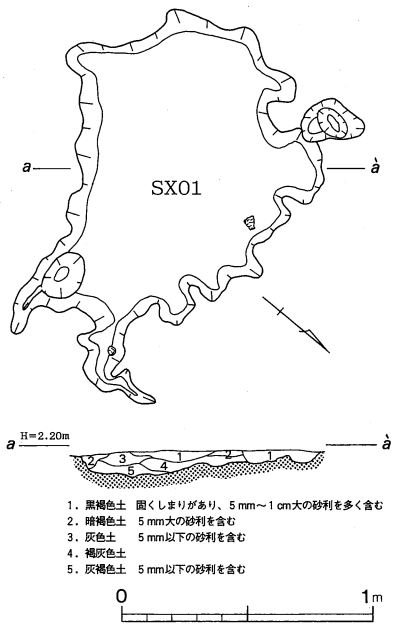
A6Gr SX01（第76図）

6Grの地山である褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。平面プランは、長軸長約3.0m、最大幅2.0mを測るいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高約1.98mである。

覆土には上層に黒褐色土、暗褐色土が堆積し、下層には灰褐色土が堆積しており、一様に５mm～１cm大の砂利を多く含んでいる。断面の形状は、北側では緩やかに、南側ではやや鋭角に落ちて底面はやや丸く作り出す傾向にある。遺構北側に最深部をもち、深さは10cmを測る。

遺物には土師器小片が認められるが、この遺物からは時期的判断はできない。しかしながら、覆土の状況が他の落ち込み状遺構とほぼ同様であることから、古墳時代中期頃に築かれた可能性が高い。

遺構の性格は現状からは判断しがたいが、前述したA5Gr SX03と同様に覆土には5mm～1cm大の砂利が多く認められ、10cm程度の深さをもつことから、同じ機能をもつ遺構と推測される。



第76図　A6Gr SX01実測図

A6Gr SX02（第77図）

A6Grの地山である褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。平面プランは、長軸長約80cm、最大幅60cmを測るややいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高2.17mであり、5Gr以西での検出面が約2.00mであるのに対し、地山の標高が微高地状に上昇している。これは、Ⅰ区9Gr付近における地山の上昇と関連し、この地域では南西－北東方向に帯状の微高地が存在していたものと推測される。

覆土には、固くしまりがあり、5mm～1cm大の砂利を多く含む黒褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はレンズ状に丸く作り出し、最深部までの深さは5cmを測る。

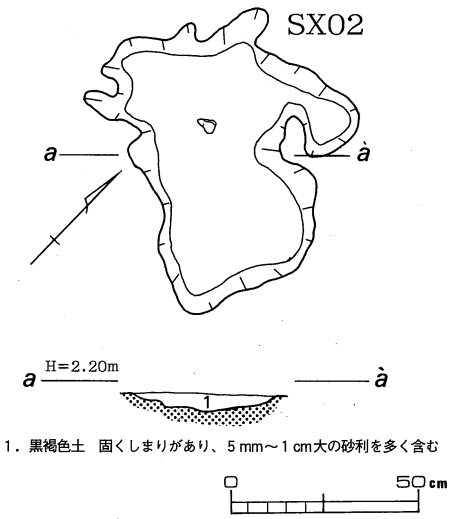
遺物には、古墳時代中期頃と考えられる土師器小片が出土しており、遺構が築かれたのも当該期であろう。

遺構の性格は判断できないが、覆土や深さなどから考えると、A6Gr SX01とよく似ており、同様の機能をもつものと考えられる。

A7Gr SX01（第78図）

7～8Grにかけての北側で検出した落ち込み状遺構である。北側は調査区外へと達し、上部は削平されているものと考えられるが、現状では長軸長5.60m、短軸長約1.0mを測る。また、東側では古墳時代中期頃に築かれたと考えられるSD01と切合関係があり、SD01よりも古い時期の遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高2.20mである。

覆土には、5mm大の粗砂を含む灰色土が一様に堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面をほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは7cmである。また、遺構内の東側の底面にはさらに深さ5cm程度のピット状遺構が掘り込まれている。

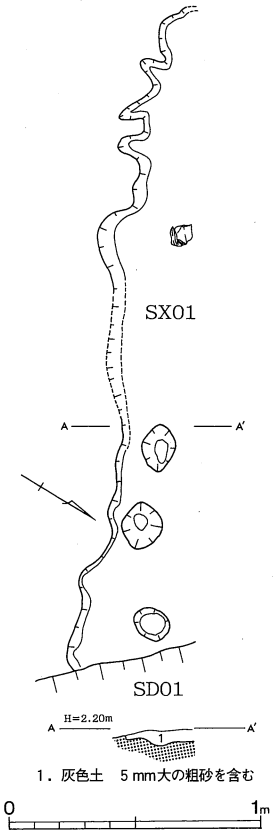


第77図　A6Gr SX02実測図

遺物には、口縁部中位に稜をなす土師器甕片が出土して

いることから、古墳時代中期頃に築かれた遺構と考えられる。

遺構の性格は判断しがたいが、SD01と切合関係にあることから、前述した同様な覆土をもつ落ち込み状遺構は、SD01よりも若干古い時期に築かれたものと考えられる。



第78図　A7Gr SX03 実測図

A8Gr SX01（第79図）

A8Grのやや北側で検出した落ち込み状遺構である。平面プランは、現状では長軸長85cm、最大幅45cmを測り、北側に張出すいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高2.20mで5Grからしだいに地山である褐色シルト質土は上昇し、微高地状となっている。

覆土には、固くしまりがあり、5mm～1cm大の粗砂を多く含む灰褐色土が堆積している。断面の形状は、北側では肩部から緩やかに落ちて底面はレンズ状に作り出しているが、南側では一段高い平坦面を作り出している。覆土は同様であるが、北側では径45cm程度を測る円形状のピットを意識しているものと考えられ、最深部までの深さは12cmを測る。

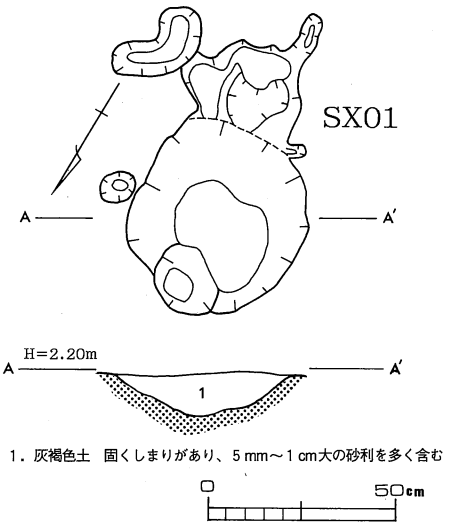
遺物には、土師器甕が1点出土している。第80図－1は、複合口縁の稜に厚みがあり、水平方向に鋭く突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。このような特徴をもつ甕は、古墳時代前期に相当する資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。

また、この遺構は8～9Grにかけて存在する他のピット状遺構との間に、幅約1.2m間隔で配置されていることが注意される。これらのピット状遺構には掘立柱建物跡などの配置は認められないものの、少なくとも3方向に基軸をもつピット列が確認されている。そして、周辺の小ピット内からプラントオパールが検出されていることを考えると、水田を区画する柱列、あるいは柵列などの機能をもつ可能性があろう。

A9Gr SX03（第81図）

9Grの北側で検出した落ち込み状遺構である。北側は調査区外へと達し、上部は削平されているものと考えられるが、長軸長2.25m、短軸長1.80m以上を測り、現状からは南北方向に基軸をもつものと推測される。なお、検出高は標高2.20mである。

覆土には上層に灰褐色土、下層に灰色土が堆積しているが、ともに粗砂を多く含み、しまりがある。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、最深部までの深さは10cmを測る。また、遺構内にはさらにピッ



第79図　A8Gr SX01実測図